

911.15-F76-3ㄅ



1200500755356

91115

5



始



219F13

911.15
#2
F76-3



福井久藏著

近世和歌史

東京 成美堂發行

はしがき

生命をうちこんだ古人の藝術に對し妄に批評を加へるのは非禮の甚だしいことであり、また史と命じながらも十分にその眞をうつし出せないのは世に對して罪深いことを怖れつゝ、著者が敢へてこの書を出したのは自分が敷島の道に精進してゐるといふのではなくても、三千年來の傳統をもつ我が國民文學に執を有することが世の人並に年久しいので、夙くより和歌の完い歴史がさるべき人々の手によりて世に公にされるのを望んでゐた。その心の焦燥から自分も嘗て書きつけて置いた舊稿をとり出し、譬へばいかめしい御行列の露拂に自らも加はつてゆくやうな心もちで徒に活字子を煩して見たのである。稿本は上代より明治の御代に及んでゐるが、可成り浩瀚であるのでこれを裂きてまづ近世の部を公にすることゝしたのは現代に近く諸派の流も交りて趣味多く、書肆の望むところもあり、また自らも多少力を注いだ所もあると信するので終にこの擧に及んだのである。併し斯道に詣り深い人の眼には定めてをかしき節々いたらぬ隈々の多く、特にこの期間には先進の作



二
もあるに鳥濤のことだと見られる方があるかも知れぬが、これが動因となつて一日も早く斯道の博士が完きものを公にされるやうになるならば著者の本懐は十分に達しられるのである。今この書の不備に對し世の導師が道の爲に三十棒を喰はして我が蒙をお啓き下さることを衷心より冀ふ次第である。

昭和五年七月病床に横りつゝ筆を執る

小松園のあるじ

凡例

一、この書は我が日本和歌史の一部を構成するものであつて、慶長の昔より明治維新に至る約三百年間の斯壇の狀勢を述べ、その代表的作家の佳作を引き、以て和歌全般に關する發達變遷を叙することを旨とした。

一、この時代に於て和歌は國民一般に普及し、各階級に互りて幾多の作家を出し、種々の作品を遺したのみならず、現代と最も緊密な交渉を有するが故に、上代中古近古に於ける和歌史に比し、決して劣らない興味と研究の必須とを有するものと信じ、舊稿日本和歌史の中、まづこの篇を公にし世の指教を俟つこととした。

一、この期間の和歌界を通觀するに、室町時代より繼承し來つた當流即ち二條派の隆盛を極めた時代と、その拘束を嫌ひこれに反抗する氣勢を揚げ、次いで古典派の勃興した時代と、それより一轉して擬古派を斥けたたゞごと派の發生、これに續いて桂園派の榮えた時代、これと並んで古體今風兩ながら詠じた伊勢派の行はれた時代と、最後に尙今派の唱へられた時代とに區分

二
されることゝ思ふ。併し以上の諸派は新しい一派が起つたからといつてもとある一派が忽に亡んでいつたのではなく、互に對立して長く續いてゐる場合もあり、新しい説を唱へてもその主張に伴ふ作品を出さないで依然たる古い歌を詠むのもあり、古い派の中にも新しいものを取入れて詠むもあり、或は一流に固守しないで他流を兼ねて詠むもあり、その間には出入が頗る多く、非常に複雑をきはめてゐるのであるから、只簡單に上記諸派だけに片附けてしまふ譯にゆかない。そこでこの書には種々の點から考察することゝした。

一、近世文學史上では我が文化の中心が上方にあつた時代と江戸に移つた時代と江戸の隆昌を極めた時代等と区分するのが通例であるが、和歌は全體より見れば地理的區分はさまで重要性がないやうに考へられる。古典派は關東地方に、古體近風併用派は伊勢及濃尾地方に、たゞごと派は主に京都地方に行はれた趣もあるが、同一地方に只一派のみが必ずしも行はれてゐたと限らないから、地方文化史を編む場合と異なつて地方的にはあまり重きを置かなかつた。

これよりも寧ろ社會の階級から見ると一つの便法と考へた。即ち前に挙げた諸派の外に、諸侯とか神道家とか儒者とか僧侶とかいふ如き題目を設けて説いたところもある。近世に於ては階級制は嚴守されたが、今日の如くブルとかプロなどいふ如く階級文學は認められなかつたが、神道家には敬虔な態度で神に奉仕する特別の心持を詠んだ作がありはしないか、また儒者には倫常の徳を諠つた作が多いではないか、僧侶には常樂涅槃の思想を多く諠つてはないかといふことを觀たり、また諸侯はその治めてゐる一國一城の文化を左右する力をもつてゐたから、治國撫民の心を述べた作はないかと考へるのも一つの法と考へたからである。但しその中に特色があつて叙説を要する人は別に章を立てた。例へば田安悠然公の如きは諸侯の部に入れないで賀茂真淵の次に一章を設けた如きはそれである。またある階級に屬した人でも歌風の關繫から他の流派の中に收めた例もないではない。誠拙禪師を桂園派に入れた如きはそれである。統一がないやうであるが、とり纏める便宜を考量した結果である。

一、作品を味へるにはその人を知りその時代を知るの必要があると思惟した

ので、作者の略歴を叙しその年代を擧げるに努めた。また歌論史に屬することゝ、その主張するところがその作物に影響のあるものはこれを引いた。但しその委しきは歌學史に譲つて省略した場合も少くない。

一、集の傳來異本等のことは時に多少觸れたところもあるが、それは書史學の方に譲つて贅しないことゝした。

一、幕末の名高い歌人で橘曙覧・大隈言道・井上文雄・八田知紀・大田垣蓮月・高島式部・神山魚貫・伊能穎則等の如き維新當初若しくはその後までも存へた人々もこの書に説いた。これはその人々の斯壇に活躍した時代は維新前であるとか、或は歌派の關繫とを考慮して便宜上こゝに并せたことを斷つて置く。

一、近時文運の隆盛なるにつれて和歌の觀方も大に進んで來た。古來秀歌といはれてゐたものもその値を云爲され、高い地位にあつた作家もその王座から引き下されるやうな類がないでもない。往年子規子が眞淵を貶して元義を揚げた如き類はそれの一例である。かゝる言説には相應の理由もあることであるが、翻りて考へるに、歌に對する意識といふものが古人は今

人と必ずしも一樣でない。故にもし狭い考をもち一つの尺度ばかりで律するならば、到底古の歌壇の狀勢を明にすることは難い。須らく社會の狀勢を心に置き、自ら當時に存へてゐて、靜に汎く深く考察するといふ態度でないときは、その所説が偏見に陥り易い。特にある種の主張又宣傳を含んでゐる言説は大に斟酌して見る必要があると思ふ。著者は當時の歌壇をなるべくだけ如實にあらはすといふことに力點を置いた。

一、代表作をとるには集又は詠草を通讀してなるべく佳なるものをぬいたが、その數には自ら制限があるので、十分にその歌風を悉すに足らないことを虞れてゐる。但し著名の作家には比較的多くの例を擧げて置いた。これにつけても一集の中から數首をぬくことは容易いことでないことを體驗し、先進の勞力の少くないことを知つた。

一、この書には作家を十分に理解する爲にその筆蹟や肖像を入れた。その數四十に餘つてゐるが、尙加へたいと思ふものが鮮くない。但し頁數の關繫上割愛したことを斷つて置く。尙その原本は主に著者の手許に存するものより採つたので、必ずしも代表的の佳作でないのが交つてゐることをも

一言添へて置く。

一、本書にはさきに公にした和歌連歌叢考と同一の題材をとり扱つたものが多少交つてゐるが、この書の體裁上省くことが出来ない爲に止むことを得なかつたのである。讀者諸君の寛容あらんことを祈るのである。

一、本書には歌道年表と著者及書名件名の索引を附録として後に加へた。但しこの期間に成つた書籍に關しては先に出した拙著大日本歌書綜覽に委しく擧げてあるから幸に參照されることを望む。

目次

第一	序説	一
第二	細川幽齋	三
第三	雲上の和歌	七
第四	木下長嘯子	一三
第五	和漢十題會	二一
第六	見樹院立詮の長歌	二九
第七	堂上の諸家	三一
一、	中院家	三二
二、	烏丸家	三六
三、	三條西家	四一
四、	飛鳥井家	四二
五、	冷泉家	四四
第八	地下に於ける當流	四五
第九	長嘯子門下の人々	五一

第十	漢學者と和歌	五五
第十一	神道家の和歌	六三
第十二	僧侶の和歌	六七
第十三	諸侯の歌人	七四
第十四	徳川初期に於ける堂上諸家の門人	八四
第十五	傳授思想の排斥	八八
第十六	下河邊長流	九六
第十七	圓珠庵契沖	一〇三
第十八	徳川光圀の歌文に於ける事績	一一二
第十九	寛文より享保に至る雲上并に堂上和歌	一一八
一、	清水谷實業	一二〇
二、	武者小路實隆	一二二
い、似雲	ろ、拓植知清	は、玄無
三、	中院通躬	一二六
四、	烏丸光榮	一二七
第二十	當代に於ける諸侯の和歌	一二八

第二十一	當代に於ける漢學者の和歌	一三四
一、	藤井懶齋	一三五
二、	五井持軒	一三七
三、	三輪執齋	一三九
四、	雨森芳洲	一四三
五、	室鳩巢	一四五
六、	赤壁汝栖	一四六
七、	萩生徂徠	一四七
八、	太宰春臺	一四八
第二十二	荷田春滿	一五〇
第二十三	古今主義と新古今主義	一五五
第二十四	荷田在滿と國歌八論	一五九
第二十五	賀茂真淵	一六三
第二十六	田安悠然公の天降言	一七三
第二十七	縣居門下の歌人	一七六
一、	擬古典派	一七八
い、掛取魚彦	ろ、目下部高豊	は、村田春郷
		に、海量法師

二、	ほ、谷眞潮	へ、荒木田久老	と、栗田土満	四
	中庸派			二八四
三、	い、小野古道	ろ、河津宇萬伎		
	新古典派			二八六
	い、加藤千蔭	ろ、村田春海		
四、	建部綾足と片歌			一九五
五、	縣門の女流			二〇〇
第二十八	文學東遷期より江戸文學隆昌期に於ける堂上并にその門流			二〇五
	有栖川宮の流			二〇五
一、	烏丸光胤			二一〇
二、	日野資枝			二一〇
三、	飛鳥井雅香			二一一
四、	芝山持豊			二一一
五、	谷川士清			二一二
六、	猪苗代兼直			二一三
七、	賀茂季鷹			二一四
八、	三島景雄			二一六
第二十九	冷泉爲村とその門流			二一七
一、	萩原宗固			二二一

二、	石野廣道	二二二
三、	宮部義正	二二五
四、	涌蓮慈延と梨木祐爲	二二六
五、	祇園の三女	二二八
第三十	武者小路家の門下	二三〇
一、	澄月	二三一
二、	伴蒿蹊	二三二
第三十一	北邊家及其の門人	二三五
第三十二	文學東遷期より江戸文化隆昌期に於ける諸侯歌人	二四二
第三十三	同期間に於ける儒流の和歌	二五四
第三十四	本居宣長の古體近風	二六九
第三十五	鈴屋門下の歌人	二七七
第三十六	たゞごと派	二九三
第三十七	上田秋成	三〇五
第三十八	桂園派	三一〇
第三十九	加藤千蔭の門流	三一九

一、	清原雄胤とその門人	三一九
二、	一柳千古とその門人	三二七
三、	木村定良	三二三
四、	村山素行	三二四
五、	大石千引	三二五
六、	岡田眞澄	三二六
第四十 村田春海の門流		
一、	清水濱臣	三二六
二、	小林歌城	三二七
三、	本間游清	三三〇
四、	片岡寛光	三三三
五、	秋山光彪	三三六
六、	高田與清	三三七
七、	岸本由豆流	三三八
八、	山本正臣大江廣海古田廣計	三四〇
第四十一 本居家の門流		
一、	石川依平	三四一
二、	千葉葛野	三四二
三、	山内道古	三四四
		三四六

四、	大倉鷲夫	三四六
五、	青木永章	三四七
六、	中山美石	三四九
七、	石津亮澄	三四九
八、	伊藤常足	三五〇
九、	長澤伴雄	三五〇
十、	山内繁樹	三五一
十一、	飯田秀雄	三五二
十二、	西田直養	三五二
十三、	本居内遠	三五二
第四十二 平田篤胤及其の門流		
一、	堤朝風	三五九
二、	六人部是香	三六〇
三、	鈴木重胤	三六三
四、	羽田野敬雄	三六四
第四十三 幕末に於ける堂上歌人とその門流		
一、	千種有功	三六五
二、	澤田名垂	三六九
三、	畠山常操	三七一

四、	糟屋磯磨	三七一
五、	足代弘訓	三七四
第四十四	徳川末期に於ける萬葉風	三七六
一、	良寛	三七六
二、	生田萬	三八〇
三、	橋守部	三八四
四、	細木瑞枝	三八七
五、	鹿野雅澄	三八八
六、	和田殿足	三九一
七、	平賀元義	三九五
八、	安藤野雁	四〇一
第四十五	勤王家の和歌	四〇四
一、	高山正之	四〇五
二、	蒲生君平	四〇六
三、	藤田東湖	四〇七
四、	戸田忠傲	四〇九
五、	安政戊午の獄に關した志士	四一〇
六、	有馬新七と平野國臣	四一二
七、	佐久良東雄	四一六

八、	久板玄瑞及長藩三老	四一七
第四十六	女流の勤王家歌人	四二一
一、	村岡局	四二二
二、	若江薫子	四二三
三、	黒澤登鼓	四二三
四、	大橋卷子	四二六
五、	松尾多勢	四二九
第四十七	加納諸平及其の門流	四三〇
一、	岩崎美隆	四三六
二、	伴林光平	四三七
三、	飯田年平	四四〇
第四十八	桂園派の人々	四四一
一、	木下幸文	四四二
二、	熊谷直好	四四四
三、	高橋殘夢	四四六
四、	菅沼斐雄	四四八
五、	兒山紀成	四四九
六、	小野務	四五〇

七、 山田清安……………四五一

八、 穂井田忠友……………四五二

九、 誠拙禪師……………四五四

十、 中川自休……………四五五

十一、 源元……………四五六

十二、 内山眞弓……………四五六

十三、 竹内享壽……………四五七

十四、 米室長翁……………四五七

十五、 香川景恆……………四五七

十六、 八田知紀……………四五八

十七、 渡忠秋……………四五九

十八、 柳原安子……………四六〇

十九、 秋園古香……………四六一

二十、 高畠式部……………四六二

第四十九 江戸末期に於ける雑派……………四六二

一、 海野游翁及其の門流……………四六二

い、前田利保 ろ、仲田顯忠 は、半井梧庵……………四六七

二、 井上文雄……………四六七

三、 久具正典……………四七二

四、 中島廣足……………四七六

五、 田園歌人神山魚貫……………四七九

い、椿仲輔 ろ、三橋鶴彦 は、鈴木雅之 に、林保綱 ほ、伊能穎則……………四八三

第五十 大隈言道……………四八三

第五十一 野村望東尼……………四九四

第五十二 橘曙覧……………五〇〇

第五十三 大田垣蓮月……………五一三

第五十四 三百年歌壇の回顧……………五一八

附録

歌道年表

人名書名件名索引

挿入寫眞版目次

一、玄旨法印の短冊……………五〇

一、舉白集板本……………六九

一、中院通茂公の短冊……………九三

一、鳥丸光廣の書翰……………一〇〇

一、北村季吟の短冊……………五〇

一、澤庵禪師の色紙……………六九

一、梨本集板本……………九三

一、下河邊長龍の短冊……………一〇〇

一、圓珠庵契沖の短冊……………	一〇七	一、千種有功卿の掛軸……………	三六六
一、徳川光圀卿の木像……………	一一二	一、生田萬の短冊……………	三八三
一、荷田春滿の短冊……………	一五二	一、橋守部の長歌掛軸……………	三八五
一、賀茂眞淵の懷紙……………	一六七	一、鹿持雅澄の短冊……………	三九〇
一、田安宗武の短冊……………	一七四	一、平賀元義の掛軸……………	三九八
一、加藤千蔭の掛幅……………	一八七	一、平野國臣の捻紙和歌……………	四一五
一、村田春海の豎詠草……………	一九一	一、村岡局の色紙……………	四二二
一、建部綾足の家集稿本……………	一九六	一、加納諸平の短冊……………	四三三
一、牧野忠敬侯夫人の家集稿本……………	二〇三	一、誠拙禪師の筆跡……………	四三五
一、富士谷成章歌稿……………	二三八	一、八田知紀の掛軸……………	四五八
一、松平定信の字下入言の稿本……………	二四九	一、前田利保の懷紙……………	四六六
一、本居宣長の四季掛軸……………	二七一	一、久貝正典の短冊……………	四七二
一、本居大平の歌論の消息稿……………	二七九	一、中島廣足の豎詠草……………	四七八
一、小澤蘆庵の掛軸……………	二九五	一、神山魚貫の短冊……………	四八〇
一、上田秋成の掛軸……………	三〇六	一、大隈言道のひとりごちの稿本……………	四九三
一、香川景樹の掛軸……………	三一〇	一、野村望東尼芭蕉色紙……………	四九八
一、清水濱臣の懷紙……………	三二八	一、橋曙覽の短冊……………	五〇五
一、石川依平の掛軸……………	三四三	一、大田垣蓮月の短冊……………	五一四
一、平田篤胤の短冊……………	三五五		

(終)

近世和歌史



序説

我國の歌は遠く飛鳥藤原寧樂の御代に勃興した。歌聖柿本人麿を始め、旨と人生を謳った山上憶良、自然美を頌した山邊赤人、享樂主義を詠じた大伴旅人、傳説詩人と云はれてゐる高橋蟲麿、萬葉の撰者に擬せられてゐる大伴家持より女流に至る大小の歌人が夥しく出て不朽の作を遺した。平安朝の初期は漢文學に壓倒せられて和歌は一時振はなかつたが寛平の頃より再び隆昌となり延喜の御代に紀貫之・凡河内躬恆等が古今集を撰してより後の歌人は永しへにこれを範と仰いだ。寛弘時代には貴婦人の作家が多く出て古今の後を輝した。鎌倉時代の始に、至りて雲上堂上地下僧俗男女の夥しい作家が輩出し紅白青紫さまざまの綾錦を織り出し所謂新古今時代を現出した。我が歌を説くものはいづれも皆この三時代を論じないものはない。併し近世に

於ける和歌史も講究すべきことが多く、吾人の興趣をそゝるものが少くない。世は刈菰と亂れてゐた室町末期を一過して江戸幕府の始に到るや學問の奨励と印刷事業の急展とにより各人文字に親しむことが容易となり、従來限られてゐた和歌界は禁裏堂上から諸侯へ、儒者神官僧侶より耕人漁夫さては賤しい女人に至るまで皆これを嗜まざるなき狀勢となつた。儒學の奨励は和歌にも新しい題材を加へることゝなり、神道佛教と共に三教は歌道に抱合されることゝなつた。一たび雲上で類題集の撰あるや武林草莽の間にもさまざまの私撰集は數へきれない程撰まれるやうになり、傳統を旨とし拘束の多い當流に對し破壊の運動を起すものも生じ、古典研究から萬葉への復興となり、また一方には上代の素朴を嫌つて詞華言葉を貴ぶ新古今の鼓吹となり、古語を斥け現代語を用ゐることを主張するたゞこと派を生じたり、古へにも偏らず新しきにも趨らずひたすら溫雅を旨とする古今集の祖述となり、尙古派對尙今派の運動を起したり、古調新風のあげつらひとなり、一方にては調べの説、戀歌の論、物のあはれの説など歌論上にも様々の花が咲き、作物の上にも長歌の復興となり、旋頭歌片歌の試作となり、詠史歌の隆昌を來たし、尊王愛國の

歌が興り、さては俳諧歌狂歌の流行を生じ、作家より見ても古典派の賀茂眞淵・田安宗武・僧良寛・平賀元義・和田嚴足等より、たゞこと派の小澤蘆庵・桂園派の香川景樹・熊谷直好・新古典派の橘千蔭・伊勢派から出た加納諸平・江戸派の末流井上文雄・幕末または明治歌壇を飾る新歌人大隈言道・橘曙覧・野村望東・大田垣蓮月等の集にはとこしへに傳ふべき創作がある。この期間は種々の作家や様様の集が出たばかりでなく、上は萬葉古今新古今の研究をうけつぎ、下は明治後期の新しい歌壇をつなぐ點から見ても吾人は研究と憧憬とをもたなくてはならぬと思惟する。以下次第にこれが史實に基きその代表作をぬき、各方面に於ける交渉を明にしようと思ふ。

第二 細川幽齋

徳川時代の當初は足利氏の季世織豊時代の繼承である。長い年月の間九重の帝都も地方の城市も戦亂が打續いて生活はおびやかされ人々餘裕のなかつた爲に、その文運は洵に見じめの有様であつた。傳統的に文學の權威であつた公卿の或るものは地方に趁つて苟安を求めなどして、纔に亡びかけた歌

定家卿の再
來

道を徳川時代に引継いだのは細川幽齋その人である。幽齋は諸道に教養のあつた武將で、一派の人々からは歌道に於ける定家卿の再來だとたゞへられた。慶長五年天下分目の大戦争のあつた時、幽齋は徳川方に聲援して丹後の田邊舞鶴の城に立て籠つてゐた時、勅使や皇弟八條宮智仁親王の御使が下つて、幽齋の傳へた歌書の亡びないやうに、また反對の石田方に對しても命請を仰せ下されるといふ程世に惜まれたもので、舊幕時代に熊本侯が參勤の往還に墨塗金九曜の紋章の輝いた大小三個の長箱を行列の先頭に立て、露拂が「下に」と喝道の聲勇ましく嚴かに護つていつたのは、曩祖幽齋から家傳の古今傳授の巻物が收めてゐる爲だと聞いてゐる。

二條派の正統

その著作と
事業

幽齋は二條派の歌學の正統を襲いだ人で、竹園にありては桂宮智仁親王、公卿にありては中院通勝、烏丸光廣、三條西實條等に、民間にありては松永貞徳、佐方宗佐等にその道を傳へ、また一方に於ては詠歌大概抄百人一首抄、伊勢物語闕疑抄、歌仙歌集、解難抄等當時歌に志す人の必ず讀むべき歌書の注釋を作り、また人々の作歌に加點する等、斯道に盡瘁することが少くなかつた。門人の聞書となした耳袋記や和歌受用集などを見ても、當時の先覺であつたことが窺

衆妙集

はれ、啓蒙時代に於ける明星であつたことが首肯される。その歌學説は拙著大日本歌學史に述べて置いたから茲には省き、その家集衆妙集に就きて少しく述べる。

幽齋は歌に連歌に紀行に色々の書を著したが、家集は自選しなかつた。その曾孫宇土侯細川丹後守行孝がその詠草を纂め、烏丸資慶卿に撰を請うたが事終らない中に薨去されたので、飛鳥井雅章卿が代つて撰んだもので、詠草の中



細川幽齋筆

より八百餘首をぬいてある。その原本は子爵細川立興家に傳へてある。座右に近代秀歌や毎月抄や正風體抄などを具へて、定家家隆は歌の中庸とたゞへてゐた人ほどあつて、その作風も純乎たる二條派にして、さすがに疵のない詠が多い。詠二十首和歌の中の江月を詠じた作に

風そよぐ入江の蘆のほのぼのと月になりゆく霧の空

の如き新古今の倂があつて、門人に遠白體、幽玄體、長高體をよくよく習ひすへて」と口授された幽玄體に屬するもの。地下三十六歌仙にとられてある

さすがまた小田もる賤も鹿の音の遠ざかるをば慕ひてや聞く

の如きは餘情あるもの。高野に上り、藤蔭先師の像に對ひその碑前に供へた中には

思ひきや青葉の藤のかげにきて散りにし花の跡とはんとは

の如き飾らず繕はずありのまゝにて感慨の深い作がある。八月十五夜に月蝕のあつた時、連歌師里村昌叱の庵で詠んだ作には

雲霧の外にもさはる月影やこよひの秋の恨なるらむ

の如きがある。陽光院の三回忌に清涼殿で法華懺法を行はれた時、雲客を始め高僧などの禮拜されたのを見て、菊亭右大臣に贈つた作には

けふといへば花も散りしく法の會に立居かさなる雲の上人

の如きがある。いづれもすらりとした瑕のない歌ばかりである。以上の如き上下を着けたやうな作の外、九州道の記の中には俳諧歌や口語歌も少しく詠み入れてある。例へば千利休に返した作には

俳諧歌及口語歌

幽齋の理想としてゐた委

天ぞかる鄙には猶ぞゐたむなきどつこも同じ浮世なれども
の如きはそれである。これらは唯一時の座典に試みたものに過ぎない。末松宗賢がそのかみ、幽齋の歌は源三位に優る」と云つた評語は疑問と思ふが、武將で風雅の嗜の深かつたことは相似てゐる。併し頼政の如き斯道に於ける日夕の執はなかつた。歌はどこまでも綾羅錦糸で作者は織手といふその理想は捨てなかつたのである。慶長十五年に七十七歳の時定家卿と同じ八月二十日に卒したのも宿縁淺からなかつたと云はれてゐる。

第三 雲上の和歌

外國の帝室のことはよく窺ひ知らないが、我が皇室におかせられるぐらゐる歴史文學を好ませられる例はまたとあるまい。古き跡は茲には述べないが、畏くも後陽成天皇は名所方輿勝覽二卷を欽撰遊ばされた。また百人一首詠歌大概等の歌書を御勅講遊ばされ、廷臣中敷島の道に志あるものに拜聞を許された。これらの人々の聞書が世に傳つてゐる。皇弟桂宮智仁親王は細川幽齋より古今集の奥義を傳へさせられ、その聞書三卷を始め幾多の歌、連歌の書

智仁親王

後陽成天皇

を遺してゐらせられる。親王が我が文學特に歌書の類を蒐集抄録遊ばされたものは随分少くない、いづれも桂宮本といへば結構なものである。典籍の蒐集といふことは當時は下々にては容易に企て及ばないことで、皇室に於かせられては歴世この點にも力を注がせられてゐるのは洵に有がたい事である。東山御文庫は學海の祕府であることは今日誰も知らぬものはないぐらゐであるやうに、圖書寮には舊桂宮御本が澤山に保存されてあつて私どもの如きもその惠澤を受けたことが少くない。智仁親王の御同胞曼珠院宮良恕法親王もまたこの道を好ませられたことは今一々記さない。

東山御文庫
と桂宮本

後水尾天皇

後陽成天皇の皇嗣後水尾天皇は智仁親王より古今傳授をお受遊ばし、斯道に御堪能におはしまし、一字御抄及類題寄書その他の書を御撰になつたことは曩に歌學史に述べて置いた。仙洞に御徒御の後この道の尊嚴を加へることに特に大御心を注がせられた。院は夙に選集の思召を懐かせられたが、世は蘆分小舟さはりが多くてその運に至らないので、せめては大御心より後延寶の頃に及び廷臣に命じ類題和歌集三十一卷を撰ばしめられた。載せてある題が一萬三千、歌は萬葉の古より近き世までのものを廣く求め旁く索りてそ

類題和歌集

勅撰名所和
歌抄の影響

の中から採擇せられた。方位五行・五常・五色・五味・六塵等の名數和歌并に遠近・深淺・多少・遲速・厚薄・親疎・清濁等の抽象的題目も少くない。例を古に取るそのかみの歌壇にとつては斯書の撰輯はいかに多くの福音を與へたかは想像の上に出る程である。尤も類題の撰は今川了俊の二八明題の如きも足利時代に成つてゐるが、この御撰の出た後この類の集が續々と撰まれるやうになつた。正親町天皇の御代に勅選名所和歌抄が出て以來民間にても宗惠の松葉名所歌集や石川清民の檜山拾葉や石出吉深の几右抄、西順の歌林名林考を續出した如く、内藤義泰侯の續類題和歌集や撰者未詳の類題落穂集や、惠藤一雄の拾題和歌集等種々の類題集が續出するやうになつた。上の好むところ下これに従ふの古言は歌道に於ては特に著しい。

鷗集集

御歴代の御製集のことは和田英松氏の御撰解題にも委しく拙著歌書綜覽にも擧げて置いたが、この院の御集は鷗集集と題した四卷本があつて歌員が少くない。御自選本の外に中院亞相通村の謹撰し奉つた御本も圖書寮にあり、異本が頗る多く、和田氏によれば十五本十一種に分れるといふ。尙一二本を加へられるかも知れぬ。中院通村卿に批評を需めさせられた十首御製から

今二三の例を引いて見る。

雪げにもくもりなれぬる空ながら春の霞の色ぞまがはぬ

ことしげき世をも忘れてつくんと心をわけぬ花にむかひて

始のは早春霞、後のは静見花の題であるが、始の一首には叙景の中に感慨が籠つてゐる。曇りなれぬる空といふ中に時世に對する鬱勃たる大御心がそれとなく配されてある。後の一首には御政務の間にも自然に親ませられた忘我の境地がよく謠はれてある。公卿法度などを幕府が定めて陽には朝廷を俗界より離し、陰には大權を恣にした時代で、目にあまらせられた事が多く、それがおのづから三十一字ににじみ出たと拜する聖作が鮮くない。述懐の題には特にそれが見られる。

御述懐

死なばやなもよほし草よ世の中の目にも耳にもあまることこそ

何事をなげきの森のしげからむ今いくほどの老のねざめに

の如き御製を拜しては畏さに涙こぼるゝのである。澤庵和尚に紫衣をお授けになつたのを幕府が拒んだ時には

蘆原やしげらば茂れ萩すゝきとても道ある世にすまばこそ

と遊ばされた。中院通村が江戸に下つた時、二代將軍秀忠から古今傳授を望まれた。通村はその道にあらざれば將軍といへども授ける譯に參らぬと手厳しく刎ね附けた爲に武家の勘氣を買ひ、江戸に抑留されたのをあはれと思召されて五首の御製をお遣しになつた。その中には

いかにまた秋の夕をながむらんうきは數そふ旅のやどりに

の如きがある。これに對して通村卿は

行く方に身をば誘はで夜な／＼の袖の露とふ武藏野の月

の如き御返しを奉つた。また寄月述懐の御製には

世をなげく泪がちなる袂にはくもるばかりの月も悲しき

の御製がある。歌は唯艶にやさしく詠むべしといふ信條により、時事に關した感慨を強く謠はなかつた當時にありて、御集の中にかゝる御歌を拜するのは空谷に梵音を聞く感がある。集の名を鷗巢とお命じになつたのにも深き御思召があつたことゝ信ずる。儒學の漸く興つた時代とて集中には孔子や顔回を詠じ、又五倫を賦してある聖作も見える。

儒教と御製

巷には繁るもよしや樂める道にさはらぬ葎よもぎふ(二)

天つ空くもりなきまで照月のうつれる水の色も濁らず(二)
雲井より澤邊に及ぶ聲すなり子を思ふ鶴もおもはるゝかな(三)

(二)は顔回を詠じたるもの、(三)は君臣の義、(三)は父子の親を詠じてあるものである。また人口に膾炙してゐる御製には

思ふこと一つかなへばまた二つ三つ四つ五つむつかしの身や

の如きがある。大森孝治の難波問答(潜龍閣本)に「歌はいかなる姿を以て學ぶべきとなれば、後水尾院御製を仰ぎ奉るべきなり」と見えてゐる。公卿の中には烏丸資慶、飛鳥井雅章、中院通茂、日野弘賢等は皆後水尾院の教を受けた人である。當時の諸大名などで歌に志のある人が勅點を得ていかに光榮としてゐたかは特記するまでもない。皇弟聖護院宮道晃、法親王、照高院宮道周法親王もこの道を好ませられ、皇嗣後西天皇、靈元天皇もその御志をつがせられ、皇室と歌道とが離るべからざるものゝやうになつてゐた。後西天皇の御集を水日集といひ、靈元天皇の御集を桃葉集といふ。尙後水尾院の御撰に地下三十六歌仙がある。これは後西天皇の御撰といふ説もあるが、後水尾天皇の御撰とする方が正しいかと思ふ。これは近代三十六歌仙とも集外歌仙と

もいひ、足利の末期から當時までの武家及連歌師などの中より抜かれたもので、堂上方が一人も入らぬといふところに特色がある。武將では

東 常 縁 大田持資 三好長慶 伊達政宗
木下勝俊 安宅冬康 細川幽齋 毛利元就
北條氏康 武田信玄 北條氏政 今川氏真

十二人、他は一二を除き宗祇、宗長兼載等より松永貞徳に至る連歌師である。如上の撰も和歌が民間普及の一現象と見るべきであらう。

第四 木下長嘯子

徳川時代初期に出た地下の歌人として傑出してゐたのは木下長嘯子を推さねばならぬ。長嘯子は豊太閤の甥若狭少將勝俊の後身で、幽齋と同じくもとは武人であつた。關ヶ原合戦の時は齡方に三十二の若盛りであつたが、宗家の傾くのを支へるのは難事と思つたか、首鼠兩端を抱いたとも云はれる、或は風流骨髓に泌み政權には戀々しなかつたのか、兎にも角にも一門の安危も顧みないで、洛東靈山に後には大原の里に世を背き、風流三昧に八十一齡を送つた。

交友極めて
廣く

山家記朝ぼらけ石枕記などを繕けば東山に於ける閑雅な生活がありありと目に浮ぶやうだ。攝家も駕を枉げ武將も馬を駐め、儒者も來る、連歌師も訪づれる、畫家書家茶人も到れば名僧も尋ねるといふ風で、九條攝政・松平定綱侯・藤原惺窩・林道春・里村昌琢・瀧本坊・小堀遠州・灰屋紹益・安樂庵策傳・文珠院應昌・見性院立詮・佐河田昌俊等一時の名流が悉く集り來つて、歌文を作り茶を立て香を聞き琴書徵逐に違なかつたやうだ。もし當人か侍者が如實に日記を録して置いたならばと思はしめるものがある。長嘯子は歌人で同時に文章家である。

東山の閑居

松や常盤木の生ひ茂つた中に松の柱茅の軒、函丈二間の壁には杜少陵が詩あはれなる古歌を色紙に押し、獨笑の室には唐土の書一千五百卷、撰集歌合物語草子などの國書二百六十部を置き、讀み疲れては一張の琴を調べる。前の谷に架けてある長嘯橋の彼方竹林の中には夏の寢所を設け、西南に二もとの松を軒につらぬかせて寄亭をしつらひ、歌仙の像を九枚の板に彫り、後の丘に待必の樓を營みて明月を賞するところとし、その東圃には瓜をつくりてとなりかくなる世を忘れ、時に羲之の法帖を見て筆を走らせ、また一炷の香をたきて

舉白集

心を養つてゐたと自ら語つてゐる。いかにも心ゆく住居である。閑居の詩人としての恵まれた境地に住してゐた。この外松洞台・鳥羽觀などのことは繁冗を虞つてこれを省くが、晩年にはこれを捨て、大原山に籠つた。長嘯子の集は門人山本春正が慶安三年に上木した舉白集四卷に歌文ともに纏まつてゐる、集名はその草堂の名に據つたものである。續類從卷四四三に收めてある若狭少將勝俊朝臣集は部立もなく歌數も三百七十五首しか收めてないが、舉白集は門人公軌の緝めてゐたのを山本春正の手を加へたもので歌數一千七百七十五首に上つてゐる。これを部立によつて計へて見ると

春	四五二首	夏	二〇〇
秋	四八四	冬	一九四
戀	八四	雜	二二七
別	二六	旅	一九
哀傷	四九	物名	四
俳諧	一九	賀	一六

の如く、中に他の歌が二十三首交つてゐる。

この集は二條派の歌風が天下を風靡してゐた時代に大にかはつた風を示してゐる。されば上梓の翌年に尋求坊が難舉白集三巻を著し、その措辭につき幾筋集・重疊集また破戒・偷言集などの悪名を負はせ、その中の歌を抄出し難を

難舉白集卷第五

刺



加へその異を誹つた。すると、天哉翁にあこがれてゐた人が舉白心評を出してこれを辯じた。彰考館本難舉白總論には長嘯子の人格をたゞへ難舉白集を攻撃してある。久しく題材も用語も制限され來つた歌

壇に奔放自由な詠風を發揮してゐるに對しては當然起るべき現象である。集中には想は第二とし詞の縁によつて仕立てたまづい作が可なり多い。例へば水邊納涼の題に

波のたて露のぬき河をりはへて涼しく着ばや夏の衣に

の如きがある。衣と經緯織着の縁語と對句でこねあげた作である。年内立春の作には

春の着る冬の衣は胸あはではつゝかすむけふの細布

の如きがある。陸奥の狭布の里の細布を喩にとつてあるのが奇矯で、今日に狭布を言かけて趣向としてあるに過ぎぬ。梅風の歌には

初瀬風はげしかれとや祈らまし袖ふきたゆむ遠の梅が香

の如きがある。源俊賴の戀歌の詞をかすめて反對の意に使用し叙景の歌に作つてある。

時鳥天のかぐ山雲きえて眞榊にはふ月の一聲

の如きは表現が想にひたりとこない。月下に時鳥の一聲が聞えた心持が變にとれるやうに考へられる。門人春正に與へた戀の歌には

我ぞ憂き妻とふ猫もしばし臥す目のいとすぢをわたる日影に

の如き奇抜な作もある。斯ういふ作を見ると尋求坊ならずとも非難の聲は放つに違ない。材料からいつても片搗麥とか湯婆ゆたんぼとか落葉衣とか蓼の紅葉

制詞排撃の論に先つて範を示す

とかいふ類のものを詠じたり、曆の軸の如き漢語、宵夜中の如き口語、萬葉の古語を使つたり、中古の語でもこまがへり咲く、新宮人など轉用して用ひたり、葛飾やかつ慰めよとか、くれなるの簸の川上とか、紫の一本蕨といふやうな新しい枕詞を作つたりするのを見ては大に世の歌人を驚倒させたに違ない。元祿に至りては制詞を排撃する聲は大に擧げられたが、長嘯子はその以前にこれを實行して憚らなかつたのである。これが吾人をして推獎せしめる所以である。納涼の歌に「うなる子が桐のひらばの下涼云々とか、また

風の音はまだこぬ秋にならの葉のそよぐ木陰ぞ夏のよそなる

の如き詠がある。これらは京極爲兼の歌風に由つて詠んだものと思はれる。戸田茂暉が爲兼を揚げて二條派を貶したのは長嘯子が夙く範を垂れてゐると思はれる。

この集には幾多の指斥すべき歌があるがこれと共にまた優れた作もある。

渡邊の大江の岸やくづるらむ生駒の岳の五月雨の頃

三輪の山五月の雨は音たえてはるゝ檜原に名残をぞ聞く

山風にまづ誘はれて夕立の雲のゆく手にさわぐ村鳥

佳作

鳩のなく外面の杉の夕がすみ春の淋しき色はみえけり

鱸こえ秋風立ちぬ草まくら心しぐれて思ひやるかな

おきていにし誰が床なつのおとならむ涙いろこき花の朝露

今日の佛花奉るこの枝におきあまる露をいかに見るらむ

これらを見ると萬葉の雄渾や古今の自然なのや、新古今の幽玄なのやとりどりにめでたい作のあるのを知る。またこの集には孔子・周茂叔・邵康節・朱元晦・杜子美・西行・俊成・長明等、和漢の人士の影に題した作がある。

和漢の人士を詠す

空の月水の姿のいはほにてうごかぬ人の心にぞすむ(周茂叔)

とはれすよ八重散りしかん花の雪に跡つけまうくたゆむ小車(邵康節)

流れては世々にぞひゞく九の曲せき入れし宿の瀧の白玉(朱元晦)

雲居とぶ鷺のつばさも雪ふくむ窓の青柳花かつらして(杜子美)

廬山の蓮華峰に居を占めてゐた茂叔、小車に乗つてよく人を訪問した康節、武夷九曲の長篇を作つた元晦、詩人杜子美の草堂を詠じたもので、後の詠史の濫觴とも見られる。また俳諧歌を好んだ。歳暮の作に

いにさまの置土産とて眉の霜かしらの雪をくるゝ年かな

俳諧歌

雪の山いたゞく市女商人も老はうられぬ物にぞありける
 の如きがある。これらはその上乘のものである。舉白集には言語を弄んだ
 俳諧歌は數知れぬ程ある。雜の部の終に見える八十一になつた時の作に
 ことし我が齡の數を人とはゞ老いてみにくくなるかと答へん
 とあるが如きも表面はすなほのやうで下には醜くくに九九八十一をこめた
 言語上の洒落を用ゐてゐる。春の部花の歌の中に

ひれふるや心つくしのながめよりつれなき花をまつら佐用姫

の如きは松浦佐用姫が遠征する夫を唐津灣頭に見送り領巾振りて哀惋の情
 を注いだ話や詞をとりて花を待つ意によんだ俳諧歌と見るべきであらう。
 中には無心所着のやうな作もある。異端といへば異端であるが、物に拘らな
 い性格が三十一字に溢れ出たといふべく、傳統以外に何物もない二條派の外
 に立つて大膽な詠風を詠んだのはさすがに武門の血が然らしめたとも云へ
 るかも知れぬ。この天哉翁の門下には山本春正・清水宗好・公軌・景軌・立詮等が
 出た。

第五 和漢十題會

名數和歌の濫觴はいづれを以てそれと定むべきかは輕々に斷じられない。
 維摩の十喻、また十如是、法華の二十八品等佛典に見えてゐる名數を和歌によ
 んだのは天曆や寛弘の頃には既に存してゐる。隋唐の修辭家が立てたやう
 な十體和歌は躬恆や道濟の頃に定められたといふぐらゐであるからその由
 來するところも久しいものである。彰考館本夜燈目錄や白河樂翁公の千種
 の花や、流布板本の渚の玉名數歌集などを繙いて見ると種々の例が載つてゐ
 る。足利末期から讀まれて來た八景和歌の如きは徳川時代になつてから一
 層盛に行はれて來た。後水尾院の鷗巢集には近江八景の御製が見えてゐる。
 朱子學派の第一人者である藤原肅の惺窩先生和歌集^{卷三}には市原山莊の八景
 和歌がある。院の御製は

雲はらふ嵐につれて百舟も千船も波のあはづにぞよる

峯あまた越えてこし路にまづ近き堅田になびきおつるかりがね

に於けるやうに、粟津晴嵐・勢田夕照・矢橋歸帆・三井晚鐘・唐崎夜雨・比良暮雪・石山

夜燈目錄と
千種の花

八景和歌

秋月・堅田落雁といふ如く、その風物は瀟湘八景のそれと全く同じものであるが、惺窩のは飛鳥潭・手月・積朽斧松・巖牆水・北肉峯流・六溪洗蜜科・枕流洞であつて、その歌風は

・ 飛鳥のあすかとえやはいひあへん今日のふちせの流れての世を

うたゝねの枕流るゝ水草のみどりの洞は春秋もなし
に於けるやうである。松島の鹽松八景、修學院の隣雲觀八景もその後になり、かくて國內の名勝その他貴紳富豪の山莊などにも八景乃至十景詩歌など數多く生ずるに至つた。

勝景の名數和歌流行を序として、茲には歌人儒者相集まつて和漢の名數中十に關する詩歌を互によりみかはした雅會のことを述べようと思ふ。時は三代將軍治政の寛永十九年菊の花の咲き匂つてゐた九月二十二日、幕府の叔孫通を以て目された林羅山は同好の八士と共に文殊院に集まつて雅會を開いたことに始まる。その人々は詩人としては羅山及其の高弟の阪井伯元・金地院崇傳・長老・守勝・春如・良以といふ顔觸れ、詞人としては文殊院の應昌・見樹院の立詮であつて、本朝及支那の名地人物各十題を定め探題として互にその雅藻を

のべて歡を盡した。これに興がのつてこの十題會はその後引續いて行はれた。即ち翌閏九月二十一日の會には漢學者の辻了的も加つた。十月朔日の第三回目には清住院の紹柏やその他良岳・十如なども加り、同月十一日金地院で開かれた第四回目には智本・宗丘・正玄・元吉・宗吾などいふ新顔の人が澤山に加り、十一月五日には歌人の方で以宗といふ人が加るといふ狀況で、會所は文殊院を主としその他の主な會友の宅で開かれ、翌年にかけて和漢十題の詩歌は夙くも六百首に上つた。その後何か差支が生じた見え一時中絶してゐたが、立詮はこれを慨きその復活を圖り、慶安四年に再び會を起すこととなり、羅山の長子向陽軒春齋二子・讀耕齋春勝も父に勧め、これに人見卜山やその甥の鶴山、歌人では以宗・一友なども加はり、立詮と同門の山本春正や清水宗好も招き加へられ承應二年まで繼續した。そうして詩歌の數が三千題、内に詩が二千二百五十、歌が七百五十首の多きに上つた。立詮の和漢遺篇には和漢十題集七十五冊とあるが、現存するものは一部六卷、春齋・春勝兩人の漢文の序、編者立詮の和文の跋がある。

この企は幕府の關繫の深い儒者や僧侶が文墨の誼をかさね同時に文明中の

出題者

詩歌合の蹤を追ふ積で始められたらしいが、詩歌合のやうに樹に竹を接ぐやうな標準の違ふものを組合せて優劣を定める等のことはなく、唯題を和漢に求めて各その嗜むところによつて作をなしたもので、それが却つて型に落ちず、各所懐をのべるには都合が善かつたやうである。

人物

さてこの會の出題者は始は羅山、後には春齋、春勝であつた。和が十、漢が十は會名の示すところであるが、歌人の方が少數であると出題者の關繫もあつて漢の題が多く、支那の歴史地理人物傳説等を詠じた方が自ら多くなつた。これが和歌史の上では却つて注目すべきことかと想ふ。

人事

題は種々のものに互つてゐる。人物に就ていへば
十歌人 十詩人 十將 十相 十權臣
十力士 十刺客 十僧 十醫 十卜者
十忠 十孝
といふ風に、そしてそれぞれに一つづつ特別な題を設けてある。人事に關しては

- 十職
- 十公事
- 十臣節
- 十冠禮
- 十婚

典籍

典籍に關しても
十祭 十能 十拙 十榮 十辱
十草子 十稗說 十倭歌書 十詩集 十神書
十醫書 十家記 十遺著 十文編 十講經

地儀

の如き、地儀に關しては

- 十山 十水 十岡 十湖 十島
- 十洲 十原 十野 十谷 十澤
- 十浦

十草

といふが如く多方面である。これらの中には普通に知られてゐるものもあるが、學者の出題のことゝて、古典的なものや又從來の歌や詩の題材とは全く變つたものが多い。例へば十草といふには詩經の植物ばかりを擧げてある。即ち

- 周南芙蓉 召南蘋蘩 邶風匏葉 邶風牆茨
- 衛風芄蘭 王風谷蕓 鄘風臺草 唐風苓
- 秦風蒹葭 檜風萋楚

十神使

である。芙蓉は我が車前草であり、芫蘭はかゞみ草、菫はやくも草、芥は甘草、兼葭は蘆、葦楚は羊桃草であるか否かは毛詩草木鳥獸魚疏や毛詩品物圖攷などを繙いただけでは不確で、その道の専門家を煩さねばならぬ。十神使といふには

- 八幡鳩 稻荷命婦 愛宕猪 春日鹿
- 日吉猿 熊野鳥 高野神犬 氣比白鷺
- 三島雞 貫前駁馬

と擧げてある。斯ういふ題が多いのであるが十題會の作品は詠史詠物の歌となつてゐるものが多い。今それらの中から和歌を検して見よう。

- 百敷やつかさ位を定むてふ人は立ちぬもけしきことなる(一) 應昌
- 花さそふ雲井のにはの春風もあげになりゆく山藍の袖(二) 以宗
- みがきする鏡のおまへ明けき天てる神の影のうつりて(三) 立詮
- 日や月や蟲ばむ空を數へつゝ四つの時をも定めきにける(四) 一友
- 白檀弓あだちが原の黒塚ももみちの頃は名をやかふらむ(五) 應昌
- 法の師はあか井の水を掬ひあげて梅尾山の雪や煮るらむ(六) 以宗

(一)は式部卿を、(二)は除目を、(三)は賢所を、(四)は曆博士を、(五)は安達ヶ原の紅葉を、(六)は梅尾上人の茶を詠じたものである。

まめ人の裂かれし胸は朽ちぬとも名は千代までも残る古塚(七) 立詮
ほいとげぬきざしはかねて白妙の虹の貫く日を仰ぎても(八) 同
うたひゆく聲の中にや桐の陰にすむてふ鳥を驚かすらん(九) 以宗
思へたゞ青き早苗のおきふしに民の苦しむおきてなりとは(十) 同
(七)は殷の三仁の一人の比干を、(八)は易水送別で有名な刺客荆軻を、(九)は隱者接輿のことを、(十)は王安石の新法を謠つたものである。

八隅知る七つの國の宮柱立てける跡もたゞ秋の風(十一) 立詮
山深きましろの聲に夢たえて旅寢の露に月ぞくだくる(十二) 以宗
春ふかき堤の柳かげはれてみどりにつゞく西の湖(十三) 同
(十一)は咸陽の都を、(十二)は巫峽月を、(十三)は蘇公堤を詠じたもので、歌風は當流のそれとかはらないが、その詠じたものは從來の人々の心にかけないものが多いのである。

應昌と立詮

この會を發起した應昌は紀伊の人で家康の歸依ことに深く嘗ては本多佐渡

の猶子となさしめた程の人、慶長十七年興山寺第三世を襲うた。大阪冬陣の時にも功があり、高野に東照宮を建てたりいろ／＼活動したことは高野山千百年史などにも詳である。應昌は正保二年五月二十四日遷化、年六十五。立詮は文殊童と稱へられた大徳で、正保二年應昌遷化の後を受け興山寺第四世を襲いだ。和歌は長嘯子及烏丸光廣に學び、その秀詠は乙夜の覽に入り、賞を蒙ること屢であつたといふ。宗論上に於ても活動するところがあつた。板倉周防守、永井信濃守、松永昌三、石川丈山、野間三竹等とも親しく、寛永十八年武家系圖を修された時、台命によりてその撰者に列し、同二十年功成りて白銀二百枚を賜つた程の學僧であつた。寛文四年八月十二日伊勢の朝熊山の幽居で示寂した。

この會衆は歌人を以て自ら任じてゐなかつたのと、この會歌を撰んだ和漢十題雜詠が世上に多くも流布しなたかも知れぬとて世の學徒が多大の注意を拂はないかと思はれるが、多くの撰集家集が花郭公月雪か戀及祝の歌を月並に收めてあるに、この一編が新題材を謠つて近世詠史などの興起の始をなしてゐることを考へると決して閑却してはならないのである。特に立詮が作

には長歌三十六篇もあることは當代に於ての驚異の事實と謂はねばならぬ。

第六 見樹院立詮の長歌

五代和歌集
略

從來詠じな
い題材

立詮の短歌は彦岑阿闍梨が採録して正徳元年に上梓した五代和歌集略(内閣文庫本)に收めたものが少くない。併し和漢十題和歌集の歌は擧げてない。長嘯子と交渉の歌、冷泉中將との唱和、佐川田昌俊を悼んだ文、太田備中守資宗を弔する法華二十八品和歌なども詠じてゐる。和漢十題會で詠じた長篇には人物に關したものが多し。吳中の精銳八千を率ゐて一時漢の高祖と覇を争つた項羽や、蕭何、張良、韓信や、智囊と稱せられた陳平や、客の言を容れて嬖姫を罪なつた平原君、趙太后を説きふせた雄辯な觸龍、王莽の招を拒み義の爲に食を絶つて死んだ龔勝、年少くして戈を執つて國難に殉じた汪蹄、威福を擅にした鄧后、報を望まない王媪、手弱女ながら復讐を遂げた謝小娥、赤貧であつた大詩人杜子美、七步詩で有名な陳思王、我が文人都良香、さては韓志和などの人物を詠じたもの。地理に關しては相馬城また秀才堤及三峽中の松柏灘、動植に關して虎や狐の變化を謠つた南陽士人、蕭公を始とし、山背河の龜、湘浦の斑

詠陳思王長歌

竹邨風の菀葉などを詠じてゐる。書籍では徒然草や通鑑纂要を詠じたものが随分長くして相應の出来ばえである。婚禮を謠つた詩經の何披穰矣の如き譯和の作や臨春閣を詠じたものもある。娥黃女英が帝舜の崩を悲しみ紅涙漣々湘浦の竹を染めて斑竹が出来たといふ傳説を謠つたものは題材そのものが頗るロマンチックである。次にあまりに長くなくて整つてゐる陳思王の一篇を引く。

はらからの	親しかるべき	中なれど
嫉負ふ身は	はたられて	七つの歩の
うちにしも	作れと云ひし	詩は更に
豆にもあらぬ	豆がらの	同じ根ざしを
歎きつゝ	かちかくれば	このかみの
恥らふ色も	頬に出でて	心はしばし
なごめども	また文づくり	みづからの
才を負みて	君にしも	用ひられんと
うらもなき	心ばせをば	見えながら

うら表ある 世のさかを ことわり知らぬ
人のものでいひ

頼むなよ身のさいはひは賢きが作れるふみも何ならぬ世に
當時萬葉の格調は認められず、古今の長歌を準とし、對句疊句枕詞も殆ど用ゐない、散文的のものであるが、奈良朝以降七百年間あまりに手を着けなかつた長篇に筆を染めたことは偉とせねばならぬ。兎に角近世長歌興起の先驅者といつて宜しいのである。

第七 堂上の諸家

武將とちがひ堂上方では歌を詠まない人は殆どないぐらゐといつて宜しい。その中にも宗匠家と呼ばれ禁裡洞中の御會などに題者となる家筋は定まつてゐる。冷泉飛鳥井家などは足利時代よりその家筋である。大阪落城の後三月、元和元年八月家康は勅を奉じて公家法度十七條を定め朝廷と幕府との權限を明にし宗旨の境域を定め、神器の守護を以て天子の職とし、四海太平を以て天子の徳とし、皇室に於てはひたすら古道及和歌を學ばせられることを

公家法度と和歌

説き、土地兵馬獄訟財用驛遞等の政權は幕府に委ね、官位の與奪神官僧尼及藝術等すべて人に榮譽を與へることばかりを朝廷に統へることに規定した。爾來公家の關與する家筋は和歌は冷泉、入木道は持明院、郢曲は宇多源氏、蹴鞠は飛鳥井及難波といふ如く、その家元に就きて許しを受けねばならぬことになつた。斯うなると宗匠家にその人が出ないときはその道は唯古を守るばかりで衰頹に趣く外はない。そこで宗匠家の外に堪能な人が出たときは勅許により歌道師範をなしても差支ない家も新に出来るやうになつてゐた。それが數代繼いた家としては夙く烏丸中院、三條西等の家々があり、中頃以降に於ては清水谷武者小路、芝山、風早、日野、外山等の家々がある。まづ古いところから家々に分ちて縷説しよう。

一、中院家

中院家は久我源氏の一流で權中納言通勝から歌人が續いて出た。通勝は母は三條西公條の女で歌の血を受けてゐる、細川幽齋の高弟であり、浩瀚な源氏の注釋、岷江入楚の著者で、歌の叢書でも編む積であつたが、いろいろ人に託して歌書の蒐集に努めた。これらの中の幾分は村井敬義の手を経て今神宮文庫

新興の宗匠家

中院家

也足軒通勝

に遺つてゐる。和歌玉屑抄等の著がある。也足軒と號し入道して素然と號した。素然五百首や元和六年關東紀行の篠枕から數首の作を引く。

一村の雲の峯より吹きおちて風にぞきほふ夕立の空

面影をしばし都の夢だにもあらし吹くなり松が根の床

行き暮れぬこのまゝにてや三輪が崎今宵の月に家はありとも

通勝は慶長十五年薨す、年五十三。

嗣子通村は正保中内大臣に陞つた。後水尾院後光明院に重用され氣骨のあつた人で、將軍家より古今傳授を請はれたのを素氣なく斷つた爲に長く江戸に淹留することを餘義なくされた逸話も世に名高い。集を後十輪院歌集といふ。高松宮家御藏の中院家御集には上中下三卷に分けてある。慶長の半ばより承應の始までの公宴私會法樂等の作を部類してある。心を旨とし詞によつて仕立てることを詮としない歌風を尙ばれた。

何ごとのすぢともわかでたえにけり枕の夢の行方ゆかしき(夢)

思出のある身には有らでこし方をしのぶ心のくせもわりなし(思往事)

とにかくにうつる心よ釣の絲のたゞ一すぢに世をば思はで(萬事無心)

後十輪院通村

等の抒情歌はその作風を示すものである。尙叙景歌としては

色どらぬたゞ一筆のすみがきを都のをちにかすむ峯かな(嶺霞)

恨みこし花はあとなき夏山の若葉すゞしき木々の下風(首夏風)

程もなく暮ゆく空のうす霧に松原とほき秋の海づら(題不知)

の如きがその代表作であらう。通村は承應二年六十六で歿した。

通村の子通純は莊子を讀んで歌を作つたといふことであるが承應二年父と

奇愛祝
うすくこく重なる色に遠近のけちめも見えてかすむ山の端(連峯霞)
あはれを後ろきみよりよるを通茂

中院内大臣通茂筆(家藏)

同年に薨じた(年四十二)ので集は作られなかつた。その子通茂は内大臣従一位に陞り、溪雲院と號した。後水尾院より古今傳授を受け歌學にも長じ數部の著作あり、門人も多く水戸黃門光圀とも親しく諸侯にも加點を乞ふものが少くなかつた。門人松井幸隆の溪雲問答や稻葉正倚の席話抄、釋似雲の詞林拾要などを見ても堂上歌學に委しかつたやうであり、また拾遺愚草俟後抄な

ど古歌集の注釋研究にも力を用ゐられた。禪學を修めて詠歌の心を練つたりした嚴正な人格者であつて、優美すぎ理窟すぎ巧すぎを制し所謂三過説を立て、初學には心すぐに安らかに句作のびやか綺麗に涼しく詠むやうに示した。集を老槐集といふ。高松宮家本中院家御集には三卷の末に杜の落葉と題してあつた云々の奥書がある。靈元天皇の御百首に加點し奉つてその後

に添へた歌には次の如きがある。
かすくくにみがける玉や汚れましかけてかひなき浪の藻屑は

その叙景歌としては

うすくこく重なる色に遠近のけちめも見えてかすむ山の端(連峯霞)

月をまつ端居すゞしく空はれて夏の夜たかく飛ぶ螢かな(螢)

更ゆけば螢のたく火も影きえて月のみすめる蘆の屋の里(月)

の如きが代表作である。寶永七年八十にして薨す。祖父後十輪院集に比べ

中院家門人系



二、烏丸家

烏丸家

烏丸家は日野の一流で歌の家筋の如くなつたのは權大納言光廣卿からである。光廣は細川幽齋の高弟でその師に隨従することは年久しきものであつた。耳袋記はその間に成つたのである。光廣父の命により始め清原秀賢に

黄葉集

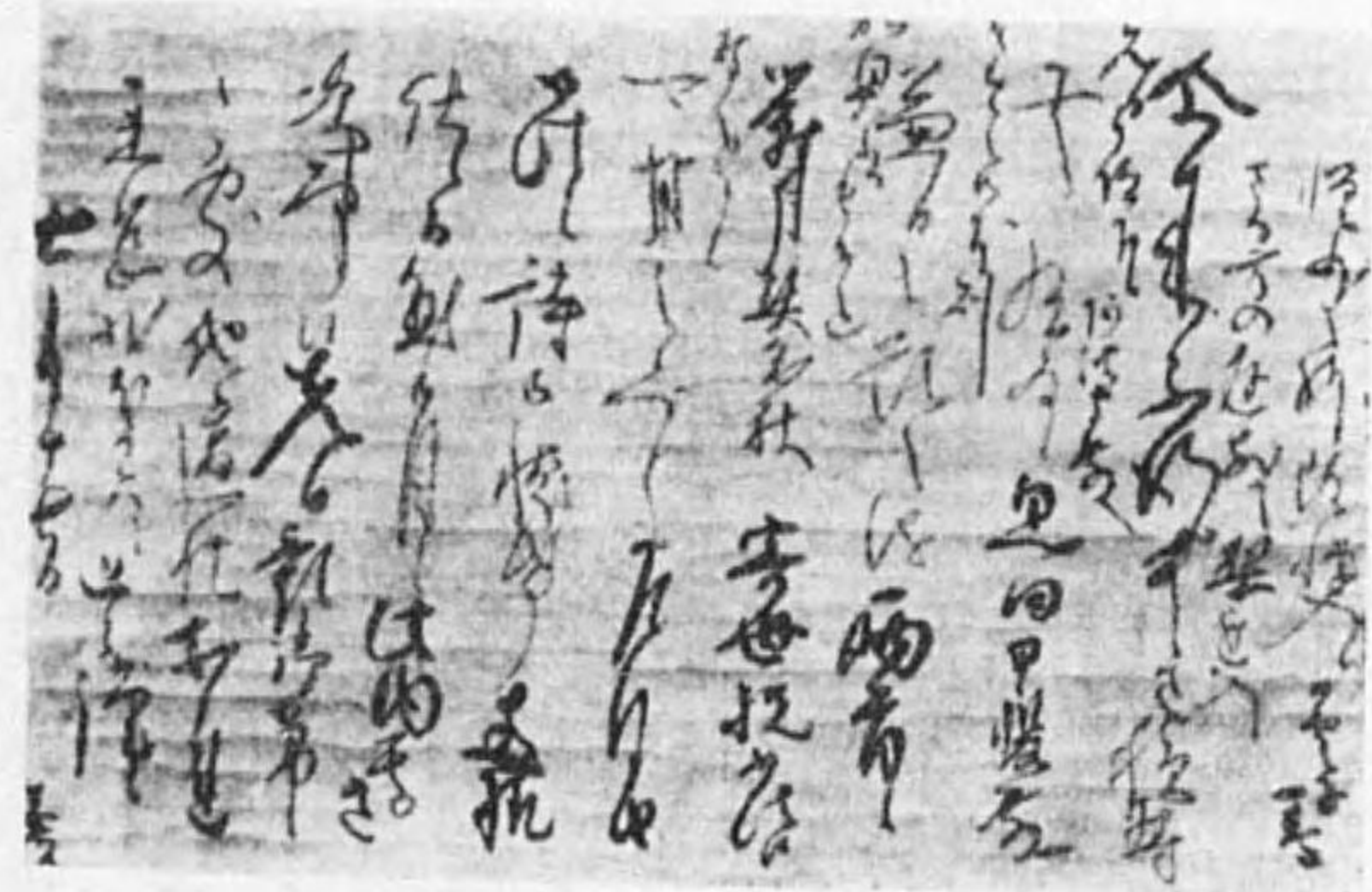
つき儒學を修めてゐたが、歌道に人なきを慨し、後陽成天皇の允許を得て、細川幽齋に従ひ二條派の蘊奥を傳へた。また師説により佛心に通じなければ歌道に上達すること難しとなし、一絲和尚に參禪した。書は光悅流を好んで一派を出した墨畫にも巧であつた。面授口訣などを見ると儒道神道歌道を一致させてゆく考が顯著である。その歌稿は承應中焼亡したが仙洞に留め置かれた二本を下賜され、寛文九年嫡孫資慶卿が編次して十卷となし黄葉集と題し元祿十二年に上梓した。その行實は卷後に添へられてある。磊落の資性と修禪との然らしめるところか逸行の多かつたことを野史氏は委しく叙してゐる。その性格は歌にもあらはれて輕快な作が多い。自然を詠じた作の中花の歌には

身のうさを忘れてむかふ山櫻花こそ人を世にあらせけれ
の如き、月の歌には

欄により立ちて見みて見みてもまたさやかに出でぬ雲の上の月
の如き自然に對する代表作であらう。また初雁の歌には
雲間ゆく一つ二つの雁がねはまだ難波津やはなち書きする

の如き譬喩の變つた作がある。寒山拾得の歌に

おのづから掃はぬ帚もつ人の心の空に塵はなきもの



鳥丸光廣消息家藏

とあるは入浴が嫌で、また堆い書齋の塵を滅多に拂はせなかつた夫子自らを謠つてあるやうだ。光廣は歌人として名があるが寧ろ文章の方が得意で扶桑拾葉集卷二十八にはその文章を十編も收めてある。その外仁勢物語もその作と云はれてゐる。勅使として公に下つたのは除き、私にも四度も江戸に下つた程で、あづまの道の記や春の曙等の紀行がある。随つて集には旅路の歌が多く載せられてゐる、富士や清見關、佐夜の中、山、宇津山等の沿道の名所を詠じた作が澤山に見えてゐる。

久方の不二の高嶺の空はれて朝日にしらむ田子の浦波

慶長八年八月の末江戸へ下る時、三島明神に

祈るより水せきとめて天川これも三島の神の恵に

の歌を奉つて降りしきる雨を止めたといふ歌もある。併しこれらは歌として

は格別優れたものでもない。その詠中には釋教の歌も多く、後陽成院及細

川二位法印等を悼み奉る詠法華經の歌がある。智仁親王の追悼には

むらさきの雲のかたみもあだなりと鳴くや夕の山ほとゝぎす

の如き嚴肅な氣分の作もあるが、また有馬の善福寺の如來に奉つた

瓢箪に入ると見えたる山がらのいでてくるみをなどまはすらん

の如き、また布袋の畫に題した

腹にさへ何をも入れぬものゆゑになふ袋はあはれ世の中

の如き逸氣の溢れた作もあり、嬾殘の繪に題した

飢きたり眠さむれば芋やきてくうなることをしるか作麼生

の如き法語の歌もある。二條派ながら多少自由な態度で詠んである。また

醫師・陰陽師から傘張樋結に至る十八番の職人盡歌合を作つた卿の面影はこ

れらの作にもほの見えてゐる。澤庵和尚とは道交深くその歌に點を加へた。

渡邊友益など卿の歌學をついだ一人である。寛永十五年に六十歳で薨じ法

雲院と諡した。その子光賢は父と同年に歿し、孫資慶、曾孫光雄相續いで歌人であつた。光賢の作には

人はたゞゆうに大きにたじろかす自然なるこそ深く厚けれ
の詠が面白い。資慶は後水尾院より古今傳授を受けて達吟に長じた人で、細川行孝、和田以葩、源頼永等その教を受けたものが少くない。秀葉和歌集二卷はその家集である。三行記といふ紀行は歌集の終に添へてある。

ことし生ひの竹の葉かをり露ちりて涼しくあるか窓の朝風
したひみし尾の上の雪も影きえつ山のあなたも月やのこらぬ
夢さます松の嵐におきいでてまた雲うづむ山やこえまし

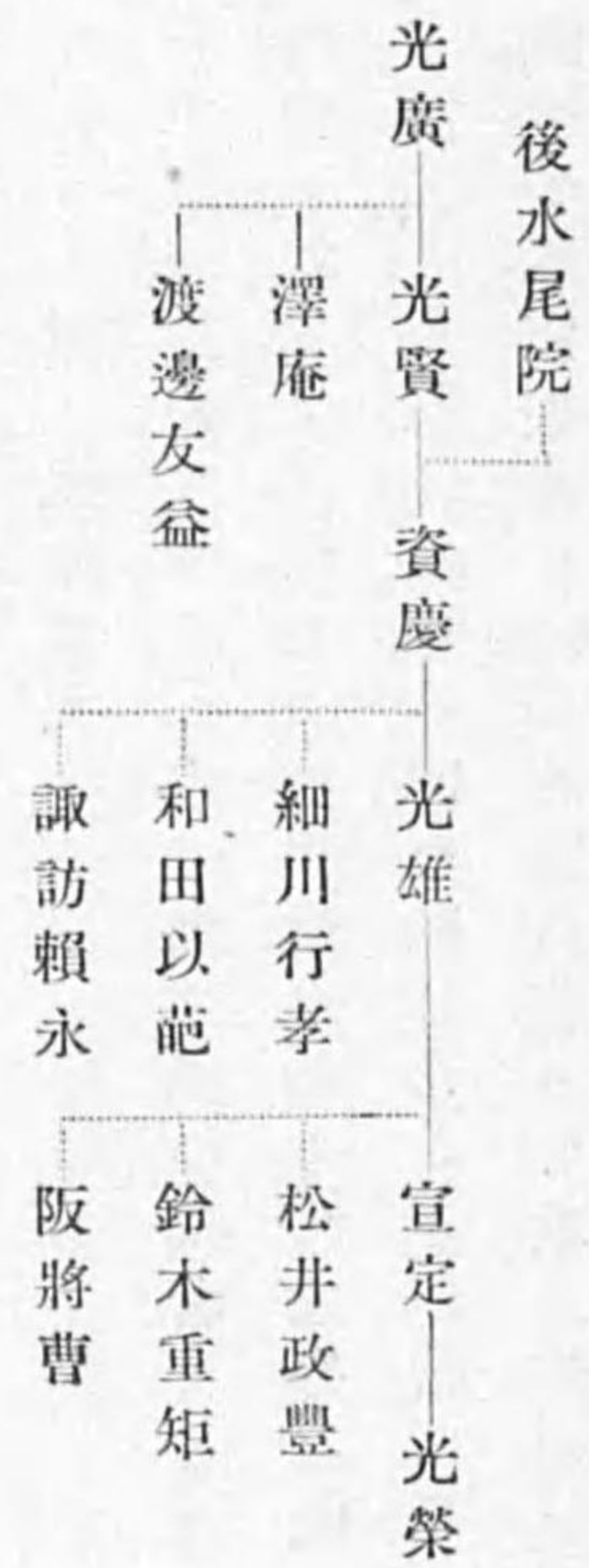
光雄

等はその作風を見るべきもの。寛文九年に薨じた。年は五十四。嗣子權大納言光雄も歌匠として知られてる。門人松井政豊、鈴木重矩、阪將曹等が師説を録した歌學に屬するものがあることは歌學史に説いておいたが、中古六家集の中では壬二集、三玉の中では雪玉を宗とすべしとの歌風を唱へてゐる。元祿四年に薨じた。年は四十四。その孫光榮が烏丸家中第一の歌人であるばかりでなく、當時の公卿歌人の尤なる人であつた。その歌に就きて

門人譜

は尙後章に述べる。

烏丸家門人譜



三 三條西家

三條西家
香雲院

三條西家が足利幕府の季世に方り逍遙院、稱名院、三光院と相繼いで出で斯壇に光を添へたことは既に述べた。三光院實枝の子公國は夙く歿したのでその子實條は細川幽齋から歌道傳授を受けた。寛永十七年右大臣從一位に陞り同十九年に薨じ^{十六年}香雲院と號した。その作風は次のやうである。

行く袖の露もこぼれて匂ふなり春の名残りの山吹の花
寒き夜のほどを真砂地にふかくみせぬるけさの霜かな
ともに見る人だにもなき蓬生の宿には月の影ぞしづけき

その子公勝も世を蚤くしその孫實教は見識の高かつた人で、實のある歌を好み戀の歌を以てすべての歌の根本と説き、堂上家であつて、當流の人々が準とする草庵集を貶し、壬二集とは外形が似てゐて實際は大に劣つてゐると評し、人に歌を教へるにはその性質により或は時に從ひて、ある時は古今風、ある時は伊勢物語の風、ある時は萬葉風といふ如くいろ／＼に詠み分けさせるといふが如き意見を抱いてゐた。その歌風は次の如き作で見られる。

ふけゆけば紅葉にまがふ色きえて霜の花さく聞のうづみ火

元祿十四年に八十三に薨じた。

四、飛鳥井家

飛鳥井家

飛鳥井家は祖先以來歌人が出で勅撰集の撰者にも加つたことは既に述べた。江戸時代の初期には權大納言雅庸がありて家學を繼ぎ、將軍家康の爲に源氏物語を講じ、また歌道宗匠日記を獻じたことが物に見えてゐる。(元和四年歿)長子雅賢次子雅宣相續ぎ三子雅章に至りて歌名が大に揚つた。雅章は後水尾院より歌學を受け詠作に長じてゐて、慶安元年仙洞御歌合には判者にすゑられた。知題抄序分抄等門人の聞書とせる歌學書も數部遺つてゐる。千首詠

雅章

も傳つてゐる。試にそれより二三首を引いて見る。

動なき天の岩戸をためしにて立かへるらし君が代の春(立春天)

卯の花のまがきを渡る夕風に光をちらす雪の村消(卯花似雪)

ふりつもる軒端の竹の雪折にしらぬ外山のひとりはれゆく(竹雪)

尙他の集より代表作とも云ふべきもの二三をぬいて見る。

うつせみの鳴く音も涼し夕づく日森のしたがけ露ふかくして

すむは天濁るは地とへだてなき神世しらるゝ不二のしら雪

以上の如く體留の詠が多く、新古今などの風を準としてゐたやうである。

門下には布衣に河瀬菅雄、清水宗川、本多重世、玉手貞直等があり、諸侯には蜂須賀光隆、松平直矩等點を乞うたものが少くない。延寶七年に六十九歳で薨じた。位は従一位に陞つた。次に飛鳥井家の門流を擧げる。

門人譜



清水宗川
 本多重世
 蜂須賀光隆
 松平直矩

五、冷泉家

冷泉家

冷泉家が斯道の宗匠家であつて上下兩家に分れてゐたことは既に説いたところである。江戸時代の初期に於て上冷泉家に於ては權大納言爲滿あり、家康の招により駿府に到り古今集を講じたが傳承以外に別に云ふべきものはなかつた。慶長十年九月禁中に催された千首御會には四十七首を詠進してゐるが堂上の型以外の作は見えない。(元和元年)その後葉には天折するものが相續ぎて全く顯れなかつた。下冷泉家にては儒を以つて立つた惺窩の子爲景が伯父爲將の家を襲いだがこれもその家筋といふに過ぎない。爲景は木下長嘯子と唱和した作が舉白集に載つてゐるが特に引くまでもない。かかる状況で歌の宗匠家たる冷泉氏は江戸時代の中期に至るまでは不振の状況であつた。

第八 地下に於ける當流

宗佐と貞徳

戴恩記

歌林樸樸

道遙集

幽齋の教は一方には雲上堂上に入り一方地下民間に下つた。地下派の當流は京都にありては松永貞徳、堺にありては佐方宗佐によりて擴められた。中にも宗佐は幽齋の歌學を傳へたが、優れた門下が無かつた爲かその後が著れてゐない。貞徳は傳統を非常に重んじた人で、戴恩記によると五十餘人の師に就いたことを述べ師承戴恩の意を委しく誌してゐる。貞徳は永種の子で長頭丸といひ、明心居士と號し、里村紹巴に連歌を學び、花の本の宗匠の名は歌名よりも高い。東山大佛殿の側に梯園を營み同人と文墨の交を温めたり、立願して趙子昂の書いた法華經一千部を印刷し、その末には往古以來歌人わけでも我が教をうけた人々の菩提を弔ふ意を刻入した。連歌に關した御傘油糟・淀川の如き俳書に比しては遜色があるが、歌に關する著作もある。歌林樸樸二十八卷の如きは紀記萬葉以降難解の語を釋したものである。戴恩記の如きも當時の歌壇を知るのにはこの上もない資料である。幽齋紹巴、玄仍と共に詠んだ四吟百首があり、五十番及十五番の自歌合がある。その家集道遙

集は歿後二十五年目に板にされた。四吟百首の中のものゝ割合に鼻につくやうな技巧が少いが、十五番自歌合の如きは詞の縁に拘泥した作が多い。一體に三玉集を準とした爲に吾人の取るべき作は少い。その秀吟は雪とみえはこよひの月にうからましよしや吉野の櫻なりともといはれてゐる。

幾里の梅の匂をさそひきてひとつにかをる野邊の春風の如きもまづ無難の作である。

聲のあやけさ織そめし鶯にとはゞやいつと花の錦を

の如きがその代表作である。中に連歌歌といふ類も少なくない。貞徳の和歌史上に於ける地位は地下派當流の祖とその門下に數多の歌人を出した點にある。作そのものには見るべきは少い。承應二年八十三で歿した。次にその門流の高材を擧げる。

貞門

加藤盤齋

望月長孝 平間長雅 有賀長伯

貞徳 和田以悦

宮川松堅

北村季吟

加藤等空

加藤等空は播磨の人で盤齋といひ冬木齋とも號した。貞門では歌學に明かな方で三部抄や愚問賢註などの註を作り、また歌文書の注釋を出した。一衣一鉢諸州を廻つたといふことであるが日記も歌集も傳らないやうである。延寶二年五十四で歿した。

和田以悦

和田以悦は儒者和田宗悦の弟で、先師の逍遙集を上木したり、追悼の爲に白鳥千首を企てたりした點から考へて貞門の長老であつたと思はれるがまだその傳と作品とを詳知しない。

望月長孝

望月長孝は當流地下派の歌人の尤なる人で始め兼友といひ中頃長好といひ晩に長孝と改めた。廣澤の池畔に住んでゐてさゝのやと號した。

けふもまた垣根のうばらつたひ來て霜ふむ鳥の跡はありけり

の秀吟があり、その居を鳥の庵と號したのもこの歌に因んだのである。その歌稿塵泥十卷が大坂圖書館にある。延寶九年六十三齡で歿したが歿後五十二年目にその家集廣澤輯藻四卷が上梓された。徳大寺内大臣飛鳥井從一位

塵泥と廣澤輯藻

雅等の公卿がそのさゝの舎に到り明月を賞し歌を詠じたこともある、松永昌三・木下順庵等が訪ねきて詩歌合を行つたこともあり、佐賀侯鍋島光茂と交渉の作もある。集中誦すべき歌が少くない。その代表作は次のやうである。

朝日影いざよふ峯にうすくこく霞もはてぬ松のむら立(翠樹霞)

浪立てばみさご居る洲の捨舟もうきてうらゆく五月雨の頃(浦五月雨)

山川の岩うつ波もむらさきにくだけて映る秋萩の花(萩映水)

夢さそふ夜半の嵐の山寺に川音きよき月を見るかな(山寺月)

つらかりし寢覺の音も忘られてあくれば拾ふ庭のさゝ栗

最後の一首は同門の和田以悦へ送つたもので、

さくらんとまつ日は過ぎぬ恨みつゝしばし残りて見る花やなき

は人のもとにて花瓶に挿してある櫻・松・檜・杉・躑躅・榿・柳を題に詠めと云はれた時、七つの植物を一首によみ入れた作で、物名の歌としては上乘のもの、その技倆の凡でなかつた一例とも見られる。その門に平間長雅があり、風觀齋また六諭居士といつた。長雅の門下に有賀長伯が出て難波にありて當流の歌の民衆化に盡した。長孝の詠歌大本秘訣や長雅の和歌血脈道統譜などのこと

平間長雅

桂雲集

は歌學史に譲つてこゝには説かないが、長伯の後の有賀長收等は長孝の百年忌に方り家集及遺稿の和歌を類題して安永九年桂雲集六卷を上梓した。書名は飛鳥井大納言雅章卿が秀吟だといはれた

よしや吹け秋の草木のあらし山月のかつらぞ雲にしほるゝ(嵐山)

の詠によつたのである。

同門に異彩を放てゐるのは深草の元政上人である。六月の頃長孝は盤齋など伴なひその草庵を訪れて「うらやまし世はうきふしの夏をさへ知らずみ家の竹の下風」と詠じたことが廣澤輯藻に載つてゐる。元政のことは別に記す。

宮川松堅

倭歌五十人一首

宮川松堅は貞徳の晩年の門人で長壽を保ち、同門の先輩凋落の後、多くの門人を導き貞徳二世とも稱されてゐた。倭歌五十人一首同追加(京大本)の著があつてその門流の歌を多く取つてゐる。

老まさることを厭ひしきのふをも物忘れして春ののどけさ

夏のきて二日といふ夜郭公人をしづめて忍び音に啼く

淋しさを人にみよとは結ばじを雨の夕の小山田の庵

北村季吟

の如き清新な作を好んだやうだ。享保十一年九十六歳で歿した。

北村季吟は貞門中の博學な人で、春曙抄、湖月抄、徒然草文段抄の如き國文註釋ばかりでなく、萬葉拾穂抄、八代集抄、歌仙拾穂集百人一首拾穂抄、堀河百首肝要鈔等歌書の註釋も數多く出してゐて、季吟の名は註釋家を聯想せしめるばかりである。もと近江の北村に生れ、俊成の勸請した都の玉津島神社の祝人と

心懐 哀慕 かなわぬ 玉乃を 寄るに かな
偕作 拾穂 かな かな かな かな かな かな

北村季吟の筆(難波江に據る)

なつてゐたが、烏丸光廣の推舉で幕府に聘せられ、和歌所法印に任じられ、儒學の林家に對し國學の北村家を起したので、再昌院法印の名は四方に聞えるやうになつた。和歌題林抄を増補して出版したりして二條家の歌風の民衆化にも盡したが、歌才はさしたるものでなかつた。伴蒿蹊の祖父に贈つた百首が存してゐる。その他にも多く詠作したと思はれるが、季吟子や向南家集に收めてあるものも多くはない。貞徳と同じく連歌歌の傾向あるものか否ざ

向南家集

れば、平調な二條派の作が多い。中に

うちなびく 蘆の葉分の 濱風におりゐる たづの見えがくれする (蘆間鶴)

山風にちりくる 花と見るまでに 裾野の蝶のむれて 飛びかふ (蝶)

飛わたる影さへ 見えて 澤水のあさげし づけき 鳴の羽音 (澤畔鳴)

雁の斜になりて 見るが中に こえゆく 跡の山の端のつら (雁)

の如きはさすがに景致をよく捉へた作である。季吟通稱は久助、拾穂軒、湖月齋、七松子と號す。寶永二年八十二にて歿す。門下に櫻井元茂、谷口元淡、山岡元隣等が著れてゐる。山口素堂、捨女、芭蕉など俳諧の門人は茲には掲げない。

拾穂軒とそ
の門人

季吟 — 湖春 — 湖元 — 春水 — 季春 — 季文 — 湖南 — 季元
正元 — 季任

櫻井元茂

谷口元淡

山岡元隣

第九 長嘯子門下の人々

山本春正

長嘯子門下には山本春正、清水宗好、公軌、その子景軌、紀立易、之俊等の人々が見えてゐるが、時代もやゝ遠く、その子孫の菅氏のあともどうなつたか明でないから、門人のことはよく分らない。中に春正は京都の人で蒔繪師として名もあつたが斯壇の人となつた。舟木軒と號した。蓋し惠慶法師の奥山に立てらましかば落こぐ舟木もいまや紅葉しなましの詠に由る。籠居の志はありながら南船北馬世に交ることを衷心尤めて命じた號のやうである。

分類句集と
勅選佳句部

公軌

古歌の研究を志すものが索引のない爲にどれくらゐ不便であつたかは想像以上であつた。されば雲上にては夙くそれらの書が出来たらしいけれども、祕閣に藏せられたもので民間の人々はその名さへ窺ふことも出来なかつた。一百卷から成つてゐる分類句集や、完本ではないが應仁二年に書寫された勅選佳句部現存の部十六卷が存在することは今日斯壇に下り立つ人でも知らない方が多いぐらゐであるから、二百六七十年前では容易に知ることが出来なかつたのは當然であつた。そこで長嘯子門下の公軌が勅撰集等に就て下句で上句を引く索引を作りかけてゐたが、その業が完成しない中に他界したので春正はその業を襲ぎて遂にこれを大成した。かくて成つたのが古今類句で一

古今類句

部三十四卷。二十一代集は勿論伊勢大和源氏狭衣六家集の歌を第四句で引くに囊中のものを求めるかのやうである。寛文六年上木二十本世に公にしたのである。爾來二句類句、五句類句、類礎等續々と出でて斯界を益するに至つたのである。公軌の歿した年の五月春正は螢を見て

なき人のあつめし世々を思ひいで涙も玉とちる螢かな

と詠んでゐる。公軌の努力の尠少でなかつたことを想はしめる。春正は承應三年には薩摩へ下つて鎌田政辰などと親しくしてゐる、卯月五日櫻島の有村温泉に浴し、六月始に谷山の慈顯寺に赴いてゐる、八月の始には平佐に赴き北郷佐渡守久加の爲に伊勢物語を講じ、その後島津又七久英に召された。島津家にては龍伯義久侯が幽齋につきて歌を學ばれたことがあり、夙くから文學が開けてゐた。春正も招きに應じて下つたものと見える。清水六兵衛宗川とは同門であつたか親交があつたと見え、よるの夢路は近し薩摩瀉沖の小島の波の枕にと云ふ一首を夢裡に感得したが、これは春正の歌であらうと申送つて來たのに對し

春正の足跡

今もなほ都の夢や通ふらむありしきつまも見えし例に

と云ひ送つてゐる。萬治三年五月には越前丸岡へ下つてゐ、城主本多飛驒守の望により

高殿をめぐる堀江の水きよみ玉しきよする月のさゝ波
と詠じてゐる。延寶の始には美濃の郡上に赴いてゐる。遠藤木工助に招かれたのである。水戸黄門光圀に召されて水戸に下り萬葉考勘の事に當つた。その年次は明かでないが延寶の初頃のことであらう。その下る途次小田原の淺見尙卿の許に宿つた。尙卿贈るに

筑波山しげき惠の君によりかへる日をしもおもひ忘るな

海山に心ひかれて常陸帯のめぐりきぬとも日數へぬべし

の二首を以てした、春正これに答へて

やすらはで立ちかへり來む筑波嶺のこのもかのもに蔭はありとも

海山に心ひくとも常陸帯のながくはあらじ行めぐるほど

と答へてはゐるが彼地に數年は止まつてゐたかと考へられる。延寶五年その歸洛に際し光圀は惜別の歌を贈つてゐる。春正はまた飛驒へ旅行した。その記文もある。そうして寛文十三年には法橋になり、天和二年に七十三歳

で歿した、都の西林寺に葬つた。

春正の集は舟木集といひ九卷水戸彰考館に存してゐる。一二の卷は四季雜の部立により、三の卷は文章を收め、四の卷より九の卷には承應三年より延寶九年まで二十八年間の作を年次の順に叙してある。作風は想を主とした平穩の歌が多い。富士の歌には

不二のねの雪よりさえて山風の袖にぞふゞく五月雨の空

九月九日をよめるものには

流をもくめるよはひは五百とせと菊のみなかみけふむすびてむ

鴨長明賛には

はし鷹のとやまのまさき道とちてかりにや露の身はおきにけん

の如きがある。舉白集の出版、古今類句の編輯に并せてその集も傳ふべきである。

第十 漢學者と和歌

古の漢學者は概して和歌の嗜があつた。徳川時代に朱子學を興した藤原惺

窩に惺窩先生倭歌集があり、堀河の學舎にて古義學派を唱へた伊藤仁齋に古學先生和歌集があり、陽明學を開いた近江聖人に中江藤樹先生和歌集がある。その門下の熊澤蕃山はまとまつてゐる集を遺してゐないが、敷島の道にも嗜みがあつた。木門の袖領雨森芳洲が老後に至り一萬首の歌を詠じた例も名高く、貝原益軒は和歌は國風の醇なもので、國民の嗜むべきものといつてゐる。今當時の儒家の歌集につきてその作風を考察して見る。

惺窩先生倭
歌集

惺窩は冷泉家の嫡流で、儒學と共に和歌を好んだ。その集三卷中上中の二卷には短歌を収め、下の一巻には和文を収めてある。歌は草根集の倂を留めたやうな作が多い。集中に佳歌が一つもないと鶴舟のすさみには酷評を下してあるが、鴻儒の歌とてさすがに吾人の意を惹くものが無いではない。渡唐の志を立て、薩摩の山川の港を舟出したるに、途中で颶風にあひ、鬼界が島に漂着した時の詠には

薩摩瀉八重の汐風告やらむあはれうき身は親だにもなし

と漫々たる海上にて、亡き父の上を思ひ身を思つた作がある。述懐には

人はいなあひやどりして古ぶみのしみのすみかを己がすみかに

の如き學究的の生活を思はしめる作がある。驢馬倒載圖に題した

忘れけり後へしぞきに退くなりゆるやたゞ世を兎馬とて

の如き弛み易き人心を引き立てようとした作もある。哀傷の部には

しらざりし千代もといの言の葉のしるしを塚の松にみむとは

の如き親を忍ぶ作があり、別離の部にて東へ下る途上の吟には

誰がなさけかくやは我を送りゆかむ都の月のあづまぢの空

の如きがあり、題しらすの歌には

いづくより何の爲とか野を遠み尾花にまじり人ひとりゆく

の如きがある。この他

漲りて秋のゆく水河原毛の駒か牛かも分かぬばかりに

の如き印象の鮮明を缺いたり、言詞を弄した作も少くない。當時は三玉集の餘弊を脱しない時代であるから、かゝる作のあるのは止むを得なかつたのである。元和五年に歿した、年五十九。

仁齋は大儒で、歌はもとよりその餘技であつたに違なく、自ら「予もとより稽古もなく師傳もなく花晨月夕折に觸れて心の興れば止むを得ずしていひ出せ

古學先生和
歌集

り」と云つてあるが、山本春正の子通春とは知人であつたから、時にはその作を示されたぐらゐのことはあつたかも知れぬ。一集二百六十餘首の中、儒學に關した歌は二三首に過ぎない。

人ばかり劣りしもせじ月も日もなにか昔の空にかはれる

思ひとればこの身の外に道もなし身を守るこそ道を知るなれ

始のは「斯民也三代之所以直道而行也」を、後のは中庸の「君子戒慎乎其所不覩、恐懼乎其所不聞」を詠じたものである。叙景歌には

雁かへる入江の水のほのぼのとあくるま惜しき住吉の濱

しとゞなくまがきの草のうら枯れて淋しくもあるか秋の山里

雲雀あがるすゑ野の原のかすむ日に遠方人のひとりゆく見ゆ

の如きその代表作である。堂上風であるが、眞摯な態度で自然を見つめ、すなほな表現を用ゐてあるところその人格に一致してゐる。寶永二年七十九歳で歿した。

中江藤樹

中江藤樹は學識德行一世に秀て近江聖人と稱へられた人、杉浦天臺道士は近江聖人か、はた日本聖人か、はた世界の聖人かとたゞへてゐるが、世には先生の

道徳觀を諷ふ

歌を知らないものも少くない。由來偉大なる人物の片言隻句は時に無韻の詩歌であることがある。儒家の歌人は必ずしも少しとしない。併し多くは餘力あれば以て文を學ぶの主義で、いはゞ一種の道樂の爲である。随つて一般歌人の如く單に花鳥風月を詠するものが多い。ひとり藤樹はこれと選を異にし、歌を以てその道徳觀を諷つてゐる。

一集の歌數一百六十首、量からいへば固より多くはない。併し全部悉く道義に關したものであることは他に比類のないところである。抑も人の美しい情操に關した詠吟は萬葉集には可なり多く收められてゐる。君徳臣節に關した歌を撰集に取ることは萩原法皇御撰の風雅集の頃よりやうやく盛になつて來たが、一集悉く道義の歌で充されてゐる家集は他には一向に見えない。この點から見て藤樹先生和歌集は和歌史上に逸してはならないと思ふ。

題を検して見ると立志とか存養省察とか良智とか慎獨とか明德とか至善とか時中といふやうなものばかりで、自然に對しては夏夜看月の二題しかないがこれも内容は全く道義的のものである。先生の如き道徳家には見るもの聞くものが總べて道であり教であつたのである。藤樹は慶長十三年の誕生

であるから、偃武の時世とはいへ、戦國の餘習はなほ除きがたく、偏武の傾向が著しかつた間にひととなり、慶安三年に世を蚤くされたのであるから、經學には全力を盡されても和歌は十分に練られる暇は少かつたと考へられる。けれども普通の歌人には見られない作の多いことは喜ばしい。偶成三十首の中に

いにしへも今もかはらぬ親しみのたへなるこゝろ天地のもと
の如き人は小體の天にして天は大體の人、人の一身を天地に合して少しも違ふことなしと門人戸田氏に答へられたその哲學と合致してゐる。

いかにせむ聖のたかく呼びさます聲にもさめよ世の中の夢
の如き人欲に迷ふ徒を覺醒さしめるもの。

いかで我が心の月をあらはしてやみに迷へる人を照さむ
は明明徳を謠つたもの。兼濟の抱負を見るべく、

樂しみを外にもとむる世の中の人、はましらの月を捉るかな
萬法唯心を主義とされた想を佛教の猿月の喩をとりて謠つたもの。

廣いかな大なるかな味からぬ心のつくる天地萬物

の如き大學解にいつてある良智は不滅不時のものといふ見地からその作用の甚大なることを讚嘆されたもの。

生死は浮べる雲よ味からぬ心すなはち天地の經

は生死無差別を謠つた作。持敬を重んじ反省を怠らなかつた性行は次の歌にも見えてゐる。

まなびえて後の心にくらぶれば昔はよくも免れにけり

神武而不殺の心を詠じたものには

鬼神のをのこの國は治れり恵をきけばこゑも香もなし

の如きがある。陽明學には禪味が多く加つてゐる。先生が陽明全書をよまれる前に始めて姚江の流を汲まれたのは王龍溪の語録であつた。彼の語録には禪味が一層濃かである。随つてその影響を受けた作もある。

世の中は一念ならではなかりけり前念は過ぎ後念は來らず

の如きはそれである。文藝は道德の附屬物でない、併し道德を鼓吹した文藝は必ずしも低級と見るべきではない。歌を道德の方便に使用したといへば、つまらないものとなるが、從來の歌人が謠はなかつた思想をこれによつて詠

歌 蕃山先生和

出したものは低級と見るべきではない。この集に學の歌・知止の歌・五常の歌・慎獨自反之贊など修徳修養に關する歌の多いのは道義の結晶のやうな先生の胸中より迸り出でたもので單に方便に用ゐられたものではないと思ふ。その門下の熊澤伯繼の和歌は甘雨亭叢書に收めてある蕃山先生和歌十三首がそれである。この他息遊先生初年文集にも別の歌が五首載つてゐる。琴歌などもその作といはれてゐるものが民間に流布してある。池田光政侯に用ひられてゐたが、群小に陥れられ岡山を去つた後寛文七年吉野で詠まれたこの春は吉野の山の山守となりてこそ知れ花の心を
の如き、經綸の才を抱きながら、世に合はないで名利の巷を退き、大自然を樂む襟度が窺はれる。

柴の戸をおしたてもせず出づるあとに心もおかすすめる月影
の如きも心安き山居の狀を謠つてある。

木枯におつる紅葉はくちぬともつきせぬ春に花や咲かまし
の如き淪落の身の上を比して百年の知己をまつ感が浮ぶやうである。
うきことのなほこの上に積れかし限ある身の力ためさむ

貝原益軒

の一首は作者につきて異説があるからこれを除く。歌數は少いがその才藻は數首の上にも見られる。
貝原益軒の兄存齋にも遺詠三十首があり、益軒の養子和軒に和軒吟草があるが格別異なつた作もない。益軒は和歌紀聞抄の如き歌學書を遺してゐるが、詠草は傳らない。「來しかたは一夜ばかりの心地しての辭世が傳つてゐるばかりで、恰も惺窩門下の石川丈山に「瀬見小川の」一首しか傳つてゐないのと同様である。

第十一 神道家の和歌

近古時代に於て神官で歌を善くした人は多く攝津住吉神社の津守氏、山城賀茂神宮の賀茂氏等から出た。徳川時代の初期に於ては、この方面にはまづ吉川惟足を推すべく、これと共に度會延佳も數ふべきであらう。伊勢神宮の祠官中、内宮には荒木田氏があり外宮には度會氏があり、その家々の人々で世々の撰集に入つたものが少くない。延佳は内宮の林崎文庫に對し豊宮崎文庫を頼し幾多の典籍を集め、子弟を教養し、陽復記等あまたの著作を出し、後光明

度會延佳

天皇より昇叙された人で、その子延經が家學をついだ。延佳は直庵また講古堂と號し歌をも好んだ。元祿三年七十三で卒した。萬治天和の頃の詠草が一卷神宮文庫に珍襲されてある。

我が神の道ひろまりて八島國もろこしかけて靡く世もがな

の如き神道のすたれたのを慨きての吟で、五部書などによりて神道の立て直しを企てた氣象がこの三十一文字の中にも籠つてゐる。月を見ての作には

みな人にたえぬ光をみよとてや今も神代の月は照るらむ

の如きこれもまた思想詩と見るべく、江戸に出てゐた時の夢想には

むすびあげて五十鈴の川の川水の久しき世々をなほや仰がむ

と謠ひたるが如き、大神に奉仕してゐた人の作としてはふさはしいものである。また朱文公の像を人に授けるとて

いにしへの賢き人の面影を心の水にうつしても見よ

の如き詠もある。古今のすなほなる調を具へたものが多い。

吉川惟足

吉川惟足は江戸の人、始め尼ヶ崎五郎左衛門といひ魚商を營んでゐたが、力行苦學して萩原兼從卿に謁し唯一神道を學び、後古神道を唱へ、視吾堂と號した。

保科正之、徳川頼宣、津輕信政等の諸侯の信賴を得、この道を弘めることに努めた。朱子學者の山崎闇齋の如きも、後には節を屈して惟足の説に従つたといふ。吉川惟足和歌集一卷が遺つてゐる。老後に道のいたらざるを歎きて

もろこしの道は花さく世の中にやまとの春をいつとか待たむ

と詠んだ。この一首は延佳の我神の道の歌と趣を一にし、儒學の興隆に對し神道の不振を慨する意が十分に溢れてある。尙神道觀を謠つたものには

吾を視るかけを心の鏡にてひとり知るべき神の道かな

さよ嵐ふけゆくまゝに音絶えて空も心もすみわたるかな

の如きがあり。また

迷はじな空にくもらぬ日高見の國つ神代の道のしるべに

の如き作がある。神道の興隆は王室中興の兆と固く信じてゐた思想の流れたものと見るべきである。津輕信政侯が三伏の暑さを厭はずその草堂を訪れて教を請うた時

埋れし我が道芝をふみ分けて誰かはとはん君ならずして

の一首を贈つた。師資の親しい關繫を忍ぶに足る歌であつて思想家の作品

にありがちな道歌的の傾向がないのは嬉しい。次に叙景歌には

天の原霞にけりな千早ぶる神代にかへる春にあはゞや

はしたなく花に嵐のふくときはしづめかねたる我が心かな

時なればふるや時雨の音たてゝ天の道こそ正しかりけれ

これら數首の中にも景中に情意を寓して思想歌人たるの俤は見られる。元祿七年七十九で歿した。

龍熙近

神道に於ける功績はこの二人に比ぶべくもないが、この道に志ふかく或は神宮に仕へる身として神祇百首を詠じた人々がある。龍熙近は山田の人、尙舎と號し道且ともいつて、神佛幽顯の道を鼓吹した。文龜に於ける度會元長の擧にならひ、寛文の頃、堀河百首題で神祇百首を詠じた。その作例次のやうである。

常世より來る春ならし天の戸やあけゆく鳥の長鳴のこゑ

行末も猶たのもしな久方の天つ日嗣のかぎりなき世は

荒木田氏守

熙近は元祿六年七十六で歿した。次に内宮の權禰宜荒木田氏守も延寶六年の頃神祇百首を詠じ、中院通茂公に點を請うた。井阪徳辰も神祇百首を詠じ

た。かの千年を経たる大木の天を摩し塵も止めぬ白砂の敷かれた廣前に奉仕する氏が敬虔の情から詠出したものには氣高い作が生れなくてはならぬ。それらの人々の傳記は藪田守宣氏の外宮内宮禰宜年表などに譲つて爰には委しく述べない。

第十二 僧侶の和歌

澤庵禪師

徳川時代の始に當り僧籍にあつて兼ねて歌を詠んだ人としては、まづ澤庵禪師及元政上人を擧ぐべきであらう。澤庵は慶長十二年三十五歳の時大徳寺の第一座にすゑられた程の大徳で、朝暮并に諸侯等の崇敬も篤かつた人、歌は日夕その心をのべたものであらうが流石に誦すべきものが少くない。禪師は出石の藩主小出大和守吉英の臣秋葉能登守綱典の子で、宗彭の名は大徳寺の圓鑑國師から、澤庵の名は南宗寺の古鏡禪師から受けたものである。元和六年和泉の山中で病を養つてゐた時、百首を詠じ烏丸光廣卿の點を乞うた。附墨八十一、中に長點が六首ある。故郷といふ題に

いづくにて見るもかはらぬ色ながら月にはおもふ故郷の秋

山中百首

我庵百首

夢百首

梅花百詠

の如きがある。澤庵は身の顯榮を願はないで志はいつも故山にあつた。同年出石の宗鏡寺の後山に投淵軒といふ小庵を作つて隠棲してゐた。相國寺の萬年所叔長老が一偈を寄せられたに對し和韻詩百篇を作り、我庵百首を詠じた。每首いづれも我庵の句をよみ入れてある。和泉百首は推敲を重ねた堂上風の歌であるが、我庵百首は詞を飾らないで思のまゝを率直に詠つてあつて、却つて禪師の心月を窺ふに足るものが多い。その作例を引いて見る。

我が庵は恐れあれども咲くころはおのづからなる萩の戸の中

我が庵のたる氷の數に影みえて月もてふける軒端とぞなる

わが庵のよるの雨にてならひぬるこれをや軒のつま琴といふ

わが庵の谷よりのぼる水煙たかぬ竈やよそに賑ふ

また製作の年次は明でないが夢百首を詠じた。

まどろまで年を迎へむとせしかども夢の中より春は來にけり

涼しやと螢になれてふかしつゝ端居にむすぶうたゝねの夢

馴れてきけば籬の鹿も蟲の音も夢にはさまできはらざりけり

の如きは格調の整つてゐる佳作である。また中峰禪師の梅花百詠に擬へ、或

る年の除夜に梅花百首を詠じた。

ひとつ二つつぼむが中に咲きしこそ盛よりなほ梅はめでたき

いかにせん里の子どもの梅折りてやがて捨てぬる花の惜しさよ

の如きがある。また謠曲山姥の中の詞句をとつて題とした五十首詠がある。一洞空谷の聲、無生音、真如の月、法性の嶺、常樂の夢、色即是空、邪正一如等佛教の教理に關した作が多い。

鐘の音も谷のこだまも吹笛も

中むなしくて鳴る響なり

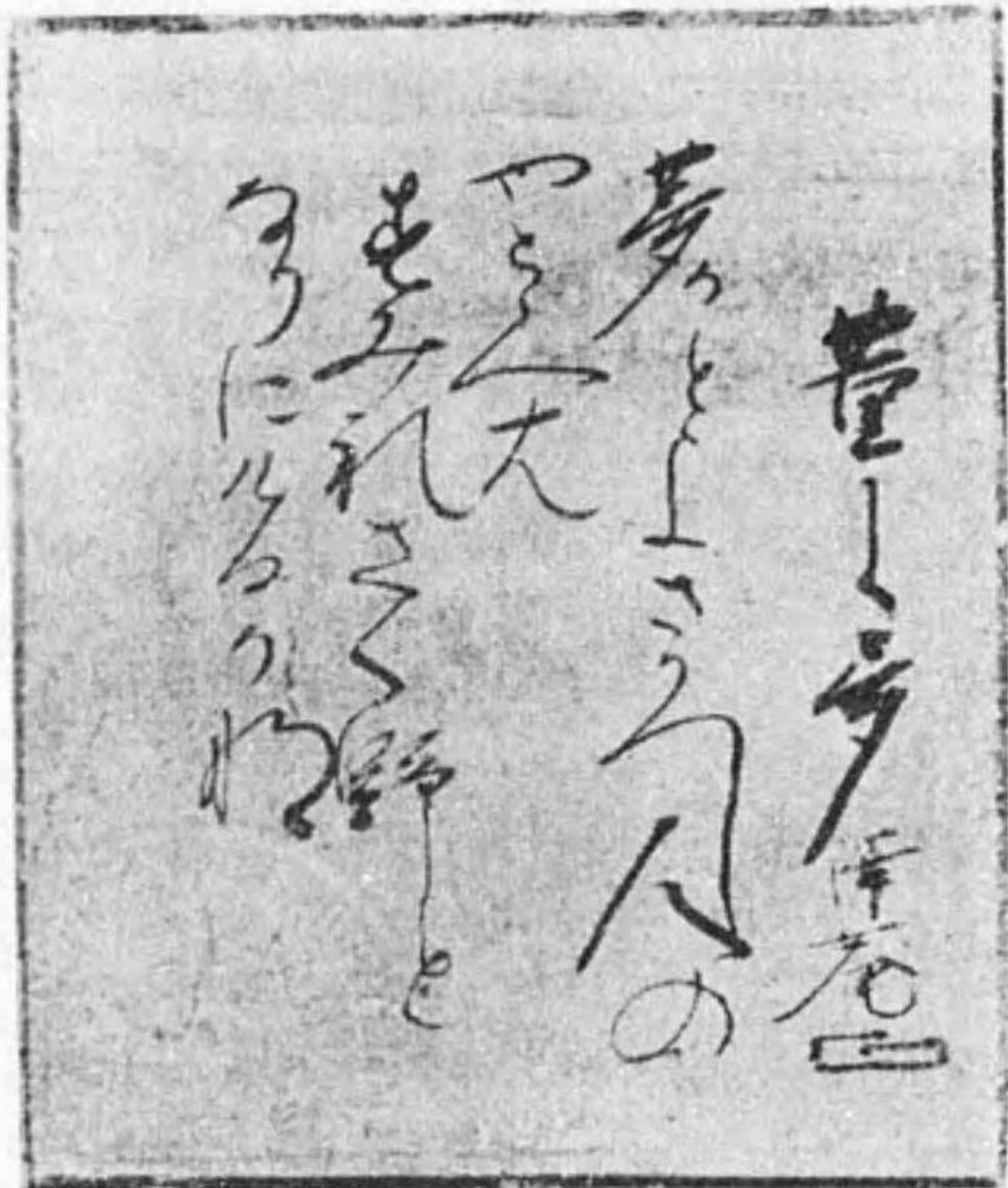
まだ立たぬ波の音をばたゝへたる

水にあるよと心にてきけ

の如き教諭を旨とし、詞の雅びを要としない作である。

澤庵は寛永六年大徳寺の法嗣一件で幕命を拒んだので羽前の上の山に流さ

山姥五十首



澤庵の色紙(細川侯爵家藏)

れた。この時齡方に五十七歳であつた。同事件で棚倉に流された玉室と白川關で袂を分つた時の唱和や、沿道并に最上などにての偶作には吾人の意を惹くものがある。

思ひきやこよひの月を陸奥のあこやの松の蔭に見んとは

最上川はやせに月も流されて暫し浮世にすむかひもなし

の如きはその一二例である。これより二年前大和の三輪の草庵にて病を養つてゐた時六百首詠を試みてゐた。上の山に着後、小堀遠州が烏丸大納言の許にとゞめ置かれたこの稿本を請ひて謫地に送つて來たので四百首を詠み加へた。これが所謂謫居千首である。また東海和歌集に收めたものは別に千五百五十首の多きに上つてゐる。この中に禪師の生活や境地が謠はれたもの多い。上山城外松山に假初に結んだ春雨庵にての作には

花にぬる胡蝶の夢をさまさじとふるも音せぬ軒の春雨

散る花を惜しむ涙か入相の聲もうるほふ春雨の空

としくの花を惜しむとせし程に我が身の春ぞいたくふけぬる

とひよれど答ふる人の音もせず柴の戸とちて花のちるく(寂寞無人聲を詠めるもの)

謫居千首
東海和歌集

春雨庵にて
の作

紀行と歌

の如きがある。これらの諸詠は専門歌人の作を凌ぐものである。寛永十年赦され歸洛の上後水尾院に原人論を講じ奉り、三代將軍に強請され品川東海寺の開山にすゑられたが、山林隱栖の志は熾であつた。寛永十年の鎌倉遊覽記にも三十二首、木曾路紀行には六十九首、歸西日記には四十四首の歌が交つてゐるが、多くは地名を詠みこんだものや懸詞を使用した歌であつて、風趣が乏しい。また茶器ばかりを詠んだ茶器詠歌集がある。山姥五十首及茶器詠歌集には平語や漢語を用いた作が多い。澤庵は大悟の人であつたが、特更に法門百首とか經典和歌を詠まなかつた。併し機に觸れ時に臨みて禪機に關した作がある。

なにとなき筆のすさみをとりに出て思はぬ人になく涙かな(一)

身にしめてふれども更に聞えぬはわらやの雨か鈴の空音か(二)

むねの空心の雲のたえまよりひとつの月の影ぞさやけき(三)

面壁の祖師の姿は山城のこまのわたりの瓜か茄子か(四)

(一)は丹霞燒木佛を、(二)は板倉周防守の請により普化上天の圖に題せるもの。

(三)は片倉小十郎景繼に返したる歌、(四)は達磨面壁を詠じたもので、江戸初期に

禪機の歌

元政上人

於ける僧侶歌人としては相當の地歩を占めるといつてよい。元政上人は俗姓石井氏、名は日政、京都の人。彦根中將井伊直孝に仕へてゐたが二十六歳で剃髮緇衣の人となり、深草に瑞光寺を創しすが、しい生活を送つた。至孝至誠な資、釋門の名士としてその人格閱歴は世に知られてゐる。集を草山集といふ。歌の草山集は詩の草山集ほど多くはないが、禪味のある歌、隱逸の氣に満ちた作風は松永貞徳に學んでも自ら異彩を放つてゐる。

草山集

つひに身の煙とならんはては猶花に立ちそふ霞ならまし
の一首を見ても西行をしのばせるものがある。

ことしげき都の人はいかゞ見る水草きよみすめる月影

蟲の音ももよほすばかり夕立の名こりすゞしき庭の草村

うらやまし宇治の橋守いく秋か月をながめて年の經ぬらむ

散る花は風に恨みてなぐさめき暮れゆく春を誰にかこたむ

の如き自然の禮賛や憧憬を詠つた例である。

みねの雲谷の霞にくちぬべしうき世にそめぬ麻のさ衣

人の世のこと語はぬ郭公またも訪はなむ松の戸ぼそに

なにごとく今は山田のひたぶるに捨てゝやすまむ谷深き庵
の隱逸の氣の満ちてゐる作である。佛典の意を詠んだ歌は少くない。

おもへ人たゞぬしもなき大空の中にはもるゝ海山もなし(二)

はらひ見よ心につもる塵ひちの山の端なくば月も隔てじ(二)

よるはなほ心をのみぞ照すべき窓の螢もなにか集めむ(三)

鶯の山常にすむてふ峰の月假りにあらはれかりに隠れて(四)

(一)は若離我執忽然大我の心を、(二)は四弘誓願の中の煩惱無盡誓願斷を、(三)は大智度論の螢火蟲亦不作是念我光明能照闇浮提云々の要文に由つて詠んだもの、(四)は辭世であつて上句は常住不滅の法體を含め、下句は生死往來の應佛の相をいつてあるやうである。歌人で頭を圓くし在俗の人で内典の要文を三十一字になす人は少くないが、その閱歴生活と禪味を帯びた詞藻の合致とは近世に於ては元政上人に於てこれを見る。元政は妙子また不可思議と號した。寛文八年四十六歳で示寂した。

この他僧侶歌人として眞言の妙立和尚に和歌集がある、今一々説かない。

第十三 諸侯の歌人

七四

和歌は武夫の嗜

關ヶ原の役の直前細川幽齋は敷島の道の爲との勅命もだしがたく、田邊の舞鶴城を明渡したのを、徳川家康はあたら武士道の爲にとさいなんだが、文を右にし武を左にし兩者兼備ふるは眞の武將との觀念は人の心に泌みこんでゆき、分けて弓は袋に治まる世となりては堂上公卿のもてあそびものゝやうに云はれてゐた和歌はものゝふの嗜み、反言すればその教養の一つになり、かくて和歌は諸侯の文學としても重要な地位を占めるに至つた。尤もそのかみ既に夙に和歌を嗜んだ諸侯もあつた。仙臺侯伊達政宗、會津侯蒲生氏郷の如きは夙くその名が聞えてゐた人、飯田侯脇坂安元の如きもこれを好んだ人。かくて武家の棟梁たる將軍家に於ても國風はこれを嗜まない譯にはゆかなくなつた。三代將軍家光は寛永上洛の時道中吟を試みた。大磯で詠じた

うつしゑも及ばぬ山の海かけて松に波こす浦のながめは

の如き専門歌人のそれと變らぬものと云つて宜しい。天下の諸侯は多くは

諸侯と和歌の關繫

堂上の流を汲んだ歌匠を招き或は侍臣中この道に志深き人を相手となし歌の會を行つたもので、その作には幾分添削は加つてゐるものがあつても、上の好むところ下これに倣ひ、一國一地方の文學がそれが爲に靡然として起つて來る有様であり、また祖先にこれを嗜んだ人があつた家々にはその後裔たるものはその志を繼いでこの道に志を寄せる習であるから、諸侯の和歌も唯大名藝として斥くべきでない。唯相當により得る大名はその所詠を京都の宗匠家に送りその加點を乞ひ、また特に優秀なるものは畏くも禁裏仙洞の勅點を得て無上の光榮となし、家の譽れともしてゐたことは平安朝の歌人がその所詠の撰集に入るを祈り身の面目としてゐたのと同様の有様であつた。

伊達政宗

東北の雄鎮であつた伊達政宗は詩歌を好み詞客を招きて文雅の會を開くことが屢であつた。僧虎谿及林羅山の如きも侯と唱和した一人である。慶長十九年三月政宗は幕命を奉じ越後高田城を築かむとて彼地に滯留中旅情を慰めつゝ書綴りて夫人田村氏へ贈つた伊達の松蔭及海人の捨草二篇の文章の如きよく徒然草の文體を模してゐる。貞山公集に收めてある二百七十五首の和歌の中には誦すべきものがある。中に關雪を詠める

伊達の松蔭
海人の捨草
貞山公集

七五

さゝすとも誰かはこえむ逢阪の關の戸うづむ夜半の白雪
の一首は集外歌仙にとられてゐる。

出づるより入る山の端はいづくぞと月にとはまし武藏野の原

の如き武藏野の月を詠じた一首も歌口ならではと想はしめる。また

曇なき心の月を先だてゝ浮世の闇を照してぞゆく

の辭世の如きその抱負雅懷を想見すべく、子孫歴世歌を好み集を遺さない人はないぐらゐである。連歌師猪苗代兼載の子孫の如き高祿を以て抱へられ、歌及連歌の宗匠として仙臺文學に關與してゐる。和歌や學問を世職にすることは道の爲には必ずしも喜ばしいことではないかも知れぬが、諸侯が文藝を奨励し陰に陽に保護を加へ來つたことは看過してはならないことと思ふ。幽齋に傳を受けた是齋兼如、近衛關白信尹公に教を受けた看松齋兼與など猪苗代家の人々が仙臺藩に出た如く、他藩に於ても同様の例が多いことゝ想像される。

脇阪安元

脇阪淡路守安元は父安治の後をうけ伊豫の大洲を治めてゐたが元和三年信濃の飯田に移つた。飯田文學は實にこの人より起つたと云はれてゐる。安

治は烏丸光廣と親しく澤庵とも相識の間にて、雅懷を互に通はしたこともあり、詠二百首和歌を遺してゐる。安元は父の血をうけて歌連歌を好み八雲軒と號した。

さくら川瀬々の氷もけさとけて波の花咲く春のはつ風の如きその作風を示すものである。承應四年七十歳にて歿した。

青山幸成

尼ヶ崎城主大藏少輔青山幸成も木下長嘯子澤庵禪師及文殊院應昌等と親しく交があり、家集一卷彰考館に遺つてゐて江村宗珉が序にその集の成立を説いてある。尼ヶ崎の文學はこの時より興つたと云ふ。

萬代をまつにかひある住の江の雪につもりの春のあけぼのの如きその作風を見るべきものである。寛永二十年五十八歳で歿した。

榊原忠以

姫路侯式部大輔榊原忠以は徳川幕府の四天王の家に生れて而も文學特に和歌に深き趣味を有し、續勅選作者部類新葉集作者部類を著し、萬治三年に武家百人一首を撰んだ。この百首は時尚に投じ寛文より元祿に至り改版すること數回に及んだ。諸侯にしてかゝる著作あるは侯を始とする。寛文五年六十一歳で歿した。その子政辰は中院通村に歌の點を受けた。

高麗人も君がやしまを萬代とよばふ響は物の音にして
郡上侯遠藤備前守常友は東野州の後を承けた家筋とて和歌を嗜み蒙吟詠草
を遺してゐる。阿野公業卿などの感化を受けたかと思はれる。その歌風は
次の如し。

春たつと思ふにけさはもろ人の心の花やまづひらくらむ

延寶四年に四十九歳で歿した。子孫に歌を善くするものが出た。

柳河侯侍従立花忠茂は驍勇の譽が高く致仕の後好雪と號した。夫人は二代
將軍秀忠の養女、實は伊達政宗の孫女である。夫妻共に歌を好み兩筆で寫し
た六百番歌合が今も立花伯爵家に藏されてゐる。古今以降雪玉集までの佳
歌をぬき五卷に叙でて自詠の範となしてゐる。集を別峰院御詠草といひ七
百四十五首を収めてあるが、中に參觀の途上の作が多い。

いとゞしく心細きは老をのみうき身にとめて暮るゝ年かな

柳河の文學はこれより起つた。好雪は延寶三年六十四歳を以て歿した。子
孫歴世敷島の道に志す人が多く出た。

中津侯小笠原内匠頭長勝も斯道に精進のあつかつた人、寛文五年から延寶七

年までの歌千八百三十首を収めてある。領内山國川羅漢寺年魚返りあたり
の勝景を謠つた作がある。後水尾院勅點飛鳥井雅章の加點がある。

水の面はさらでも涼しはつ風に柳の一葉秋を浮べて
の如き好調の作が多い。天和七年三十七歳で歿した。

磐城平侯内藤左京大夫義泰は風山と號し歌及連歌を嗜んだ。延寶の始め阪
以得をして續類題和歌集三百卷を撰ませた。水戸光圀卿とも親しかつた。
その子義英は俳名を露沾といひ父子ともに文雅の志が篤く、溜池葵橋の邸に
は騷人墨客の來て遊ぶものが常に絶えなかつたといふ。芭蕉の如きもその
邸に伺候したものである。侯は十七八歳の頃より歌壇に立ちならしたことが
五十年間。集を左京大夫集といつて八卷から成つてゐる。常陸や磐城地
方の風物を詠じた作が少くない。後水尾院道晃法親王、烏丸光廣、同資慶中院
通村飛鳥井雅章、日野弘資等の點も加へられてある。

玉だれの小籠まきあげて待いつる月にま近き野邊の一村
夕なぎに棚なし小舟ほのみえて月さしのほる笠ゆひの島
などにその作風を見るべし。貞享三年に歿した。

細川行孝
續耳袋記

熊本侯細川越中守忠興の二男で宇土に封せられた中務少輔立孝の子丹後守行孝は曾祖父幽齋の風を慕ひて最も諷詠に長じて烏丸資慶に親炙し續耳袋記等の歌學書を著し、内藤義泰・中山信治及民間歌人觀阿などと歌合を試みたりして自他の和歌を撰んで濱真砂を編んだ。家集を葵花集といふ。後水尾法皇の御點資慶卿の加點の歌も少くない。その作例一つ二つ。

濱真砂と葵
花集

朝ぼらけ霞のをちに行く舟ものどかに見ゆる志賀の浦波(湖上朝霞)
思ふぞよ騒がぬ鳥の音のみしていさめの鼓こけ深き夜を(述懐)

の如きその作風を示すもの。元祿三年歿す。年五十四。泰源院と諡す。

中山信治の
土窖千首

水戸の徳川頼房の附家老として松岡に治してゐた中山備前守中山信治も歌を善くし、風軒と號してゐた。延寶三年八十三歳の時土窖千首を詠じてゐる。

衣手の常陸の海のみちひろく春は立ちかふ波のあさなぎ(立春)

隔てすや竹はよそなるすがし枝をもちくる月の袖てらすなり(隣月)

まきもくの弓月が岳のはれゆけば曇りし谷や今しぐるらむ(谷時雨)

のどかなる淀ともしらす心よりうき瀬にすみしいさをなるらん(寄瀬 述懐)

などにその作風を見るべし。

蜂須賀光隆

徳島侯蜂須賀侍従光隆は飛鳥井雅章に歌を學んだ。入部の時中田の花見に人々を遣しその詠を集め、阿波八景を定め、また領内淡路の松帆浦に松を植ゑて詩を賦せさせられる等文雅の志が深かつた。中道で亡くなつたが延寶二年雅章卿の撰に成つた里蜚集には優雅な歌が四百二十四首を収めてある。

里蜚集

故里を見し夜の夢のはかなくもさむる枕にのこる松風(旅)

池水の下にも秋やふけぬらむうつす紅葉のかけぞ色添ふ(東海寺にて)

はちす葉の露に濁らで宿るてふ月もしぐるゝけふの御法を(父の十三回忌)

夢うつゝ更にもさだめじ春の夜のおくるも知らぬ袖のなみだに(祖母の喪)

等その代表的のものである。

松平頼重

麓の集

水戸中納言頼房の長子で讃岐の高松に封じられた左近少將松平頼重も和歌を好み、萬治中詠二百首を後水尾院に奉り勅點を請うた。集を麓の集といひ歌数は千首に上つてゐる。龜山八景を定めた。晩に龍雲軒と號した。その老臣に松平可正があつて歌を善くし侯の文雅を助けた。笑草百首後笑草百首等の詠がある。

後笑草百首

以上の諸侯は概ね堂上の流をうけ、古今を典とし新古今を則とする等歌風に

多少の差異あるものがあつてもいづれも詞とゝのひ格調も堂上のそれと異ならず、中に専門歌人と伍しても遜色のない歌口であつて、左右には一二の歌にすぐれた侍臣をひかへ、或は雲上堂上に所縁を求めて批點を請うてゐるのが普通である。これらと撰を異にするは夙く保科正之があり、少し後れて堀田正俊がある。

正之は將軍秀忠の子で保科家を襲ぎ、四代將軍家綱を輔導して幕政を掌つた人、山崎闇齋を尊信し朱子學を鼓吹し、吉川惟足を延いて神道を崇奉した人、従つてその歌は世の歌人の作と異り藤樹先生歌集に見るが如く道義的のものが多く、聖經の翻案若しくはその譯歌と見えるが如き作に満ちてゐる。

保科正之侯
の集

聖經の譯歌

常ならぬつねこそ常にかはらぬをかはらむ道を何もとむらむ

いつはりの身は二人とやなりなましいづれを我とわきて知るらむ

食しきも老も忘るゝ樂しみはまなぶる道のまことなりけり

今更にいにし聖の鳥のあとをみるにあかなくとこめづらなる

うつらじと思ふだになほ危きは人の心の花のゆくすゑ

山里はかすかに見えて玉鉾の道の心は思ひ分れず

末の二首は聖經の人心惟危、道心惟微の意を詠んだもので、その他詞書にも求心の心を、氣質の心を、朝聞道夕死可といふを、窓前の草除かすといふをと云つた風に道義に關したものはかりで、措辭もうぶなところが多いが、その臨終ま近きまで牀頭に於て侍臣に近思録をよませて聽かれた侯の行跡はその詠作を心裡の聲としてうら附けるのである。

堀田正俊

五十首和歌

古河侯堀田正俊は五代將軍の親任極めてあつた人で、大老の重寄により幕政をきりもりし明良際會の趣があつたが、貞享元年柳營にて稻葉石見守正休に刺され五十一歳であへなき最後をとげた。五十にして四十九の非を知つた古賢に倣ひ、時々の詠を集めた五十首和歌が遺つてゐる。その中には敬神撫民、反省、安分、操守などの諸題を詠じ、月や花紅葉を詠するにも唯客觀的に止まらず、そこには理想をはめかして人生觀、政治觀を諷つてゐる。歌人を以て擬するは土津神君と同じくその欲せざるところであるが、思想詩の少い我が和歌史上には捨てゝ願みない譯にはゆかないと思ふ。

代々につたふ三つの教もつゝしみてむかふ鏡の影にしらるゝ
里とほき片山かげの庵にしれあるじなきにはけものすむてふ

思ふこと一つかなへてまた一つみつることなき心苦しも
 ゆく駒のあとにたまれる水にさへ隔てずやどる月の影かな
 青柳のなびくひまより影もれて心にすめる月を見るかな
 たとへ見む言の葉もなし罪なくて月みる夜半に松かせの聲
 聖經も時所位を辨へずして學ぶは危険である、世の太平を保持し人々矜持し
 て堅固な意志をもつべきことを諒つた點にその特色を見るのである。惜む
 らくはその歌數の少く且洗煉に缺くるところあるのは忙しい政治家として
 止むを得なかつたであらうか。

第十四 徳川初期に於ける堂上諸家の門人

鳥丸家の門人

徳川初期に於ける堂上家中にも鳥丸中院飛鳥井家等に教を受けた主要な歌人を列ね擧げて見る。まづ鳥丸家にては光廣卿は關東の信賴が厚かつた人であるから幕臣などの中にも定めて贊を執つた人があつたと考へられるが明かでない。法橋渡邊友益播磨人はその歌學の影響を受けた人。その孫資慶卿の門下には岡西維中があり、源頼永が聞えてゐる。時代はずつと下るが光

阪光淳

雄卿の門下には松井政豊、鈴木重規、阪光淳が出てゐる。中にも光淳は撰著が多い。光淳は通稱を將曹といひ、靜山と號す。詠歌入門、和歌格式、和歌用心記、諷詠覺悟抄、拾題辨知抄、和歌禁忌遠慮之辨など、堂上歌學の書を著し、渡邊友益、岡本宗好、清水宗川等當時の人々の詠八百餘首を撰んで、和歌繼塵集三卷となし、寶永七年に上板し、その後和歌山下水三卷を撰み、享保十七年に板行し、元文四年更に和歌和泉杣三卷を撰んで出版した。これらの私撰集は下河邊長流の累塵萍水などの撰の影響を受けて成つたものである。

飛鳥井家の門人
河瀬菅雄

飛鳥井家の門人中名の聞えてゐるのは雅章卿の教を受けた人に多い。中に河瀬菅雄、清水宗川、本多重世、玉手貞直等がそれである。菅雄は醉露軒と號し、草木名所考二十卷、古今見聞抄五十卷、まさなくさ五卷、菰枕三卷の如き種々な著作を遺したばかりでなく、累塵萍水に倣つて天和三年撰集麓の塵一卷を出した。草木名所考二十卷は手のかゝつたものであり、古今見聞抄五十卷は古今集の注釋として諸説を綜合してある。その醉露軒和歌集三卷は未だ管見に觸れないが雅章門下の高足であつたことが知られる。清水宗川は長嘯子にも關繫があるやうに思はれる。水戸光圀の爲に撰集をなしたことは後に

惠藤一雄
山名玉山

述べる。和歌古語深秘抄の如き歌學叢書を出板したり、拾題和歌抄を撰んだ
惠藤一雄は菅雄の門人である。本多重世の門に出た山名玉山名は義豊は達吟の
人でその遺稿は二萬五千七百餘首あつたといはれるが、その全きものは傳ら
ない。和歌鳥の跡等に載つてゐる歌は清新の氣に富んでゐるといはれてゐ
る。戸田茂睡の從弟で且歌の先輩である。

和田の原くるれば見えぬ天地のさかひ知らせていづる月かけ
うき世をば寢覺ばかりに厭はれてまた身の業に今日もくらしつ

の如き詠を見ても印象鮮明情趣純眞の作が多く、伎倆に於ては茂睡に數歩を
抽いてゐるものである。元祿七年七十二歳で歿した。

中院家の門
人
松井幸隆

中院家にては内府通茂の門下に人が多く出た。最も當流の歌學を傳へその
歌風を詠んだものには松井幸隆がある。幸隆は本姓山田氏、掛川の人都にい
でて松井氏を襲ぎ町奉行組與力となり、通茂に歌を學んで六窓軒と號した。
愚問賢註六窓鈔溪雲問答未來記雨中吟聞書等の歌學があり、門人度會常彰の
聞書した六窓壁談がある。元祿九年に三玉類題を出し、享保の末年に古今和
歌集類題を出し、當流の流布に努めた。大田侯六郷侯に聘されて晩年には江

京極高門

曲妙集

稻葉正倚

林直秀の竹
窓集

小林正甫

胤海が述懐
百首

澤村琴所の
閑窓集

戸に住んだ。幸隆類題の歌は當流の型に嵌つたものである。京極飛驒守高
次の次子で分知して寄合となつた京極高門は同門であつて歌文共に優なる
方で、家集曲妙集四卷の外に隅田川歌合三蛙文集等の作がある。享保六年に
歿した。稻葉美濃守正則の次子で天和中に分知した稻葉正喬後正倚と改むには席
話抄、知海抄の如き歌學書があるが家集は管見に觸れない。また御書院番の
林直秀に竹窓集があり、(享保十一年歿)その兄陸奥守重澄も同じく通茂公の加點を請
うて老淵集があるが、いづれも堂上の型を守つてゐるに過ぎない。大番の士
小林正甫も同じく公の加點を受けた。小林詠草か遺つてゐる。僧正胤海も
同じ門であつて詠老後述懐百首等が遺つてゐる。その詠風は次のやうであ
る。

子の日にと引かれし春も昔にていまは老木のまつこともなし
吹風に力もよわき青柳のいとくるしくよれる年かな

伊藤東涯門下で彦根侯に仕へた澤村琴所なども松井幸隆と關繫をもつてゐ
て歌を詠じたがその家集閑窓集には佳歌は無い(元文四年歿、享保五十四年歿)。

漢學者で歌をも詠んだ三輪執齋も通茂公の門人であるが、これは別に次期の

漢學者の和歌の條に述べる。

第十五 傳授思想の排斥

系圖を作る

戰國時代から織豊時代にかけては、氏の賤しいものでもその手腕と力量とにより忽にして風雲兒となつたものが少くない。一たび天下が靜平に歸した後は、彼等はその家に勿體を附ける爲に新に系圖を作成することを欲するに至つた。その需に應じてこれを作成することを業とするものを生じた。寛永年間に幕府が諸家譜を修するや源平藤橘いろ由緒ある氏姓が殖えたと違ひない。ひとり飯田侯脇阪安元は祖父安明より系を立て、その以前に及ばず、且その始に

北南それとも知らずむらさきのゆかりばかりの末の藤原

の一首を誌して將軍家に奉つたといふ。かういふのは洵に希有の例である。一般に傳統を重んずる精神は我邦には古來盛んである。歌道に於ても亦然りて、古今傳授が久しく行はれてゐたのは同じ趣と考へられる。彼の松永貞徳の戴恩記は一面師道を重んずるといふ美しい精神の發露と思はれるが、新

和歌の系圖

古今傳授

興の家が古い系譜を作つたと同じやうに、傳承の有がた味を冀つてゐる時代相の一面を反映してゐるものと見ることが出来る。特に二流三流の徒に至つては、自ら深く究めてゐないことは口を祕傳に藉りて正當な解釋を與へようとし、ないものも多々あつたと思はれる。一體古今傳授といふことは時代によりてその内容が變つてゐるやうである。貫之は神に祀られなかつたが歌聖のやうに崇められ、古今集が歌の規準となつてゐたことは年久しいことで、その古今の研究者が集中不明の動植物や宮廷の故實や人名、官名その他の讀み曲くまなどを志の篤い人に授けたのに始まつたに違ひない。つまり歌道を重んじる精神の一つのあらはれであつたのである。然るに後にはこれに別の意義が附け加つて來た。武家が大權を私し、和歌管絃を禁裡堂上の専らとすべきことに定めてからは、歌道王道の一致といふ考から、古今集中の不明の事物に種々の理窟やことごとしい祕傳などか附け加へられたものと思はれる。詠作にすぐれたものでもこの傳授を受けないものは恰も藝道に於ける免許皆傳をとれないものと同じ趣があつた。公卿の宗匠家に於てもその門に入り多年精進する人でなければ道の奧祕は容易く傳へない。その一部分

歌道王道の一致

を傳へ知つたものゝ中には内容の空虚を知つてか知らずかは分らないが、それをこの上もなくゆかしがる人もあり、また詰らないものと思つたのもあつたに違ひない。然るに寛文から元祿へかけては我文學の復興期に方り儒學には仁齋の古義學派が起り、小説には輕妙な西鶴の廓文學より武家物、町人物が出で、淨瑠璃には天才近松巢林子が現れ、俳壇には宗因から芭蕉へといふ風にいづれの方面にも革新の氣風が盛に起つて來た。堂上方に優越な權威があつた歌道に於ては、他の文藝のやうに革新運動の起るのはどうしても後れざるを得ないのである。それでも古典研究が起るにつれて傳授といふ手堅い牆壁にぶつからずには止まない。これは圖書出版の盛になつていつた結果、自由研究といふ近代的精神のあらはれに外ならないのである。制詞の上から堂上歌學に弓を引いた陳勝吳廣は武家の家來で浪人をしてゐた戸田茂睡であり、古典研究から傳授思想に巨彈を浴びせたのは隱士下河邊長流や契冲阿闍梨である。尙この方面に花々しい活動はしなかつたが、傳授思想を非としてゐた木瀬三之をも逸してはならない。

宮川松堅の撰んだ倭歌五十人一首追加にはその門人内海顯胤が三之居士博

學得業近代之賢人也と師説を擧げてたゞへてゐる。また谷川士清の書入萬葉集中に三之の説を所々に引いてあることは余も夙く書いたことがある。古今より溯つて萬葉の研究に志したものは古今傳授とか祕傳などいふものが全く根據のないものだといふことに想到するのは自然の數である。三之の萬葉研究はいつ頃から始めたのか、誰によつて啓發されたか明かでないが、既に寛永板の萬葉集は當時容易に手に入つたに違ひない。その原典に就いて多年研究したものであらうか、佐々木博士によれば、三之は一名を隨宜といひ竹林とも號し、京都山科及志賀にも住んでゐて和歌は里村昌琢に學び、神道にも精しかつたといふ。その著に三輪若宮縁起がある。

凡て古今に傳授など云へることあるべからず、貫之心にはあまねく和歌の心を諸人に知らせまほしく思ひて書きたれば、ゆめ／＼祕傳あるべからず、序にも今もみそなはし後の世にも傳はれと書けり。末の世になりて愚かなる人のいやしき心より傳授といへること始まれり

とその著の中に云つてゐる。傳統に囚れないで物の真相を摺むといふ態度はその親交があつた貞徳とは全然相反してゐる。斯ういふ見解をもつてゐ

た人だけにその作物にも新味のあるものがある。志賀浦で春を迎へた歌に
しがのうらや度士考羅も拱て浪しづかなる春は來にけり
の如きこれを證するものである。また

世にすまば世にそまれとや蔦の葉のおのが紅葉を松にかすらむ
の如きも趣向も表現も變つてゐて面白い作である。

武藏野はなほ分けわびぬ蔦楓しげりて細き山もこえしが

の如きは舊型を離れた作である。併し百家の書に涉りてあまねく知りつく
さすといふことなかりしかど書を著すこと稀なり」と門人今井似閑がいつて
ゐる如く、自家の研究に留まり社會に呼びかけた人ではなかつたやうだ。そ
の生歿共に不明であるが長流よりは多少の年長であつたと思はれる。

堂上歌學に對し強弩を彎いた戸田茂睡は始め渡邊馮といひ、寛永六年駿府城
内三の丸に生れた、名門の出であるが、父が駿河大納言の事に坐して下野の黒
羽に蟄居を命せられたので、馮も彼の地で人となり、後、伯父の家を襲いで戸田
恭光と名乗り本多侯に仕へてゐたが、罷められて淺草の金龍山の邊に世をの
がれ、後本郷丸山町に隠れ家を占め、梨本茂睡とも隠家茂睡ともいつてゐた。

戸田茂睡

辭言しらべ
と梨本集

その詳かなことは佐々木博士の戸田茂睡論に譲つて爰には贅しない。
狷介な茂睡は始は堂上家に歌の點を願つたりしてゐたが、これに満足しない
で、元祿五年百人一首雜談を著し、堂上家の謬つた説を辨じ、また歌詞に關を据
ゑて道を狭くするを慨し、

梨本集
元祿十年辭言しらべを著
し、翌年梨本集五卷を著し、
二條家の歌學が歌人を桎
梏することを指摘し、これ
に向つて鐵槌を下さうと
した。その中には六條家
の爲に辯護したところも
あるが、和歌革新の急先鋒

であつた功績はとこしへに認めねばならぬ。

言の葉のふるの中道あれはてゝ行く人まれになるがはかなさ
古にあらすき返せ言の葉の道は狭くもなりにけるかな

の如きもこの感慨の迸りいでた聲である。かういふ考は夙く寛文五年の頃から抱いてゐたが、元祿に至りて堂々とその意見を發表し、二條派當流に對して戦を挑んだのである。併し、この公開狀とも見做すべき梨本集に對し、堂上并にその流を酌むものから、駁論が一向に起らなかつた。これは抑も何故であらうか。それが當然のこととして反對説が出なかつたのか。和歌は昔ながらのもの考へて唯譯もなく見過されたのか、或は出板部數も少くて識者の目に入らなかつたのか、或は制詞の掟を破るのが主で、歌材を擴げるとか或はその風調をいかにするとかいふ問題には觸れてゐないので、世の共鳴を得るに至らなかつたのか、公卿では民間の著作を見てはならないときまつてゐたので、閑却されたのであらう。その委しいことは大日本歌學史に説いて置いたから茲には筆を省く。

茂睡は門地も相當に修養もあつた武士であるが、境遇が順調でなかつた爲か、或は霸氣があまりあつた爲か、世をすねた所がある。

熊にあらず虎にもあらず淺草におきふす我を誰か知るべき

の如きは文王の渭水の上に獵した時の卜の詞をとつて自家の抱負を示して

ゐる。

塵の世をいとふ心の積りては身のかくれがの山となるらむ

は不求橋の畔に隠棲した時の作で名高い歌であるが、三輪執齋は野鶴閑雲を友とする隠君子でないのを認めて「求めざる心なりせば隠れ家に誰れわたれとてかけし橋ぞも」の歌を結びつけた。茂睡の歌は多くは傳はつてゐない。

詠草鳥のあと、茂睡詠草の如き小さい本や撰集鳥の迹、さざれ石、その他紫の一本等に散見してゐる。次の如きはその佳作であらう。

のがれかね世にふりはてし老の身はかくれすむべき山なしのもと

老ぬれば姿こそはといさめても心は花になりがたの世や

まれにきく都の人のことぐさはたしかならぬも心とまりぬ

また

武藏野をかこはぬ庭にしめおきて富士の高嶺を築山にみむ

の如きがある。「淺みどり立そへ霞色ませ外山」さみだれの古巢や思ふ親や戀しき「流れゆく水はすみよし波は高砂」この頃は高嶺のあらし麓のしぐれの如き第四五の句に對をとる作も可成多い。茂睡は江戸兒氣質で破邪の方面に

適し建設の方面には拙かつたやうだ。その先輩としてゐた山名玉山、清水宗川、岡本宗好などに比して作品は劣つてゐる。寶永三年七十八で世を終つた。

第十六 下河邊長流

京都に於ける木瀬三之加藤盤齋及洛西廣澤の望月長孝と時を同じうして、難波にありて歌道に精進してゐた人には下河邊長流を推さねばならぬ。同じく難波歌壇に立てゐた葛岡宣慶や圓珠庵契沖は長流よりはやゝ後輩に屬する。長流は和歌并に古典の研究に意を潜め、祕事傳承を斥けて専ら自由討究を試みてゐた。近世古學の復興には圓珠庵契沖と共に表記すべき先覺である。

長流は大和の立田の人は宇田とあるは立を誤る小橋氏、具平といふ。難波に移りて姓名を改めた。難波雀によれば江戸堀に住んだことが分る。その師承は明かでないが、はやくより萬葉を研究し、萬治二年三十六歳の時に萬葉名寄四巻を著してゐる。その序中に

上りての代の風體は歌の林に木がくれ詞の海にみごもりて測りがたきこ

とのみ多かるを、よくこの集を窺ひ見すばいよいよ敷島の道は暗きにぞ迷ひ侍るべき。流の末の淺きをばくみ知るといへどもその源の深きを極めずさてのみ止まぬ人いひかひなからずやは。

と述べてゐる。萬葉に見えた地名を國分にし、その一つ一つに證歌を擧げ、時に簡単な註を加へてゐる。尋いて寛文の初に至りて萬葉の注釋を作つた。これは萬葉管見二十巻であつて、この書はその莫逆の友であつた契沖の代匠記に影響してゐることは少くない。茂睡のやうに大聲疾呼はしないが書中に口傳祕授はおろかなことだと云ひて自家の研究を述べてゐる。長流が江戸に下つたのは、寛文の始め頃か或はそれより以前か分らないが、僧湛水が房にゐたとあり、僧宗知とも親しくしてゐた。この二人との關係は明らかでないが、そのかみ江戸に於ても斯壇に知己をもつてゐたのである。歌仙抄を書いたのは萬治二年であり、百人一首三奥抄なども早い時代の作かも知れぬ。徳川光圀卿が招聘したけれども仕官を嫌つたので、萬葉の注釋を依頼された。これは寛文年間のことであつたやうである。萬葉卷二から卷十四に至る長短歌及旋頭歌七十三首を釋した萬葉集鈔は管見より後のものと見えるが、こ

辭考集
萬葉古事并
詞

れも光圀卿に送る爲に書いたものではあるまいか。或はその請を聞いても十分に御請をしなかつたものか、或は契沖を推薦をしておいて自分は手を觸れなかつたものか、或は管見をその積で書いたかそれらを決する資料に乏しい。難語を注した辭考集や萬葉古事并詞などは管見以前に録したものであるから、光圀卿との關繋が全く明でない。併し兎に角その萬葉研究といふことが歌壇に革新を與へる原機となつたのである。

林葉累塵集

長流は寛文から延寶にかけて斯壇に貢獻してゐることは少くなかつた。枕詞の注釋燭明抄を公にしたのは寛文十年である。この歳民間歌人の歌を撰んで林葉累塵集二十巻を出板した。公家を除いて當時の位のない武士農家・商人・僧侶の歌千三百餘首をぬき四季戀雜に次第した。その序文に

大和歌は我が國民の思をのぶる言の葉なれば、上は宮柱高き雲居の庭より下は蘆葺の小屋のすみかに至るまで人を分かす所を撰ばず見るものによせ聞くものにつけて皆その志を言ふ

と誌してゐる。國民の思といひ、人を分かすといふのが近世的である。今日では普通のことであるが、和歌が禁裡堂上の翫物となつてゐた時代にかうい

萍水和歌集

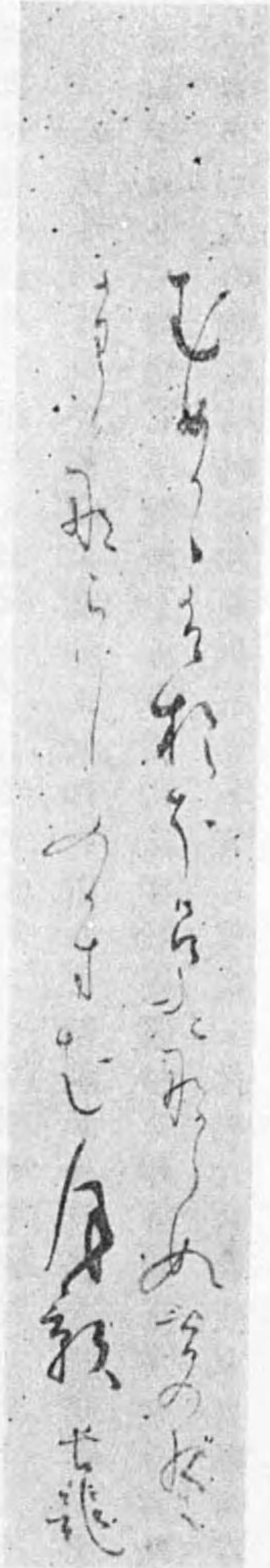
續歌林良材抄
和歌出題抄
材林和歌集

ふ聲を聞くのは洵に嬉しいことである。長流は民衆の爲に大に氣を吐いてゐるとも、自ら目覺めてゐるとも云へる。累塵の中には契沖の作を最も多く採り自詠も百五十餘首を入れてゐるのも、その抱負や相許した二人の地位も察しられる。蓋しその頃民間で自他の集をぬきて撰集を成したのは長流がこれが魁をなすものである。これに洩れた人々の志を満たす爲もあり、延寶七年には更に萍水和歌集二十巻を撰び、足利末期に於ける心敬・宗祇・肖柏等の連歌師の稀に詠んだ歌をも加へた。以上の如く現代の佳作をぬくばかりでなく、延寶五年には一條禪閣の歌林良材抄に倣ひて、續歌林良材抄を撰び、由緒ある歌をぬきて解釋し、また歌をよむ爲には和歌出題抄を作り、範とすべき古歌を索める人の爲には材林和歌集五巻を著し、萬葉三代集・六帖・歌仙家集・堀河百首・曾丹集・散木案歌集より三千百九十餘首をぬき、天象・地儀・時節・居所・人倫・人事・衣食・器財・草木・鳥獸・蟲魚の十四部に分ち四百二十六題を掲げ、歌と出典と作家とを示してある。その他門人の爲に二聖和歌註・三十六歌仙贊註を作るなど筆不精といふべくもない。

長龍延寶集

次にその作品を見るに延寶九年湖海狂士の請により自ら撰んだところの長

龍延寶和歌集があり、長嘯歌選及契沖延寶和歌集と共に三家和歌集として傳つて居る。その歿した貞享三年に契沖の撰んだ晩花和歌集は二卷ありてひろくその歌文を収めてある。長流は材林和歌集の序にも曾丹集俊頼が家集の取るべきことをいつてゐる。累塵和歌集にも位なき武士の外に若狭少將から無位の長嘯子となつた一人を加へてゐる。湖海狂士の爲に長嘯子の佳



下河邊長流筆(森繁夫氏藏)

歌を選んでゐる。また晩花集にも

後瀬山これより後の世々ふとも又やはおひん椎が一本

小鹽山雪を凌ぎて高砂の松の姿に見ゆることの葉

の如く長嘯子を賛した歌を詠じてゐる。また延寶集には爲兼に倣ふ歌とはしがきしたる作もある。二條當流の人々が異端の如く見倣してゐた京極派、またその源流となつてゐる俊頼が集俊頼の倣つた曾丹集から尋求坊の名に

よつて悪口された舉白集をあこがれてゐるのでその歌風がいかなるものであるかを知るべきである。この主張は堂上派に對し力ある一大敵國の觀があつたではあるまいか。

天つ星おちて石ともならぬ間やしはし川邊の螢なるらむ

八百萬神もをじかの耳敏川ふりたてゝ聞け今日の御禊を

關こえて打出の濱にけさ見れば近江は霧の海にぞありける

桐の葉のまだ落ちそめぬ夕風も板井のもととはまづぞ秋なる

小山田に冬の夕日のさし柳枯れてみじかきかげぞ残れる

あらしをの狩る矢はもれて今更に戀に死ぬべきさをしかの聲

うかれ鳥やもめ鳥も心せよまた逢阪の山は夜深し

不二の嶺にのぼりて見れば天地はまだいくほども分れざりけり

の如き雄渾なもの、自然な表現のもの、生新なるもの、とりどりに存してゐる。

中に技巧の末に趁りて意義晦澁な作や印象の明晰でない作もあるが、

横走る蟹をはらひて和歌の浦の道すぐにしもゆく世ならばや

耳なしの山の鶯聲たえず花になくとも誰かきくべき

古典をとる

の如き主張をもつてゐたほどあつて優れた歌が少くない。その題材を調べ
てみても古典や物語からとつたものもある。

諏訪の海の氷のとちめこの頃や釣せぬあまの岩戸なるらむ

夕汐の曉おちてゆくからに満千の珠と見ゆる月影

吳竹のものと光もかくや姫見ぬ世おぼゆる月の影かな

また漢故事をとり入れた作も少くない。

こゝになほ聞きぞ驚く蜀魂鳥ひとのみかどの玉の一聲(一)

篠波のあはれかけても思ひきや志賀の花園麥を見むとは(二)

世の中のわたらひ草をふみ枯し山路の蕨いつか摘まゝし(三)

の如き蜀の蠶叢の故事や(一)箕子の麥秀の歌(二)伯夷叔齊(三)のことなどをとり
入れてある。詠物詠史の作も大分多く、書物では伊勢・大和空穂文選・毛詩易家
語などを題したり、人物では人麿貫之萬葉の櫻兒・縵兒・老子・莊周・伍子胥・蘭相
如・二世皇帝・漢高祖なども詠じてゐる。

時ならぬ雪をふらせし琴の緒のしらべや不二のねに通ひけむ(四)

大鳥の羽がひの山もうらやます裾野にをどる草のかやくき(五)

漢故事を用
ふ

人生觀

日はくれぬ道は遠しとことづけてあだにも馬の鞭やおふせし(六)
(四)はうつばの俊蔭を、(五)は莊子を、(六)は伍子胥を詠じてある。萬葉の如き素
朴渾厚の調はないが、その材料は多方面に互つてゐて、何を詠むかといふこと
につきては夙く思惟してゐたところがあつたやうだ。最後にその人生觀と
も見らるべき作を引いて見る。

つながれぬ身を野洲の野にはむ駒のあれたる心誰かつながむ

天つたふ日をおふまではなけれどもおのが力ぞ我もはからぬ

みだれたる世はたれ／＼も遁るらむをさまる時をひとり捨てばや

かは衣毛を吹き疵をいふ世にも身はつゝがなし麻衣にして

の如き卓犖不羈にして聞達を世に求めなかつたことが推想される。長歌も
數篇あるがいづれも古今調である。中に四十の時に詠んだ歌は二百八十七
句から成つてゐる。

第十七 圓珠庵契沖

上代文學をして光輝あるやうに研究の基礎を立てたものは契沖阿闍梨であ

その経歴

る。元祿に於ける國文學復興の大きな柱となつたものは云ふまでもなく契沖を以てその第一人者とせねばならぬ。契沖は尼ヶ崎の人、俗姓下川氏、由緒ある武門に生れたが幼にして佛門に歸し、高野に登りて苦學十年、眞言の奥義を究め、又河内の覺彦に就いて悉曇をも修めた善智識で、十七歳より歌を詠み下河邊長流に親炙し、曼陀羅院の住職となつたがこれをやめ、和泉の久井及萬町に隱栖して古典并に歌書の研究に意を潜め、爰に古學者としての修養を積み、後妙法寺にゐて老母の孝養をなし、また長流の志を繼いで徳川光圀卿の爲に萬葉代匠記を撰んだ。晩年は東高津の圓珠庵にゐて著作及講學に一身を捧げ、元祿十四年に六十二歳で示寂した。

代匠記以下の注釋

契沖には立派な著書が澤山あるが、中にも代表的著述である代匠記は天和から貞享の末にかけて初稿本が出来上つた。その總釋中に枕詞の注釋もあるが、また詞によりて冠らしむべき枕詞をひく詞草正採抄は貞享二年に成つてゐる。圓珠庵にうつてから程もなく代匠記精撰本五十三卷を完成し、次いで日本紀歌註厚顔抄を著し、これらの古典研究の餘材を以て中古の歌書の研究にうつり古今餘材抄二十卷、勢語臆斷五卷、和歌拾遺六帖一卷及それより近古

時代に及び、和字正濫抄を著し、定家卿假字遣の誤を正し、百人一首改觀抄を著し、新勅撰評註を作つたり、また和歌と名所との密接なることを想ひ、昌琢の類字名所和歌集の誤を正すが爲に勝地吐懷篇を著し、また勅撰以外の撰集及家集にある名勝の歌を集めて類字名所補翼抄七卷、類字名勝外集七卷を作つた。その他拾遺抄考要などの著もある。上古中古近古に互るばかりでなく書史的的研究より本文註釋批評に至るまで博く關繫文書をあさりて古典並に和歌研究史上偉大な記念碑を遺してゐる。以上の註釋などは古註とは全く面目を改めたもので、後の學者は必ずこの阿闍梨の著作を味讀しなければならぬ程である。

契沖延寶集と漫吟集

次に和歌創作の方面を見るに、夙く湖海狂士の請に由つて自選した契沖和歌延寶集があり、後更に撰んだ漫吟集二十卷は異本もあるが五千八百餘首といふ多數の歌を收めてある。長流の四季出題抄によつて詠じた和歌や、定家の四文字題によつた難題百首や自家及その朋交の歌を撰んだ一題一字和歌等があつて、それらの中には漫吟集中に收めてあるのも別本になつてゐるものもあるが、研究的の著書の多いやうに詠出の歌も少くないのである。

清水濱臣の
批評

契沖は萬葉を研究し上代の和歌の眞率と素朴とを知つて自家の生活にもこれを體得したやうであるが、その創作した和歌は萬葉には則らなかつた。清水濱臣は六帖や歌仙歌集の風骨を基とし、玉葉や風雅の一ふしある趣をも體得して詠んだと評してゐる。古今六帖は萬葉の研究の爲から始終研究してゐた。三十六歌仙集は註は作らなかつたが、よく讀んだと見えてその隨筆川社の中に一々の評などが載せてある。また六六歌贊も詠じてゐる。隨つて濱臣の評言は誤つてゐない。洗煉を旨とし技巧を貴んだ中世の風に長嘯子の舉白集や一ふしある作を庶幾してゐた。先輩長流の歌風に近いものがある。併し長流は狷介の士、契沖は主張は枉げないが溫雅の資、相似寄つた中にも多少の差異はあるやうだ。その秀歌として

藻汐やくなにはの浦の八重霞一重はあまがしわざなりけり
が人口に膾炙してゐるが、これは技巧が勝つてゐる。表現が巧すぎてゐる。それよりも

六六歌贊

初瀬のや里のうなるに宿とへば霞める梅の立枝をぞさす
雨まじり風うち吹きて古里に散る花さむし春の夕暮

夕けぶり麓の里にたなびきて月ぞのぼれる山風のうへに
七車空にとゞろく鳴る神の風にのりてぞ雨の夕立つ
霞とも雨とも空はわかぬまに玉ぬきそむる青柳の絲
の如き叙景歌や
心ある人に一夜の宿かりてなるゝもつらし明日の古里



契沖筆(藤波津に據る)

軒の端に残る聲ある雨やどり假の世ながら出やわづらふ
吹く風にいつ誘はれて蓮葉の露は濁れる水となりけむ
の如き抒情歌が面白い。また富士百首は注目すべきもので、中に
富士のねは山の君にて高御座そらにかけたる雪のきぬがさ

が巻頭にあつて優れた作である。富士を詠じたものはこれより先水無瀬氏が成の寛永二十一年に詠んだ富士百首があり、柴田勝興の寛文二年の富士百首

富士百首

六六歌贊

がある。長流が集には富士の三十六首詠がある。爾來多く詠まれるやうになつた。契沖の集には詠史が可成多く詠まれてゐる。六六歌贊は長流の註にもいつてあるやうに、その人々の秀吟に關して詠んだもの、例へば山邊赤人の和歌浦の歌により

和歌の浦に立いでゝきけば鳴き渡る鶴の一聲高くもあるかな

の如き例が多いが、兎に角詠史と見るべきである。また漫吟集十八卷には林葉累塵集に入つてゐる秀歌を詠んだ十六人の贊歌外四人の贊歌が入つてゐる。その他支那の人物では堯舜禹殷湯老子顏回莊子屈原漁父廉頗藺相如項羽李陵嚴子陵劉寬蔡順孟宗王祥張翰陶淵明韓退之等を詠んでゐる。これも詠史であつて、當時かういふ題詠が將に興らうとしたのである。

次に宗教信仰等に關した歌は卷十一釋教の部に二百五十首も載つてゐる。中に眞言宗の心を詠んだ中には

生死の海に通へるしほひ山心の月ぞ峯にみちける

金剛頂經のことをいへる中に

いかに我昔の人に似てしがな今の佛はたふとくもなし

宗教信仰の歌

煩惱即菩提の心を

鏡山みがけるものと聞ゆるも世を経てつもる塵にやあるらん

弘法大師の高徳を仰ぎて

高野山松はつらくもなかりけり谷のかつらぞはひも及ばぬ

その他

後の世の猶またの世の末の世も生れて死なむ人ぞ悲しき

の如きはその上乘なるものである。釋教の歌は理に落ち露骨に傾き説法的になり易いものであるが、巧に譬喩を取り句調を雅にするなど、その才思を見るべきである。長歌四篇の中六道を詠じたものは百九十句から成り、無常を詠じたものは三百二十九句から成つてゐて、古今風であるとはいへ、内容のある長篇である。六道を詠じたものは寒熱の地獄に始まり、鳥も獸も生を競つてゐる畜生道から、飯に飢ゑ水に渴してゐる餓鬼道をうたひ、手束の弓劍の雨と争鬪を事とする修羅道より、苦樂相交る人間道、それから天上道までを諷つてある。無常の歌は

春の花 咲きて散らすや 秋の月 みちて虧けすや 咲く程の なにか

六道の歌

のどけき 満つるまの 何か久しき 斯くしこそ ありけるものを う
つせみの 世の人ごとし 願ふらむ 心やいかに

と云ひ起し、青年の空想歡樂を述べ、さて老病を叙し、最後に死後のことを述べ
てある。散文的の口調もあるが、見樹院立詮と共に長歌復興の上に大に範を
垂れたものと謂つて善からう。釋門のことゝて釋教和歌はこの部以外にも
あるが神祇の部はない。えせ神道者を諷した作や頑固な宋儒の教を奉ずる
ものを諷した作は數多く詠んである。

神代とて知られぬことのゆかしきをなど淺はかに言ひはなすらむ

もろこしの聖の道のふることも琴柱をつけて引くぞはかなき

の如きはそれである。漫吟集中には佳歌もあるが才思に任せて纖巧に失し
た作が随分と少くない。また俳諧歌をよんだものでその數は百五十六首の
多きに及んでゐる。その中には

力をも入れぬ歌さへ重荷とやつら杖つきて腰の折るらむ

の如きがある。契沖と長流とはその交が親しかつたやうに歌も相似たるも
のがある。そうしてその前に長嘯子が立つてゐる。契沖は長流の晩花集の

えせ神道者
及頑固な宗
儒の徒を排
す

俳諧歌

序に

長嘯子のみぞその器ものいと大きにして恐るべき敵もなかりけるを、今翁
に比へ諭ふるに山を抜く力はたとひ優りたまふとも弓を引き太刀をはく
わざは翁や精しからむとぞ覺ゆる

長流と契沖
との比較

と評してゐる。長流契沖二人は才藻が相匹敵してゐたやうであるが、長流は
多少の圭角があり、契沖は溫雅の資を具へてゐたから、従つて長流が作には奇
抜にして而も生硬のところがあり、契沖が作には蒿蹊も評したやうに、溫雅に
して纖巧に傾いたところがある。そうして二人とも萬葉を研究しながらそ
の素朴と眞率とに隨喜しなかつたのは、川社に「宋儒の詩の唐よりも遙に劣れ
り」といふも心を議論に置ける故なるべし。和歌は殊に京極黃門の宣へる如
く、はかなく讀むををかきことゝすべし」といふてゐる信條から來てゐるの
である。門人には海北若冲、今井似閑、野田忠肅、安藤爲章等が著れてゐて、若冲
が萬葉類林を著し、似閑が萬葉緯を編み、忠肅が萬葉類句類礎の類を作り、師の
研究の他方面を補翼したが、創作の方には特記すべきこともない。若冲に岑
柏集があり、忠肅には詠草及夢想集があるが、堂上派の歌風で契沖の影響は格

その門人

別がない。

第十八 徳川光圀の歌文の上に於ける事績

關左の文學は黄門光圀より起る。十八歳にして修史の志を起し、後史局を置き、史臣を督して國史を撰輯し、人を派して資料の蒐集につとめ、有益な典籍を出版した。卿の事業は茲には述べないが、上古以來の文を撰んで扶桑拾葉集三十一卷を成したと共に、契沖に萬葉代匠記を撰ましめ、また板垣宗膽・安藤爲章・伴暢等に筆を執らせ、長流契沖の説を参考し、親らの意見を加へ、釋萬葉集五十卷を撰まれたりして、我が國歌國文の上に盡されたことは大きなものである。



徳川光圀卿肖像

光圀の修文の事業

水府歌壇の狀勢

香玉詠藻と蝶夢集

冷笑草

抱琴集

雜年愚詠

今光圀卿を始めその周圍に於ける水府歌壇の狀勢を明にして見る。卿の父頼房侯の輔佐役であつた中山備後守は堂上の流を汲んだ達吟の士であつたことは前にも誌した。卿の夫人泰姫君は近衛關白信尋公の女で歌文を善くし、侍女左近局本名村上吉子も歌才が秀でてゐた。夫人の遺草に香玉詠藻があり、左近局に蝶夢集がある。侍臣で最も歌を善くした人には小野言員があり、史館の總裁に聘せられた安藤爲實があり、板垣宗膽・伴暢等があり、その他方外の人には月波禪師・如晴法師があり、日周上人がある。中にも言員は良恕法親王九條左大臣道房・冷泉大納言爲滿及松永貞徳に點を請うた點から考へて、元和の頃には既に斯道に志のあつたことが分る。その子陳員が部類した冷笑草には五百餘首の金玉の詠を收めてあつて、宗膽の跋文によりても歌才の優れてゐたことが知られる。爲實は爲定の子で、爲定は木下長嘯子及冷泉爲景に學んだ人、爲實は中院通茂の弟子で素軒と號し、年山爲章の兄であつて、抱琴集・雜年愚詠などがある。享保三年歿、年六十四。月波は琵琶湖南の人、洞山の三十七世を襲いだ人で老臥佛と稱した。延寶四年光圀に招かれて常陸に下り、那珂港の天徳寺に錫を留めた高僧で兼ねて詩歌に長じてゐた。南去北來や禪偈清吟

手毎の花

の如き詩集がある。常陽にあること十六年、元祿四年故山に歸つた前後の歌詩を録したものに手毎の花がある。送別の歌を送つた水戸の士に肥田行正・酒井淨明・和田直救・大宅廣武・水野忠俊・大竹安候・小柳津有則・安藤定輔・三浦忠恕・天野景伴・木内忠高・添田野芳朝比奈・泰延等がある。その周圍に歌人の多かつたことが了せられる。如晴法師は飛鳥井雅孝の門下で自息庵と號した。圓窓軒家集が二卷あり、日周は常寂光寺に住す。俗姓石井氏、近江の佐和山の人、元祿九年招かれて常陸に來る。會山集にその作を多く收めてある。正徳三年七十三に長嘯門下の山本春正も萬葉考勘の爲に一時聘せられてゐたことがあり、て示清水宗川・岡本宗好等の民間歌人も卿の招に應じて來仕してゐた。此の如く藩中で和歌が大に行はれ、光圀は自詠を中院内府通茂公に送つて點を請うたものである。

圓窓軒家集

會山集

麻の葉の流れてはやき御襖川波と共にや秋も立つらむ(哀文夫人)

吹風にもちるかと思れば又ぞおはかなや六つの道柴の露(村上吉子)

くるしびのうき世の旅の夢さめてもとの空にぞ立かへりぬる(小野言貝)

去國おもひきや風をまつらの泊舟あらぬ渚につながれんとは(月坡禪師)

撰集正木の葛

光圀は清水宗川に命じ、徳川初期の頃に於ける武林及民間歌人の作を撰ばしめた。延寶二年に成つた撰集正木の葛はそれである。一集十二卷、部立は春下夏秋上冬戀下難下釋教神祇の如く全く勅撰集に倣つてある。作者四百七十八人、歌數千四十六首、序は山本春正の筆、別に作者考が一卷ある。この集は長流の累塵集に倣つたものであるが、累塵には若狭少將から無位の人となつた長嘯子は例外とし一切諸侯の作は除いたが、この集には四十人の大小名の作を擧げてゐる。すべての作者中數の多いのは長嘯子、松永貞徳、細川玄旨である。民間歌人では法橋收玄、十七堀田一輝、十四清水宗川、十三打它良尊、十四元政法師、十三山本春正、十一等で、板垣宗膽、七戸田茂睡、三等は多くない。諸侯の中數の多いのは、

徳川光圀	十五	阪上宗永	十四
丹治信治	十四	松平光通	十一
内藤義概	十	南部重信	九
中川久恆	九	遠藤常友	七
伊達政宗	六	相良頼隆	六

諸侯の歌も探る

細川行孝	六	池田綱政	五
脇阪安元	五	井上正利	五
徳川綱條	五	小笠原長勝	五

私撰集の流
行
麓の塵
和歌鳥の跡
新歌さゞれ
石
歌林尾花末
和歌繼塵集
和歌山下水
難波拾草
堀江草
和歌視今集

である。この撰がいかにかに採擇されたかは分らないが、當時歌人として武家并に民間に於ける名のあつた人の大凡が推測される。長流の累塵萍水二集及この集が動機となつて元祿・寶永・正徳・享保にかけ幾多の私撰集を生ずるに至つた。即ち飛鳥井雅章門下の河瀬菅雄は天和二年麓の塵を出し、戸田茂睡は元祿十三年江戸に於ける歌人山名玉山、清水宗川、有馬重廣、狩野常信等の作をぬきて和歌鳥の跡五巻を撰び、了壽は戸田茂睡等の江戸歌人并に京畿の人々の作を集めて鳥の跡後集として新歌さゞれ石六巻を出し、烏丸光廣の流を汲んだ植山梅之は京都附近の人々の作を撰みて歌林尾花末五巻を出し、烏丸家の門人阪光淳は寶永七年和歌繼塵集三巻を、享保十七年和歌山下水三巻を撰んで出版した。難波に隱栖した葛岡宣慶は主として難波地方の人々の歌をとりて貞享五年難波拾草二巻を撰み、釋不深は堀江草三巻を、豊臣秀三は正徳元年和歌視今集三巻を撰んだ。その他にも數々板行したもの、寫本として傳

るものが多くあつたやうである。

清水宗川

宗川は通稱六兵衛、諱は良世、主一堂と號した。山本春正、岡本宗好などと親しかつた。光圀卿が宗川に送られた歌に

名に高き月をかたみに幾秋もおなじまとゐの契わするな
の如きがある。

なほざりにかき集めても和歌の浦やもくづ交らぬ松のことは

玉椿いく八千代かは蔭しげる神のいかきに枝をつらねて

の如き詠がある。

岡本宗好

岡本宗好は露底軒と號した。山階入道左大臣日野前大納言弘資前大納言中院通茂に點を受けた。延寶八年に歿した。一子あり道壽といつた。宗好詠草が一巻、彰考館にある。

すさまじと見し影もなし春たちて霞むしはすの月の曙(年内立春)

むすびかへむ時こそ來ぬれ願ひこしはちすの露の玉のうてなに(辭世)
の如きその作風を見るべきである。

常山詠草

光圀の集を常山詠草といふ。上中二巻は若きより治世中の作、下巻は西山に

隱栖後の作を収めてある。堂上家の風で別に新しいものはないが、晩年の作には佳なるものが多い。

山ふかみ人は訪ひこぬ柴の戸にひとり春しる軒の梅が枝

今はたゞ書より外の友も見ず昔をかたる人しなれば

木がらしの風も淋しく三日月の影かすかなる冬の山里

の如きは素直な作であつて、西山の址を訪ふたものには一層深い感を與へる。併しまた縁語や掛詞などを旨として仕立てた型の歌も少くない。元祿十三年七十三歳で世を辭しられたがその流芳はとこしへに遺つてゐる。

第十九 寛文より享保に至る雲上井に堂上和歌

後西天皇

雲上に於ては後水尾院より後西天皇に、後西天皇より靈元天皇に歌學を傳へさせられたことは前にも少しく記して置いたが、御西天皇は當時の女流新上東門院以下三十六人の閨秀作家の秀逸をぬきて新女歌選を欽撰遊ばされた。八歳の御時お詠みになつた御歌が高松宮家に存してゐる。優れた作が多い。御集を水日集といふ。

新女歌撰水日集

靈元天皇

桃葉御集

靈元天皇もこの道に詣り深く、作例初學考二卷、歌學抄一卷を著し、歌學及題詠の参考とせられ、また歌合の判に對し緻密の考察を下し、六百番作例及千五百番作例等の書を著し、その他伊勢物語奥盡抄古今序註拾遺和歌集註等の書を著され、時に勅講を開き廷臣を斯道に導かせられた。集を桃葉御集といふ。寛文三年から貞享の末まで御在位の間にも深くこの道を究めさせられ、元祿元年仙洞に入らせられてより享保十七年御崩御に至る四十五年間は廷臣は云ふまでもなく、天下の諸侯國々の好士の作に勅點を下されたことは夥しいことで、堂上方にも歌才の優れた人々が輩出した。古今傳授や和歌手爾波御傳授を受けた人々も少くなかつた。

幸仁親王

○印は古今傳授

烏丸光雄

清水谷實業

武者小路實陰

靈元天皇

中院通躬 烏丸光榮

烏丸光榮

職仁親王
野宮定基

御製中には

すべらきの我道とほく守らなむ御裳裾川の末のす忍まで
隔てなき我が日の本の光をばあだし國まで、仰がざらめや
名あるものはやがて雲井に聞えあげよきうて我世の樂びにせむ
我國の風をや仰ぐ高麗人もことし千里の波路わけきて
遙なる田の面を見ても違なき民のしわざの程をしぞ思ふ
海人小舟こよひも釣のいとなみに忘れて見すや浪のうへの月
の如き帝王の御氣象の溢れて國民をおぼしやりになつた御作を始め叙景歌
などにも優れた御歌が多い。以下み教を受けた公卿歌人を略叙する。

一、清水谷實業

清水谷家は始祖を光榮といひ三條西實教の弟で別に一家を立てた。二世實業は鳴瀧家から入つて寛文十二年光榮の後を受け、歷仕して正二位大納言に陞つた。外祖父實條の血を受けた上に一門よりこの道を學び、院より手爾波

梅月堂

傳を受け、歌口であつた。

けさはまた降りしく雪も淺沓のあとあらはなる庭のまさご地

空はれて霞も霧も半そらに雲はふもとをめぐる不二の根

の如き高雅な作がある。川岡雜誌所載の契沖に歌を詠ませて添削された話は事實であつたか明でない。寶永六年六十二歳にて薨す。京都に梅月堂を開いた香川宣阿はその高足である。

宣阿は岩國藩の老臣香川正矩の二男で剃髮して堯眞といひ、享保三十六歌仙の一人で、一條の今西行と稱へられた。梅月堂宣阿家集二卷は、歿後二年に上木された。その著に草庵集蒙求諺解二十卷がある。(享保二十年)三玉桃事抄の著者一枝堂野村尙房(享保十四年歿)はその高弟である。

梅月堂の家譜



二、武者小路實陰

芳雲集
初學考鑑と
詞林拾要

武者小路家は三條西實條の二男公種に始る。實陰はその嗣子で三條西實教とは再従兄弟である。後西天皇より古今傳授を受け、また靈元院に和歌の勅點を受けた。逍遙院以來第一の歌人と院の推獎遊ばされた程の歌才で、櫻町天皇はその集に芳雲の二字を勅賜せられた。その家に例のない儀同三司に陞進したのも歌徳が與つて力ありと噂された程である。初學考鑑及門人似雲の聞書した詞林拾要などによりてその歌學説を見ることが出来る。冲淡にして餘情のある草庵集を好まれたが、天與の才と多年の修養とにより雅醇でやゝ新味のある作が少くない。

飛ぶ鳥はかへりつきぬる山の端に残る夕の雲ぞしづけき
更にけりととのゐにめぐる杳の音もすめる眞砂の月白き庭
月しろく明るる藁屋の鶏の音に木の間見えゆく關の下道
田子の浦やかざりも見えぬ波の上に霞にのこる富士の白雪
時いでて木づたふ鳥の羽風にも匂こぼるゝ花の朝露
風さわぐ木かげの道の里つゞき立つや市女の聲ぞあらそふ

君が爲うゑて契らむ吳竹の實をはむ鳥も待出でむ世を
の如きはその代表作である。元文三年七十八歳にて薨じ、超岳院と諡した。次子高松重季は新古今風の作を好み、當代歌人の一人であつた。孫實岳は父の風を受けて詠作に長じその名が高かつた。武者小路家から出た門人には著名の人が少くない。左にその系を記す。

武者小路家
門人譜



(い) 似雲

似雲は姫路の人とも廣島の産ともいふ。實陰卿に従つたことが年久しく、よくその歌學を傳へた。風がはりの坊さんで、嵯峨に、吉野に、高野に、龍門の瀧の畔に世離れた地を擇んで疊二ひら敷くだけの庵をしつらひ、西に圓窓

似雲

を開きて持佛堂の代りとし、藥罐一つ茶碗一つの外別の器具を備へず、搔餅を口に入れ簡易生活をして高齡を保つたといふ。仙臺侯伊達吉村朝臣に招かれ松島から岩手へゆきた時の日記に奥州紀行がある。夢を信じ夢想の歌なども多く詠んだ。西行を慕つて河内の弘川寺に西行終焉の碑を立てそこで自分も終つた。世より今西行と呼ばれたので

西行に姿ばかりは似たれども心は雪とすみぞめの袖

と詠じたといふ。その詠草は寶永七年から延享にかけて年々に連ねてあつて集名も年並艸と題し二十餘卷もある。葛城に入つてゐた時の詠である葛城百首には毎首かつらぎを詠み入れてある。須磨で詠じたものを蟹の囀といふ、寄歌述懐百首は歌學思想を述べたもので、

咲き匂ふ言葉の花もあだなれや心をたねのまことならずは

言の葉はたゞ幼くておのづから深き色香をいかですゑまし

一ふしと思ふ心のなかくに色香もきゆる人のことのは

の如き技巧を旨とし洗煉を要とした當流の信條を離れて復古の精神が流れてゐる。小澤蘆庵の歌に對する思想とその間に連鎖があるではあるま

年並艸

寄歌述懐百首

いか。公卿の歌學も斯道尊重の義から傳授はつゞけてゐられるが、この頃に至りてはその内容に於ては古學派の説と揆を一にしてゐるものがある。しきむつむ山路の苔の朝しめり朝露そへて春雨ぞふる
庵の邊の畔ゆく水の音すみて風もみどりになびく若苗
涼しさもことわり過ぎて荒磯の波にくだくる夏の夜の月
人とはゞ秋の習にいひなさむながめじとすれど夕暮の空
の如きその優れた作である。

(ろ) 柘植知清

知清は通稱傳右衛門幕府に仕へて大番の士でかたいとや濱ゆふの著者で、始は林直秀に學び、後實陰卿にも烏丸光榮卿にも教を受けた。

(は) 玄無

玄無は伊勢の四日市の人、本姓川喜多氏、通稱久太夫、諱は光盛といふ。中年家を弟に譲り享保七年僧となり嵯峨に隱栖して玄無又峨山と號した。

おもひ寢の心の花にしをりして夢に分け入るみよしの山

の秀吟は洞中に聞えて靈元法皇が

かたいと

濱ゆふ

玄無

爾然齋玄無
法師家集

賤の男が心をよする伊勢の海のもくすのうらに玉のあるとは
の聖作を下されたといふ。爾然齋の庵號も下賜されたものといふ。素直
な姿の作を好んだ。誦すべき作が多い。爾然齋玄無法師家集が二卷上板
されてゐる。その歌例一つ二つ。

風を恨み雨をかこちて山里も花には同じうき世なりけり
茂りあふ青葉のこす露ちりてかせも夏なき山の下かけ
鐘のこゑすめる心の曉にうき世の夢やまた誘ふらむ

三、中院通躬

中院通躬

中院通躬は内大臣通茂の子で従一位右大臣に進み、元文四年に七十二で薨じ
た。父の遺風をうけて多く當流の歌を詠じた。集が遺つてゐる。高松宮家
本中院家御集七八九の三卷は通躬の集である。

志賀の浦や一本の松はくまとしも見えず更ゆく浪の月かげ(湖上月)
降まゝに風のはらはぬ吳竹もひとりこぼるゝ枝の白雪(竹雪)
等その作例である。弟野宮定基は有職に名のある人、而してまた歌も相當に
詠んだ。正徳元年薨す、年四十三。その弟の久世通夏も歌を善くし若きより

蝦大納言

文机によりかゝり腰がひどく曲つて蝦大納言と呼ばれるぐらゐ斯道に勤め
たといふ。

四、烏丸光榮

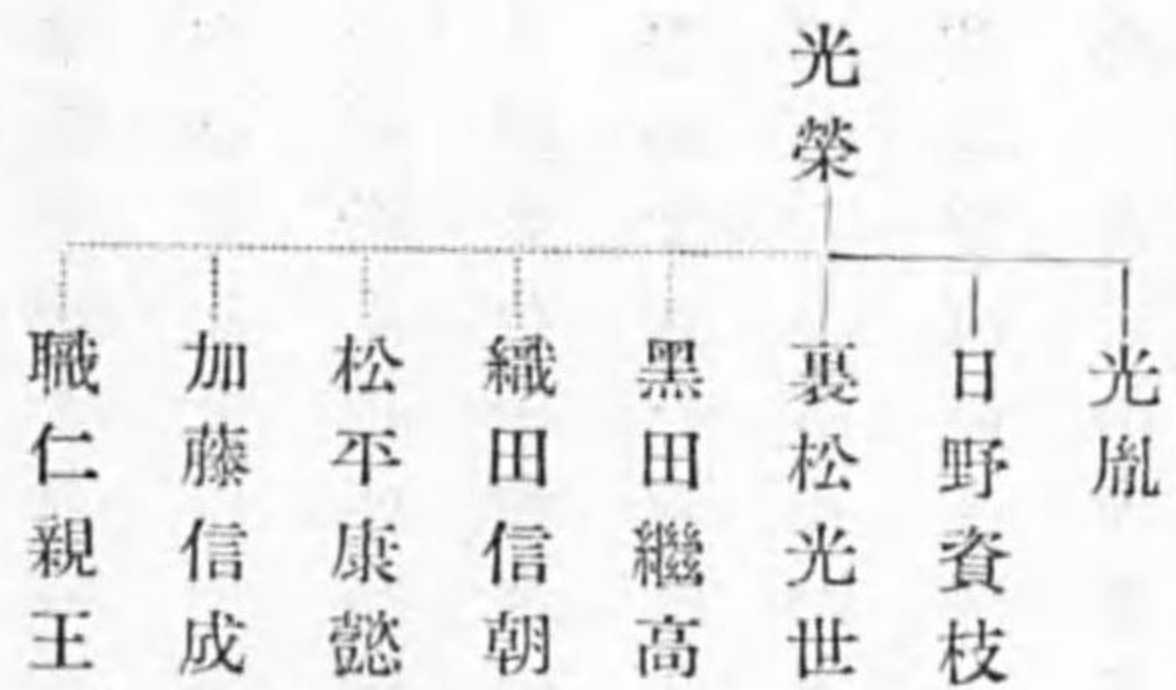
榮葉集

内裏進上の
卷

烏丸光榮は光雄の孫宣定の子で従一位内大臣に陞つた。靈元院の祕藏弟子
で今人麿と稱せられたほど當時に重んぜられた堂上歌人であつて、集を榮葉
集といふ。先輩の武者小路實陰卿にもその歌の批評を求めた。内裏進上の
卷、聽玉集和歌教訓等にその歌學説を窺ふことが出来る。眞摯、辨識、習練の三
つが作をする上に大切なことを説き、歌は古今を折衷するといふ方針を抱い
てゐた。歌も他の公卿歌人より一頭地を抽いてゐたが批評は一段優れてゐ
てよく門人を指導されたので名高い。寛延元年六十歳で薨じた。

門人

春かすみたなびく末に一むらのくまある方や松のむら立
江の南うめも柳もはるくくと千里にかすむ鶯のこゑ
荻の葉は浪と露とに亂れあひて入江さびしき秋の夕風
心なきものとも見えす月を妬み花にかくろふ雲の立居は
きくやいかに恨をこむる玉琴のした樋にかよふ涙ありとは



この他冷泉家にては爲綱爲久、三條西家にては公福等の公卿が靈元法皇の御代に出たが一々詳記しない。

第二十 當代に於ける諸侯の和歌

元祿の前後に至りては諸侯の歌人も多く出た。結城大納言秀康の第五子松平侍従大和守直基は姫路に治し西國旗頭職であつたがまた一面に和歌并に

松平直矩

天祐公歌集

謠曲を嗜みその録するところの書が存してゐる。嗣子大和守直矩は和歌を善くし繪畫にも長じ文庫二合に溢れる浩瀚な日記を留めてゐる。中院通茂・飛鳥井雅章・白川雅喬・清水宗川・有栖川宮・清水谷實業等に加點を請うた。治國の上には失政があつて屢國換へされたが藝術趣味は深かつた。元祿八年五十五歳で歿し天祐公と諡した。畫名は龍披軒・蔭山と號し筆力遒勁である。

月影の露にさえゆく夜半ごとにおき重ねてや衣うつらむ(月前掃衣)

雪にのみならび越路の空の色も忘るゝ國の春ののどけさ(村上より再び姫路にうつりて)

福島侯堀田下總守正伸は延寶の半ば頃より斯道に志しその詠草が十一卷紀氏叢書に收めてある。上毛の領地を巡遊した時の作も少くない。内藤露山侯などと唱和の作も多い。元祿七年病んで歿する時遺命し、我死なば頭巾かぶりて羽織きせまへ帶むすび扇子一本の辭世を遺した如く洒脫の人。その詠風は次のやうだ。

淋しさに楨の戸ぼそを明けみれば軒端にかゝる峯のうき雲(伊香保にて)

その弟にして兄の後を承けた伊豆守正虎も和歌を好む、集を千種集といふ。

久居侯の始祖藤堂佐渡守高通も和歌及俳句を好む。集がありて袖中和歌集

藤堂高通

堀田正伸及

正虎

紀氏叢書

といふ。歌學書の抄録したものである。參觀途上の作が少くない。丸子の山奥に柴屋軒の舊地を訪ねた歌などもある。久居八景を定めてこれを謠つた。元祿十年に歿した。子孫に文雅を好む人が多い。

山内豊房
松葉集

土佐侯山内豊房は學を好み仁政を施し谷眞潮をして土佐國式社考を撰ばせた。和歌は中院内府に加點を請うた。家集を松葉集といふ。高知附近の吸江十景などを詠じた作もある。寶永三年三十五歳にて卒した。

田村宗永

伊達政宗の孫で田村家を襲いだ隱岐守宗良の子右京太夫宗永後建顯と改むは最も

和歌に長じてゐ、日野弘資に歌學を受けた。毎歲正月家會三月花見會初秋會重陽會月見會等恆例臨時に歌會を催し、その兼當集は澤山に存してゐる。延寶より元祿頃の作が最も多く、近衛左府日野弘資、飛鳥井雅章、中院通茂、日野資茂、白河雅喬等の堂上方に點を乞うた歌を集めた集があり、岡本宗好、清水宗川などと交渉の作がある。寶永五年五十三で卒した。養子誠顯も父の遺風を慕つた。繼室は竹内二位惟庸の女戸田茂睡はこの卿に點を受けた。諸侯が公卿の子女と婚を結びその地方の歌文を發達せしめるに至つた例は所々にある。

伊達宗利
自詠愚草集

同じく政宗の孫で伊豫宇和島侯となつた四位侍從宗利も父秀宗の遺風を受けて歌を詠じた。自詠愚草集が一卷遺つてゐる。

伊達綱村

今日よりも春立ちぬとはしら雪のふる年ながらかすむ空かな

東門歌集

以下九百首の詠がある。寶永五年卒す年七十五。

青山公和歌集

その宗藩仙臺侯伊達陸奥守綱村は儒學に禪に和歌に連歌に造詣のあつた人で、その東門歌集六卷には延寶より元祿に至る詠を集めてある。別に青山公和歌集といふ一卷もある。中院通茂、日野弘資、竹内惟庸の公卿に點を乞うた作も少くない。長府侯毛利甲斐守綱元、高田侯稻葉正通と歌の友垣で贈答したのも少くない。

毛利綱元

長府侯毛利綱元は日野弘資に歌學を受けその詠作には靈元法皇の勅點を請うたものもある。寶永二年仙洞にて弘長の古き例に倣ひて着到百首の催のあつたのを聞き、その家臣中歌に堪へたもの六人とその題で百首を詠じた。

七玉集

その時の七玉集が遺つてゐる。諸侯は雲上の風を慕ひ公卿の状を模するこ

とは歌道その他に於ても段々盛になつた。歌例
すむ月にうちもねぬ夜の關守もふけゆく影はえこそとどめね

寶永六年卒した。歳六十。

津輕信政

弘前侯津輕越中守信政は同藩歴世中の名君とたゞへられた人で、山鹿素行吉川惟足を師とし兵學神道を修め、和歌は旨とするところでなかつたが、事に觸れて詠出したものがある。政務に事繁き折終夜思ひつゞけて

のがるべき身にはあらねど世のうさを忘れかねたる有明の月

の如きはそれである。寶永七年卒す。年六十五。

池田綱政

備前少將池田綱政も幼より和歌を好み飛鳥井雅章中院通茂に點を乞うた。

しづがやに世をのがれてもいかならむうきは身にそふ報なりせば

の如き述懐の作も多い。菅茶山の筆のすさびによれば綱政世子であつた時

許由の像をもちて父光政に贊を乞うた時

耳を洗ふ心の水はきよけれど流はくまじ世をめぐむ身は

と書いて與へたといふ。光政の集はあるといふことを聞かぬが、英主である

弟はこの一首にも見られてゐる。その人格がにじみ出てゐる歌は誦するに

足るものである。曹源公綱政は正徳四年七十七歳で卒した。

榊原政邦

姫路侯榊原式部大輔政邦も和歌を好み、元祿以降の詠草十三卷が子爵家に遺

光政の許由の贊

小宮原忠雄
老木拙叢集

つてゐる。竹内惟庸卿加點の歌もあり、中院通躬公にも添削を請うた。元祿十六年の大地震の詠などもある。職人歌合をも作つた。曾祖父忠次の志を繼ぎてこの道に精進された。享保九年に五十二で卒した。

小倉侯小笠原遠江守忠雄は斯道に志の深かつた人で、家集四卷あつて老木拙叢集といふ。集名は飛鳥井雅豊卿の跋文にことわつてある。

散り浮ぶ木の葉とみえて蜚小舟柳が浦のうらにたゞよふ

心すむ深山の庵にきゝなれて淋しくもあらぬ谷水の音

享保十年七十九歳で卒した。

柳澤吉保

甲府侯柳澤美濃守吉保は五代將軍の寵を荷つて一代にして大封を受けるに至つた人だけに禪道にも歌道にも通じてゐた。松平の稱號を賜つた日松蔭日記の作者でその側室である正親町町子の方から祝の歌を寄せたのに對し

幾千たび花咲く松の萬代をかけてぞ契る宿の榮えも

と得意の歌を返してゐる。その集に羽林次將藻・同蘆邊集・天香千首等があつて靈元院の御點を賜つて家の誇としてある。駒込染井に贅を盡して營んだ

六義園山莊の八景十二境等の和歌も詠じてゐる。常憲公がそこに臨まれた

羽林次將藻
天香千首

六義園の和歌

こと五十八回の多きに及んだ、その園の名所百首の中には

朝日影さらす手づくり露ちりて垣根にみだす玉河の里

の如きがある。正徳五年五十七で歿し、その子甲斐守吉里は十二歳の時初めて千首詠を試み、その後二たび三たびも重ねて詠んだ。積玉集七卷追加三卷、北村季吟に點をつけさせた百番自歌合もある。この他仙洞并に公卿に加點を請うた歌ばかりを集めた潤玉集正續各一卷、元祿十四年から享保七年にかけて一萬五千五百四十一首、連歌二百九十八句、俳句一千五百三句を詠吟した。その根力に一驚を喫しない譯にゆかぬ。時々、の歌會の兼當集も數多くある。その自歌合一番立春の作を引く。左敷津浦人、右立田市人

(左) 日の本のけふの光に唐土も同じ時にや春の立つらむ

(右) 天の戸の明そめしより春のきて四方ものどかに霞たなびく

その子孫に和歌を好むもの踵ぎて出て郡山文學は漸次興隆するに至つた。

第二十一 當代に於ける漢學者の和歌

元祿享保の頃には多くの儒者が出た。その中歌を善くした人が少くない。

藤井懶齋・五井持軒・三輪執齋・雨森芳洲等はその優れた人々で、物徂徠室鳩巢等も之を詠んだ。

一、藤井懶齋

懶齋は京都の人で、初め眞名部忠庵といつた。山崎闇齋の門に出た。久留米侯有馬頼利に仕へたが後辭して洛西鳴瀧に隱栖し、延寶中藏笥百首を撰み、女子教育に心を碎き、また國民道德の向上を謀るが爲に本朝孝子傳や大和爲善錄等を出した。同時の儒者米川操軒より一つ若く、中村惕齋よりは一つ年上で、貝原益軒よりは二つ上であつた。深祕筐底錄に

八十あまり六田の淀のふる柳まだこの春もをりや残らむ

の作を擧げてゐる。これは正徳三年の作であらうと思はれるが、兎に角長壽を保つた人である。その作に讀書餘吟といふ百二首の歌が遺つてゐる。これは懶齋が常に讀んでゐた論語孟子周易詩經書經春秋禮記等の金言を三十字にうつしたものである。支那の詩文の句を國風にうつすことは奈良朝時代から行はれてゐるが、經義を歌によむことはすつと後のことである。一人で經義ばかりを多く歌に詠んだのは藤樹に次ぎてはこの人であらう。

論語の大徳不踰閑小徳出入可也を

逢阪のこすゑの花は手折るとも人のゆるさぬ關路こえめや

孟子の聲聞過情君子恥之を

思はずも我が身に過ぐる名取川ふかく心に恥ぢざらめやは

周易の飛龍在天を

あふげ人雲井の龍の時をえて昇るもたかき君がくらむを

詩經の七月の章を

四つの時民のしわざはあら小田をかへすがへすもあはれとはとへ

書經の鼈降二女子媯淵

すみわたる野中の水の鏡かな雲間をいづる時もやどりて

春秋の晉侯殺其世子申生

いつはりを糺の神やなかるらむ空しく消えし森の下つゆ

以上でその大要を窺ふことが出来る。譯和歌は原句にひかされ自ら生氣が乏しく、繪畫に於ける寫真に類するものがないでもないが、深遠な經義のあるものを、比喩などを假りて我が國風にうつすことも、歌境を廣くし、異なつてゐる表現の中に擬へたものを推想せしめたりする。そこに儒者の風雅の一端があらはれると思ふ。

二、五井持軒

五井持軒

五井持軒は大阪の人、名は守任、通稱加助、家學をうけ、成童の頃伊藤仁齋中村惕齋に儒學を學び、歌は下河邊長流に従つた。その師の風をうけて諸侯の招きにも従はず、名利に淡く常に四書を講じて人を導いてゐた。その朋交には伊藤東涯、貝原益軒兄弟、三宅石庵、松下見林、鳥山芝軒等の名流が多かつた。

梁田蛻巖の五井先生傳に、受業下河邊長流、聞萬葉古今等要義云々とあり、貝原元瑞の書簡に、下河邊長流老堅固に御入候哉、足下にも萬葉之御傳授被成候はんと奉察候云々とある如く、長流に親炙したことも少くなかつた。歿後その遺書を度會文庫に納めた中に五井持軒和歌遺稿が一卷あつて、四百八十九首を收め、序は三輪執齋が書いてゐる。歌風は晩花の流を追うてゐる。中に

五井持軒和歌遺稿

春の來るあしたの窓によむ書の聲をもそへて鶯ぞ啼く

三吉野や根ごし山ごし吹く風に紀の川しろく花ぞ流るゝ

岩つゝじ神の劍のしたゝりに染めてや世々に花の咲くらむ

月のなき夜半はうけくも思ひしに時を得たりと鶴舟こぐ人
晴れくもる時雨の空はなか／＼にさやけき月をたびたび見する
の如きは自然を謠つた中の佳作である。儒教の心をこめた作もある。述懐
の作が多い。

強からぬ力車になくくるまおはぬたのみを積むぞはかなき
争ひて勝つともなにぞかたつぶり角のあひだのせばきこの世を
難波瀉こやひき結ぶ蘆のよも我世もいざやこゝにつくさむ
たらちねのかゝれとてしも撫でにける心になふ我が白髪かな
枕には肱をまぐれど樂みは天が下にや満ちてのぶらむ
あらためぬ三つの樂は遠けれど心にちかく尋ねざらめや
などの諸詠に於ける知足安分人と争はないで、天地の間に悠揚としてその樂
を易へなかつた自家の心境を謠つてゐる。この他易や論語や莊子などの心
を詠じたものもまじつてゐる。東涯がその墓碑銘に遭時熙洽、高踏丘園、潜志
大業、研精微言、提誨有力、青衿盈門、其人雖亡、遺德永存とたゞへたのは溢美でな
い。儒學の上ばかりでなく和歌の上にもその人格が忍ばれる。併し當流の

持軒蘭洲と
懷德堂の儒
者の歌

臭氣ある作も多いことは附言して置かねばならぬ。享保六年、九つをこゝの
つにして春に來にけり」の詠を遺して八十一歳で歿した。
嗣子純禎、蘭洲と號し家學を繼ぎ徂徠の説を排斥した。また國學に長じ源語
梯萬葉集、古今通などを著し、新題百首を詠じた。懷德堂の儒者が多少歌を
詠むのは持軒や契沖の影響であらう。

三、三輪執齋

堂上家の制詞を罵倒した隱家の茂睡が不求橋の畔に一首の戒の歌を結びつ
けた三輪希賢は陽明學派の儒者として聞えた人。歌は中院通茂公の門人で
元祿寶永の頃には同門の松井幸隆、菅眞靜等と互に歌を詠みかはしてゐる。
叙景歌には

風わたる池の蓮の花の香に心もきよき朝ぼらけかな
影うつる小笹の露に風すぎて光こぼるゝ秋の夜の月
風さゆる高嶺は雪の空はれて裾野はけふも雲ぞしぐるゝ

の如き古今より新古今までの佳調に則つたすらりとした作が多い。湊川を
過ぎりて

楠公を憶ふ

君の爲 捨てにし人の 湊川 流れて早き 年月は 百といひつゝ
み返りの 數は經れども 眞心は 朽せぬものと 楠の 石となりて
も 残る跡かな

戀歌を斥く

の長篇を賦してゐる。古今調散文的であるが勤王の志は見えてある。當時
聖學を唱ふる人斯人を措きては蛭巖の麓庵といはれた人ほどあつて戀歌は制
する説を懐いてゐた。

戀の歌は佛の道には妨なしとかや。彼の法のふるき師はいひけらし。我
が孔子の道にはいたう惜むべきことになん。心もし之をおかさば恐れて
戒むべし。なくていひ出でんことは偽をならふとや云はん。言をおさめ
て誠を立つる道にあらず

荷田春滿と
孰れが前後

と述べてゐる。荷田春滿と同年に生れ、同じ頃同じ地方にゐた二人いづれか
先にこの説を立てたか分らないが、これも時世の然らしめた説か。徂徠派に
は躬行を重んじない傾向があつた時代、希賢がかゝる説を唱へるのは輕佻な
時世を匡救するの考が先に立つたのである。併し戀歌は三條西實教もその
かみ説いたやうに歌の極致、嚴正自ら持する通茂もこれを詠まないのは宜し

戀の題を勸
戒に

くないと諭された。希賢はひとり詠む場合には固より之を禁じてゐたが、師
家并に同人相會するときは之を顧ない譯にはゆかなかつた。そこで、他に勸
戒の意に詠みなした。

掃ひえぬ心の塵のつもりてや道なき戀の山となりけむ(寄山戀)

一夜だに逢はゞと誰も思川末はそこなき海となるものを(寄海戀)

色にまよふ人の心はえぞ知らぬ壺の石ぶみ道をしへても(寄石戀)

これらの諸例はそれを示すものである。蝶に花に狂ひて分別なきそれとは
別趣である。百首詠の中雜の部には仁君慈父忠臣孝子烈女志士君子隱者有
恆者知足者明德親民至善等の十五首を詠じてある。室鳩巢にも大學の三綱
領八條目を詠んだ大學和歌がある。道學先生の詠は理智に傾き露骨に趁り
易いものであるがその修養はさすがに渾然たるものがある。建仁寺中の兩
足院の先塋の側に營んだ壽藏の碑にかいつけた中には

垂乳根にかへすこの身をおきつきのしばしとぞ見る杉の二もと

の如き、愛子を失つた翌年正月の作には

みどり子のあらばとけふは思ふよりこと忌もせぬ袖のうへかな

土佐に歸つてゆく友人に送つたものには
君がゆく舟路も遠し土佐の海は阿波の鳴門をこゆとこそきけ
諒闇の年の暮には

あはれけふ惜しともいはじ天が下闇にくれぬる年のなごりは
師の佐藤直方翁を尊んでゐたが、餘姚の學が南學に優ることを堅く信じて師門を去つた後もその恩を思ふことは渝りなく、その柩前にお通夜した時の歌もある。その逝去前に師翁をして陽明學に向はしめなかつたのを一生の恨事として詠んだ

さりともと心にこめし一筋をいはで別れし名残かなしも
の如きもある。親に子に友に師に君につくす真心の溢れた作が嫌味なく謠はれてゐる。斯うなれば堂下派も民間流はその隔はなくなる。主張はかはつてゐても作は相近いものとなるやうである。希賢は堂上の流を汲んだ人であるからその臭氣のある作もあるが、知名の漢學者であつたので、漢籍に載つてゐることを背景にした作が題の上ばかりでなく表現の上にもある。志學霜履などをそのまゝ譯したものは勿論寄世祝の題でも

我はわが心ひとつに遊ぶをも民のいふまで治まりにけり
と古王者の民の心をとりに入れて詠んだ類が少くない。延享元年まで存へ七十六で歿した。

四 雨森芳洲

木下錦里先生の高足で對島藩の文學であつた雨森芳洲はたはれ草や橘窓茶話の作者、日鮮國語の研究の上にも偉大な功績を遺した人、元祿享保時代には歌を詠まなかつたが、八十一の高齡に達してからこの道に發願し、爾來六とせの年月を累ねて一萬首の歌をよみ十六卷の詠草を遺した。貝原益軒と同じく「詩は我國の道にあらず」といふ意見に基きその胸臆を三十一文字に表した。而して歌はたゞ心をのべるといふ見地から何のこだわりもなく思ひ浮べた。初年の作には「愚で年を経るや」とか「かつか負けるか雲のまらうど」むだにな焼きそ」の如くその時代の口語と古語とを一つに織りませた作もある。これをもう一層推擴して口語歌を唱へたならばと思はしめるが、當時はまだそこには到り得ない。併し素樸にして眞率な作は詞の洗煉を旨としたものより吾人を引きつけるものがある。

うぶな歌

童部のさむさも知らず雪まろめ我もむかしは然なりしもの
の如きうぶな追憶を無雑作に述べてある。

もろ白髪さよのむかしの物語妹もなげけり我も嘆けり
と老夫婦の寢覺に昔語をして共に喜び共に歎くさまがうつされた作もある。
叙景歌のうちには

入江なる向ふの岸のちか／＼と月に影ある磯の松が枝
かふそ嶺は烽火の煙たちにつけり唐船きぬときほふ里人

の如き實況を謡つたものが多い。對島から難波の往復は海に據つたので海
景沿道の作も少くない。儒者の作として理智のこもつた作や漢故事などを詠
じた作も相應にある。

深山とて心のすめる人のみか浮世の外うき世なりけり
の如きはそれである。

二間なる殖生の小屋に宿かりて月ももりけり我もをりけり

の如きは古詩の「一間分與明月居」の意に據つたもので、石の虎にも箭の立つと
か、水仙の歌に「心の甲着る」などむづかしいことを構はないで詠んだのもある。

連作を好む

また連作を好んだり俳諧歌・狂歌も詠んでゐる。

鼠をば落さんとてや物置にしきりにかよふ夜のともし火

落ちたりと思ふに油断するなとて寝たる嘉六を引起しけり

こそ／＼といへど鼠はかしこくてあすあひましょといふていにけり

の如きまた

一色もあらぬ心の空なれば佛も月も花もおのれも

とはいへど小鯛かへと賣るときはまづ呼びこみてねをぞつけゝる

の如き、天真爛漫實に無造作に作られたものがあるが、年を重ねるにつれて漸
次技巧が加はつたり洗練された作が増してゐるやうである。

八十路までなれしから言振捨てゝたどるも迷ふ敷島の道

を述懐として老齡になつてから斯道に下り立ちた翁は洵に稀に見る例で、詩
歌は血氣の熾な時代に生れ出るものとの命題を改めさせるものと謂つて宜
しい。寶曆五年八十八歳で歿した。

五、室鳩巢

木門の一人で道學に意を專にしてゐて後幕府に用ゐられた室直清は享保三

年に大學和歌を作つた。三綱領八條目を二十一首に詠じた。別に五倫和歌も詠じた。六諭衍義を譯したやうに風教に資する爲であつたと思はれる。

皆人のもとの心はますかゞみ磨かばなどか曇りはつべき(明德)

ふりにける奈良の都のならばしも改まりゆく君がまことに(親民)

よしと見るその一ふしを難波江のあしかるかたに移さずもがな(至善)

いつまでも共に汲む井の底きよみむすびもかはせ本のこゝろを(齊家)

九重の夜のたま衣袖さむみおほふばかりに世を思ふ身は(平天下)

駿臺雜話にも二首載つてゐる。他にまとまつたものがあつたかも知れぬが未だ管見に觸れない。享保十九年七十七歳で歿した。

六、赤壁汶栖

赤壁汶栖はさる儒者か公卿かの變名であるかと思はれるが、その人物が明でない。九條家の太夫西田某の寫した論語題百首といふ一本がある。

巢ごもりに羽ならはせる雛鶴もつひにはかすむ空かけるなり

花ざくら匂ふ吉野の里なれてすめば心ものどけかりけり

始のは學而時習之を、後のは里仁爲美を謠つてあつて歌調はよく整つてゐる。

後に出た千種三位などの作に通つたものがある。いづれにも當時かゝる流行があつたのである。

七、荻生徂徠

古文辭學を唱へ一世を風靡した徂徠は詩歌は和漢同趣との説を懐き、異國と我邦と風俗大に異なる中に唯詩と歌との道ばかり詞の異なるのみにてその趣全く同じ、人情同じきが故なり」とか「和歌は人丸赤人の外業平を上手とすべし」などの意見を述べた程で、さすがに一隻眼を有してゐた。文學が人間の情趣を主とし、國家や領域を超越するといふ博大の見識は貴ぶべきであるが、國民文學といふ特殊性の存在を説かないのは委しくない。それはさし置いて和歌世話の如き古歌の評釋を試み、古今集を書寫し、柳澤侯の記室となつてゐる時代には、その邸に開かれた歌會に臨み、幕府の和學方北村季吟等と同詠した。その作が元祿十五年から寶永二年までの柳澤家兼當集に載つてゐるものだけでも四十二首ある。その外に詠じたものも相當あつたであらう。その裔孫傳君の手許にも別な歌が數十首ある。得意の吟といはれてゐる。我が門の五もと柳枝たれてながき日飽かぬ鶯の啼く

の如きさすがに面白き作である。柳澤保山公が松平の稱號を賜つた時松有
 歡聲の題で諸人の獻詠した中に徂徠は

うつし植ゑて軒端に高し萬代のはじめを告ぐる宿の松風

と詠じてゐ、兼當集の中には

うき雲のひまもとめきて玉すだれ枕涼しくやどる月影(夏月涼)

の如きもある。古文辭學を興したほどの宏才は餘技としても斯の如き什を
 作つたのである。享保十三年六十三歳で歿した。

八、太宰春臺

堂上家の下
 風に立つた
 嫌ふ

獨語

徂徠門下の春臺は双親の感化によりて幼時より歌を詠じたが、當時は堂上家
 に就かねば名を成すことが難く、よし又名を成しても終始その下風に立たね
 ばならない時世と觀じ、歌を捨て、詩を學んだと自ら言つてゐる。春臺は延
 寶八年の産れであるから戸田茂睡や契沖の學説は親ら讀んだか否かは不明
 であるが、時代から云つてその影響を受けたと見るべきである。その隨筆獨
 語は幕府が出版を許可しなかつた本であるからその成つた時代は明でない
 が、少くとも元文以前かと思ふ。堂上家で歌の神さまのやうに信じてゐる定

和歌の復古
 を主張す

和歌と唐詩
 とを比較す

家卿を貶し、歌人の準としてゐる新勅選定家集を斥けて、今公家の人々和歌の
 道を古に復すべきことを思はずして五百年來定家卿の教を守り道の衰へゆ
 くことを知らず、至りて歎かはしきことなり」と堂上家を誹つてゐる。茂睡は
 主として制詞を非難した。三之以下古學者はいづれも傳授祕事を斥けた。
 長流や契沖は公卿堂上の忽にしてゐた古典研究に従事し大きな業績を遺し
 た。これらの提唱や研究と相俟ちて自家の見地から公々然と詠作に關する
 所信を披歴し、堂上一般の風習を非難し和歌の復古を主張したのは春臺を以
 て始とすべきではあるまいか。長流や契沖の時代には古典の研究と詠風と
 はまだ一致させなかつた。長流が作には京極派の色彩や長嘯子の歌風が力
 強く働いてゐる。契沖は定家の歌ははかなく詠むといふ主張を信じてゐた。
 春臺は和歌の上にも漢學に於けるやうに復古を唱へた。それには師の詩歌
 同趣説に基いて、萬葉集の歌は風雅より漢魏の古詩までを兼ねて稍、盛唐の詩
 を孕めるものなり、古今の集は正しく盛唐の詩なり、後撰拾遺の二集は盛唐の
 詩を交へたるものなり、後拾遺より新古今までは中唐の詩を交へたるものな
 り、新勅撰より下つ方はいふに足らず」と和漢の比較をなし、俊成・定家の歌道が

板行を禁じ
られた

行はれて萬葉及古今の風が廢つたことを慨し、萬葉と三代集を千遍讀誦すること
を唱へてゐる。斯ういふ堂上家の攻撃は事體を紛纏させることを顧慮
して出版を免るさなかつたであらう。併しこの考は後久しからずして賀茂
眞淵によつて一層強張され實行されるに至つた。そうして近世和歌史上に
於ける一大變遷を生ずるに至つたのである。但し春臺はこの主張に基いて
新しい國詩を創作するに至らなかつたのは議論家と實際家との境を踏えな
かつたのか、或は斯く唱へながら歌壇の趨勢を轉回するは難しいとして再び
手を下さなかつたであらうか。兎に角歌の圃以外から斯の如き説の唱へら
れるに至つたのは時世の目覺といふべきであらう。春臺は延享四年に六十
八歳で歿した。

第二十二 荷田春滿

國學を創す
る啓

圓珠庵契沖に繼いで大に古學を唱道し、格律の學と詠歌の道とを興隆すべき
ことを提言し、國學の學校を創立することを目的としてゐたのは荷田春滿で
ある。春滿は伏見の稻荷の祠官信詮の二男で家學を傳へ、一方には國史律令

國家的大雅
な起すを目
的とす

の學に長じ、一方には歌學和歌を學んだ。貞享元祿の文學復興期に直面し、漢
學の隆昌にひきかへ皇國の學を修むべき學舎のないのを慨き、幕府の當路を
動し允許を得ながら、その設立を見ずして歿したのは頗る遺憾とすべきであ
るが、その主張や面目は創國學啓に明かに見られ、後人をして奮起せしめるも
のがある。格律之書泯滅復古之學誰云問、詠歌之道敗闕大雅之風何能奮とい
ひ、萬葉集者國風純粹、學焉則無面牆之譏、古今集者詠歌精選、不知有無言之誠と
いつてゐるので春滿の主張は明白である。契沖の書を読みその感化を受け、
更に家學の國史律令を并立させて國家的大雅を起すのが志であつて、その歌
の研究は萬葉に溯るが詠作は古今を準としたのである。萬葉につきては和
假名訓や改訓抄や歌人録や問答抄や童子問、僻案抄等いづれも未完のもので
あるがいろ／＼と着手し、その他古今和歌集割記、古今六帖考、伊勢物語童子問
等歌書の研究があるが、爰には創作の方面を明にするを旨とするが故にそれ
らの學者や門人の聞書に就ては省略する。橘經亮によれば春滿は九歳の時
稻荷山けふは小鳥の音をたえておとするものは谷川の水
の作があつたといふ。慈母深尾貝子の訓も與つて天才を發揮させたであらう。

上田秋成の撰んだ春葉集は歌数が約七百首でその所詠の全いものではない。集中雑の歌が二百首以上あること、戀の部のないのが人の注意を惹く。春満は氣概のあつた人で戀の歌を詠むことを嫌つたといふ。これは三輪執齋とその揆を一にしてゐる。

春満の歌を詠むことを嫌つたといふ。これは三輪執齋とその揆を一にしてゐる。

戀の歌を詠まず

伴蒿蹊の推獎

歌會に戀の題が出た時はそれを雜に詠んだ。例へば寄虎戀を

仇むくう思はてすにたぐへては虎もつたなきものところ見れ

と膳臣巴提使が虎を退じて愛子の仇を復したことを詠んだのは有名な話で、伴蒿蹊の如きはこれを非常にたゞへてゐる。尤もこの集の中草鳴時雨床などの歌は戀歌と見做すならそれともとれる。整理されない歌稿にはいかゞであらうか。うら若い時と年とつての作は、人にもよるが多少の變化があるべきである。一人でいくつかの集を出してゐればその時々の変化や展開が

荷田春満筆(難波津に據る)

主觀的詩人

分るが、一つに整理してしまつてそのもとの稿本が見られない場合にはこれを知ることが困難である。野村八郎氏の近く得られた一本は板本の春葉集よりは歌数が多といふ。

板本の春葉集によると春満は主觀的の歌人であつたやうである。自然をそのままに見つめてその心に印象したものを謠ふよりは人事にとりなす傾向が多い。そうして情趣といふよりは理智に傾いた分子が勝つてゐる。随つて教訓の意を寫してある作が多い。

ならふなよ兎に角に世の人心ふた面なるこの手かしはに(柏)

石上いそがぬわざに世々のふみ見むとて年をふるの中道(徑)

仰ぎ見よ傾くかたの中空にてらす光もさかりありとは(晝)

以上三首の例に見る如く題詠であつても、餘人の詠するが如く柏の茂つてゐるさまとか、徑の苔の滑かな状とか、晝間の光景などを謠はず、これを人事や教訓にとりなしてある。斯る例は極めて多く、一々引くに堪へない程である。春満は自信が篤く抱負も高かつたことは次の諸詠でも明かである。

なみ／＼の世には見えじな片淵のかたくるしくも人は云ふらむ(淵)

自然のものを人事にとりなす

なみくの世には見えじな知られじな風に靡かぬ底の玉藻は(藻)
我ならでかけの垂尾のたれか世に曉つぐる聲を待つらむ(鷄)

これらも自然のものを人事にとりなし自家の見地を示してある。同族駿河守に送つた状にも「我等中院殿清水谷殿などにも弟子になり申さず候わけも家傳を一つ興立申度所存候故ケ様に歌すき候へども公家の弟子に成不申候」と述べてある。公家の型に囚はれ縛られるのを嫌つて家傳を立てるといふところに春満の面目がある。併し興立しよう云つてゐる家傳に就ては具體的に何物をも述べてない。

述懐

位山高嶺の松もあるものを麓もしらぬ谷の埋木(述懐)

恵むべき人さへ我を忘れ井の住むかひもなき身にはなりけり(井)

朽木にもたとへまうきは我身かなつひに花さく世をし知らねば(朽木)

千年つむことは思はず身をやすく世にすみの江の松やたのまむ(松)

いづれも志の遂げられないのを慨いた作である。但し後の一首は晩年の作かとも考へられる。春満は古典研究に力を盡し古代に憧憬をもつてゐた。迷ふとも雪のふる道あともめむ及ぶ心の駒をしるべに(駒)

古代を憧憬す

儒佛を排す

知る人も人はまれらのなら葉のそのふることとは世に傳へても(楡)
梓弓まゆみもあれど槻弓のいさをしき名の神代しぞ思ふ(弓)
笹竹の大宮ごとく六つの絃のむかしにかへす音こそ世に似ぬ(琴)
これらも物を假りてその志を述べてある。又支那崇拜を斥け佛教の非を鳴してゐる。例

ふみ分けよ倭にはあらぬ唐鳥のあとを見るのみ人の道かは(書)
彼の岸とたのむもはかな誰もこのうき沈む間の中にすむ身は(岸)
四季の歌にも相當よき作もあるが、以上の如く雑の歌にその特徴は認められる。修辭として序を用ひ反覆法を使ひ一句切などを試みた例が少なくない。また「とにかくに世の」見むとて人を「の如く意義の兩句に跨るものも少なくない。春満の歌は力のある素樸な萬葉風でなくて古今より新古今の間に範を取つて主我的理智的の傾向を有してゐる思想歌が多い。

第二十三 古今主義と新古今主義

偉大な作家が出て優れた集を遺すときはその流風は遠く後世にまで及ぶも

加藤枝直

古今を無二
無三となす新しい古今
主義治世の音と
衰世の音歌の委古今
を論ふ詞

のである。これと同じく特別な歌學説が作家に影響を與ふことも否むことは出来ない。長流契冲等の先覺が出て復古を唱へ萬葉の研究が漸く盛になつて來た後、堂上派でなくしてこれを斥け、ふるの中道である古今集を唯一の標準となすべき説を主張するものが出た。これは幕臣加藤枝直である。枝直は後には縣門の一人となつたが、眞淵よりも年齢が長じてゐて眞淵の出府以前に歌壇の一權威であつたのである。始は新古今風を好んでゐたが、稍くその非を曉り、これを斥け、古今集を無二無三のものと信じこれを唱道するに至つた。これは堂上などのそれとも異なるものがあるからこれを新しい古今派と命名して然るべきと思ふ。茂睡や契冲の説を見てゐて、祕事口傳制詞を斥け、歴史的の假名遣を準據となしながら、萬葉を斥けてゐる。その理由としては、人麿、赤人等は唐の詩賦の影響を受け、文飾に流れてゐるといひ、大伴家持が歌を分類するに方つて支那風の名稱を用ゐ、本邦上古の名稱を失はせたと非難を試み、また文學には治世の音と衰世の音との別がある。千載集以下の撰集は衰世の音であるから廢斥せなければならぬと云つてゐる。これが思想の根柢は、儒教思想に基づいてはゐるが、それは堂上派の古今集主義

松宮觀山

渚の玉と和
學篇

新古今主義

とは違ひ極めて自由な立場にあり、和歌の史的變遷を見て云つてゐるのである。その説は後の歌人に一種の影響を與へてゐることは疑のないことと思ふ。枝直のかくの如き主張をなしたのは元文二年のこと、その著歌の委古今を論ふ詞に明かである。

これに對しその友人で兵學者として武士道の鼓吹者として山鹿素行を小さくしたやうな松宮觀山(名は俊蒨)は新古今主義を奉じてゐた。觀山は寛延元年和歌渚の玉といふ撰集九卷を撰びて公にした。その序文にも新古今を長と稱贊してゐる。又枝直が千載集から新續古今集まで十五代の撰集は衰世の調であるとの言説に對し、和學篇一編を著し、公・私・雅・俗・國體・時勢と項を分ちてこれを駁し、上世は質なるも後世に至るに従ひ文となつてゆく。文質彬彬は君子の道であるから新古今は華であると云つても斥けてはならないとこれを辨じてゐる。この兩主義の對立は後の歌學者及歌人に影響を及したのである。

然らばこの二人者がその創作をするに方りて主張通りの主義に由つたかといふに、觀山は渚の玉にも自作を入れてゐるが、歌人を以て居ないし格別の新

あづまうた

味はない。これに反して枝直は學問を以て用ゐられた幕府の與力であるが歌人として相當の地位を有してゐたからその集を考察すべきである。枝直の集はあづまうたといふ。その歌風は新古今風より古今集に移つた二期があるべき筈であるが、初に入つた風は容易くぬけがたいもので、集には新古今風の作が多いやうに見える。それも新古今に倣つて一つの技巧を用ゐた作か金葉集などの一ふしある作が多い。

世は春になりけるかな消のこる雪にやつれし山も霞みて
ゆく春は何のいそぎに山吹の花のさかりも見はてざるらむ

今はとて野邊の蟲の音鹿の聲いざなひ立て、秋ぞ暮ゆく(九月盡)
の如きがその代表作であらう。

梓弓いそ山櫻風ふけば雪に棹さすあまの釣舟(海邊花)
の如きは初期時代の作であり、

天の原照る日に近き不二の嶺に今も神世の雪はこのれり
秋の夜の月影白ししら櫂の枝にも葉にも霜と見るまで

の如きは元文以降如若しくは眞淵に從つた時代の作かと思はれる。枝直の

あづまうたは自稿本と板本とは歌の撰擇が幾分相違があるが、その所説の如く純古今風ではない。枝直は眞淵よりも長生し天明五年九十四の高齡を有つたが、他の縣門諸子の如く古語を詠み入れること少く、萬葉の古調をとるものは殆どない。子千蔭ありて眞淵の歿後江戸歌壇の中心となつたことは後に説く。

第二十四 荷田在滿と國歌八論

春滿の國學創立は土地の撰定も終つたほどに進んでゐたが、その長逝によつて忽ちその事が沙汰止となつた。その甥で家學を繼いだ東之進在滿は養父の歿後幾程もなく田安中納言宗武卿に聘せられた。宗武は八代將軍吉宗の二子で門地が高く、天資英俊にして學を好み頗る古典趣味の人で、在滿はこの人に由つて古典を究め格律の學を起さうと志したのである。元文三年櫻町天皇の大嘗會を行はせられた時、大禮の記録を作るやうに卿から命じられ上洛したが、重服があつて宮城に入ることが允されなかつた。そこでいろ／＼聞き繕ひ且は古典に正し古來の沿革を考へ添へて九卷となし、その大要を門

田安宗武卿
と荷田在滿
元文三年の
大禮記録

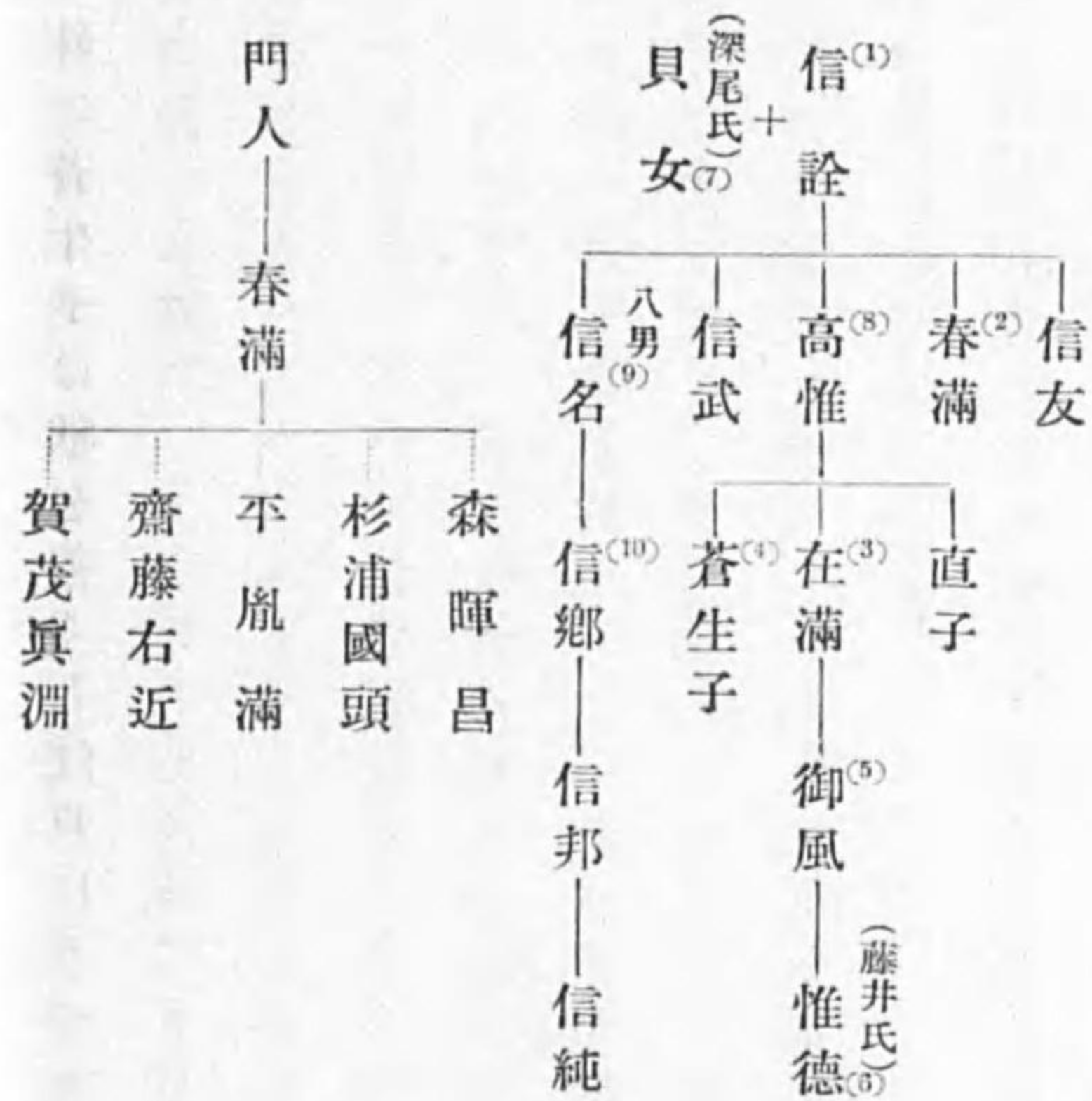
人の請により元文四年大嘗會便蒙と題して出版したことが問題を惹起し、遂に寛保元年に至り朝儀の記事を刊行することを全く禁止するとの幕命が發しられ、大嘗會便蒙は絶板を命じられ、在滿も田安家を退かねばならぬ破目に陥つた。これは公武の間が裏面に相反撥してゐた事相の一のあらはれと見るべく、春滿の志が終に達成出来ないことになつて了つたのである。然るに詠歌の道に關して在滿が田安家を去る前に宗武卿から歌道に關する意見を徵せられた。在滿はかねて考へてゐたところに基き、勿々の間に歌源・翫歌・擇詞・避詞・正過・官家古學・準則の八條に分ちて意見書を上つた。これが有名な國歌八論で、この書が批評に批評を生み近世歌論の勃興を來たし、延いて和歌史にも一時期を劃するに至つたのである。在滿は茂睡・契冲の説いたり行つたりした跡により、養父の所説に基きて秩序立て、前者よりも一層劃切に堂上派の弊風を指摘した。制詞を設けたり古典と相違した假名遣を用ひたり、古今傳授をことごとくしくするのをこき下したりする外に、詩歌古今の沿革を考へ和歌を神佛儒の三教に結びつけて治教の具となす説を斥けて、質から文に移つてゆく世の状態や和歌のこれに伴つて變つて來た相を見て、當時に

於ては畫家が繪を樂むやうに歌人は歌を娛樂の爲に作るのが本體と考へた。今日の語で修飾して云ふならば藝術とし弄ぶといふやうな意見を立て、然らば洗煉を重ね技巧を重ねてある新古今集を標準とすべく、新古今時代では俊成でも定家でもなく、後京極攝政の作を則るが宜しいと、その主張を大膽に述べたのである。養父は古今集は詠歌の精選と云つてゐるがその説に據らず、別に新古今主義を高唱した。萬葉を考究したり古學を興すことは契冲や春滿と同様である。併し詠作はそれと一致させるまでにはいづれもゆかなかつたが、萬葉集に最もかけ離れてゐる新古今を準とするところに在滿の新しい意見が存するのである。

この考に對し古典趣味が深く、雅樂を研究すると共に從來武家の式樂であつた能樂を全廢して家臣と共に雅樂を舞ひ奏でて樂しむといふ田安宗武卿は詞華言葉を旨とする新古今主義に同意するのにはあまりに懸け離れてゐた。そこで國歌八論餘言を著し、その見を異にするところを示され、在滿は再論を作つて更にその主張を述べた。春滿に學んだ賀茂真淵は在滿に代つて田安家に聘せられるに及び、八論の批評に關し卿と真淵との間に論議を繰返され、

後には大菅公圭伴蒿蹊本居宣長荒木田久老その他の人々により八論の批評に批評を生んだことは歌學史に説いたから爰にはそれを省く。在滿の歌は村田春海が集めた荷田在滿歌等に遺つてゐるが、學者であつて歌人を以て自らなかつたであらうが、多くは遺つてゐない。

荷田氏略系



- (1) 元祿九年
- (2) 元文元年六十八
- (3) 寶曆元年四十六
- (4) 天明六年六十五
- (5) 天明四年五十七
- (6) 文政十年六十三
- (7) 享保四年七十三
- (8) 元祿十五年
- (9) 寬延四年六十七
- (10) 寬政十二年

荷田蒼生子の杉のしづ

眞崎の宿の梅

その妹の蒼生子は歌を善くし、江戸にうつり住んで諸大名の奥向に招かれ歌の指南をしてゐた。家集杉のしづ枝二卷が板になつてゐる。在滿の子御風も歌を詠んだが歌風は父に似てゐる。尙一門には蒼生子の従妹に眞崎があり、濱松諏訪社の大祝杉浦國頭の夫人となつたが宿の梅といふ集を遺してゐる。その他荷田信美等の人もある。

はるかなる山のはつかに残る日の影もしぐるゝ雲の一むら 在 滿
 見し世には似るべくもあらぬ春ながら月のあはれぞ變らざりける 蒼生子
 白雪の花をまじへてふる雨は積らすともたれなげに見む 眞 崎

第二十五 賀茂真淵

寛永の末年に萬葉集が印行されて後約三十年、下河邊長流・契冲等の先輩によつてその研究が起り、古典へのあこがれは學徒をして飛鳥寧樂の昔に溯らしめるに至つた。それより約六十年の間にはこの方面に關し有益な注釋などが大分世に公にされるやうになつた。併しいづれも皆それを古典として鮮

明するに止まり、更にこれを自家の詠風に採用する人は無かつた。然るに賀茂真淵が出て、これを自家創作の規範となし、大にその風を鼓吹してから忽ちその盛行を來たし、從來の歌風をして一變せしむるに至つた。實に真淵は近世に於ける和歌史上に一時代を劃した人である。

母の許にて
萬葉の歌を
誦む

真淵は遠江濱松郊外伊場村の神官の家に生れた。父は定信といひ母は竹山氏といふ。歌意考によると、真淵は極若い時母の前で「旅人のやどりせむ野に霜ふらば我子はぐくめ天のたづむら」ながらふるつま吹く風の寒き夜にわがせの君はひとりかぬらむ」ますらをと思へる我も水莖の水城のうへに涙のごはむなどの萬葉の古歌を誦み習つたと誌してゐる。竹山氏はいかなる修養のあつた人か明かでない。父が神官で京都などとの交渉もあつたので、萬葉集も早く手に入れたのかも知らぬ。それにしても小倉百首などと違ひ、萬葉の古歌を幼時に讀誦したといふのは誠に珍しいことである。真淵の筆に間違がないのなら兩親の中に萬葉を愛讀してゐた人が無ければならぬ。この消息が一向に明でない。真淵は京都遊學時代には師の教に従ひ、中古殊に新古今風の歌を誦んでゐたかと思はれる。萬葉風の歌を誦み始めたのはいつ

眞淵が萬葉
風の歌をい
つより誦じ
たか

の頃よりであるか、極めて緊要な問題であるが判然しない。享保十八年より元文元年まで四ケ年間伏見にゐて親しく春滿翁に従ひ師の逝去によりて京畿の地を辭して元文三年江戸に出で帷を下したが、その當初は萬葉振を教へてゐたかは疑問である。それから上野の一品宮の御下間に奉答したり、尋いで田安家に仕へた頃には既に萬葉風を唱へてゐたと考へられる。互に古典趣味の深い宗武卿と眞淵とは氣分がしつくりと合つたことゝ考へられる。八代將軍の血をうけて英發な卿は世にかはつた何物かをなさうとしてゐられる時に眞淵を得られたのは文藝上に於ける明良の際會であつた。眞淵の學風の大勢は侯の庇護の力が與つて大きかつたことは看過することは出来ない。

眞淵は初め參四といつた時代に漢學を徂徠の門人の渡邊蒙齋に學んだといふ。随つて南郭や春臺のものも目に觸れてゐたと思はれる。漢學の方では仁齋や徂徠が出て古義學派や古文辭學派を唱へ、復古の業は成上してゐる。國學に於ては長流、契沖、春滿等によつて萬葉及古典の研究が大に進められてゐるにも拘らず、各人は古今や三十六歌仙集やその以後のものを範にとつて

萬葉を體得した

ゐるのは片手落ちと考へ、萬葉を深く研究しその詞を學びその調を曉り、その時代を知り、その醇雜をふるひ分け、その雄渾なところを喜びその古朴なところを愛し、その自然のまゝなるところを憧憬した。後の世の自然に遠かり技巧を旨とせるものを嫌つて、人麿・赤人・憶良・旅人などを標的としてその作を試み、これを人々に傳へた。徂徠等が漢學の上になしたものを國歌國文の上に行つたのである。眞淵は萬葉考・冠辭考・國意考・語意考・文意考・歌意考・書意考・祝詞考・伊勢物語古意源氏物語新釋等いろいろの立派な著書を成したが、素質の上からいへば學者といふよりも歌人である。古典を研究してその眞率素樸な點をつきとめるばかりでなくこれを實生活に織りなして安住してゐる。濱町につくつた縣居はそれを象徴してゐる。眞淵とその師の春滿とを比べて見るに、春滿は意志の人、理智にたけ世態に慷慨した。眞淵は情の人、茫として悠揚迫らないところがあり、而も操守もかへなかつた。春滿を主觀的詩人とすれば眞淵は客觀的詩人である。同じ題材をとり扱ふにもその趣が餘程違つてゐる。 柚の歌

古典研究を實生活に織り込む

春滿と眞淵との比較

ひかれては世にもいづみの柚木すら朽ちはてぬまぞ頼みなりける(春滿)

蔭高きたかねの檜原柚立てゝとるや雲井の宮木なるらむ(眞淵)
を對照して見るとその差別が明かである。

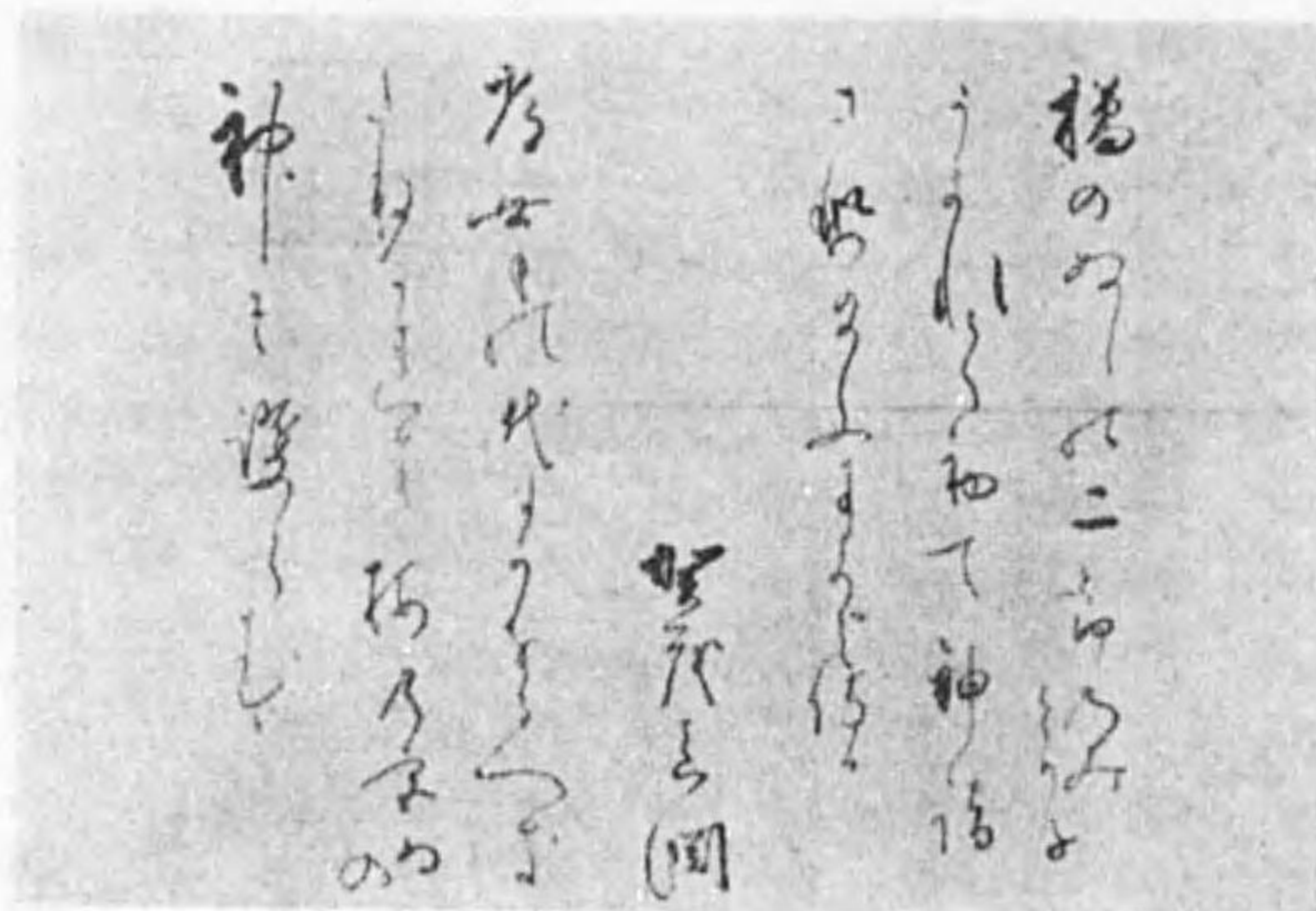
歌壇に恵まれた人

眞淵は妻子と別居を餘義なくされるぐらゐ家庭は恵まれてゐなかつたが、歌壇に於ては頗る幸福な人である。新旗幟を樹てるには一千年に近い京都では因襲の力に制されて思ふやうに行かぬ。

(茂睡梨本集の刊行も京都ではどうであつたであらう。春滿が幕府をたよりにて學校を建てようとしたのも行はれ易い點を考へたか(茂らである。)京風に反對を好む江戸に於て幕府の近親の庇護を得て、丁度行きつまつた歌壇に堂々と新派を唱へたので、都下の歌人、文人は皆これに靡いたのである。

萬葉を始め古典に關する眞淵の研究は一切爰には省き、その歌ばかりに就いて考察して見よう。その家集は門人村田春海の輯めた

眞淵の歌集



賀茂翁家集五楫取魚彦の撰んだ縣居歌文、加藤美樹が撰んで上田秋成が補つた縣居歌集の三つあるが、いづれも完きものではない。併しその中には

を筑波も遠つ蘆穂も霞むなり根ごし山ごし春や來ぬらむ

新田山浮雲さわぐ夕立に刀根の川水うはにこりせり

夕されば海上がたの沖つ風雲井に吹きて千鳥なくなり

日をさへし大河のへのくぬぎ原冬は風だにたまらざりけり

✓ 信濃なる菅のあら野をとぶ鷺のつばさもたわに吹く嵐かな

秋の夜のほがらくと天の原てる月かげに雁なきわたる

の如き諸詠を誦して見ると、いかに自然をさながら謠つてあるかゞ分り、その雄渾と高調とにひどく我等は撃たれるのである。また

✓ には鳥のかつしか早稻の新しぼりくみつゝ居れば月傾きぬ

國つ罪はらふ心の涼しきは天に知られぬ秋にぞありける

枯にける草はなか／＼安げなり残る小笹の霜さやぐころ

の如きも景情のしつくりと合つた佳作である。春海によると眞淵の歌風は三たび變遷してゐるといふ。即ち江戸に出ない前の中世風の歌と萬葉風を

歌風三たび變遷すといふ説

唱へた時代の歌と晩年に古今風の優美を加味した時代との三期があると併し三期あるといふのは如何であらう。早く書集めて置いた歌は自ら焼き棄てられたとあるから後年の作とは歌風が異なつてゐたと想はれる。集に收めてある

ふる雨に早苗をうゑて國の名のみづほの秋をまつぞ楽しき(夏祝)

年ごとにけふの葵をかけまくもかたじけなしや賀茂の氏人(賀茂祭)

の如きは賀茂の川水に收めてある近體四首に似通つてゐて早歳の作かと思はれる。また

百くまのあらし箱根路こえくればこよろぎの磯に浪のよる見ゆ(磯)

の如きは金槐集の沖の小島の歌を模したもので江戸に出た頃の作かと思ふ。

集中に前後相雜つてゐるが、延享前後の二期に分けるが適當であるまいか。

眞淵は萬葉風を唱へてゐてもその古風の眞率素朴と共に優美高雅なものは

始から絶えず取り入れたらしい。「都人かも」さね來む「咲きつぐ」雲きらひ「月

おしてれり」などの古語を用ゐると共に新古今の花やかとこころも取つた。

播磨鴻せとの入日の末はれて空よりかへる沖の釣舟

延享前後の二期に分つべきか

大井川若葉涼しき山かげのみどりを分くる水の白波
 うら／＼とのどけき春の心より匂ひいでたる山櫻かな
 思ふ人こてふに似たる夕かな初雪なびくしのゝをすすき

の如きは名詞留や第四句に花やかな秀句を用ゐたりしてゐるのは萬葉調の歌とは趣が變つてゐる。これらが必ずしも晩年の作とも云はれない。前に挙げた葛飾早稻の新しぼりの歌や天の原ほがら／＼の歌は明月の夜に縣居で詠じたもので中頃の作ではない。眞淵は大名の奥方姫君などを弟子に多くもつてゐて、それらの人には古今の優美な歌も勸めてゐて、自らも雄渾なものも優美なものも併せ詠んでゐた。中頃よりは晩年に進歩を見るは自然のことながら三期に分けるは春海等の私見であるまいか。正岡子規が日本新間に載せた歌人に與ふる公開狀中に、眞淵は存外萬葉の分らぬ人と呆れ申候といひ、萬葉以後の第一人と推奨した實朝を猶褒め方が足らずといひ、その家集中には萬葉の風骨を得ない作があるのを指斥してゐるのは萬葉一點張りの子規には満足が出来なかつて、殊更にその聲を大きくしたのである。眞淵は短歌には以上兩方面があるが擬神樂催馬樂歌の如きは七八百年來詠み試

擬神樂歌擬
 催馬樂歌

みなかつた古風のものである。

埼玉の里のとねらが作る木棉神のみてぐらを結びてけるかも清き白木棉(神歌樂)
 武藏野や豊島の畠にまとしまの畠に芋ひく翁ハレその芋たばれ(催馬樂)
 引くしも易ければ參るこそ易けれ芋もる神もハレ其やすみあへ

古詞をとるは易いが古調を模して眞を得ることは難い。二十餘首の中これらは佳作である。

眞淵の歌壇に盡した功績の今一つは長歌を奨勵し、よく萬葉の風格をよみ得たことである。近世に於て長歌を多く詠んだのは見樹院立詮に始まり長流契沖に至つて一段の進歩を見たといつても、いづれも古今調のものに過ぎなかつたが、眞淵に至つて上代長歌の蒼古雄健の趣をよく體得したのであつて、萬葉以後始めて眞淵ありといつても過言ではない。集に收めたもの二十二篇近葉菅根集にはこれ以外のものが少し加つてゐる。中に大和吉野富士嶺嶺蝦夷島の如く國土風景を詠んだものが多く、他は慶弔に關する作である。中に想の面白いのは田安の殿の御賀に杖奉る歌である。

葛城や一言ぬしの神のます 森のさか木を 鶴じもの うなねつ

上代長歌の
 格調を體得
 した

きぬき、倭文機の 幣とり向けて 我君の 御杖にとりき
けふの日の 御壽の庭の 庭すゞめ うすづまりゐて 百千々の 言
もなにせむ

萬代に いませ我君と 一言まをさも 一言まをさも

よきことを一言ぬしの大神のさちはひまさむ杖たてまつる

句調のすぐれてゐるのは新田家夫人をことほぐ歌や侍從横瀬貞隆朝臣の入京を送る歌である。次に新田家に贈つたものを擧げる。

上つ毛や 新田の山は 出立の よろしき山 入立の くはしき嶺か
も 出立てば 君を守る山 入立てば 家を守る山 この家の 世々
に傳へて さちある山ぞ

常磐なす よはひもがもと 垂乳根を 萬代までに 百づたふ 五十

路の宮に 言ほざし 酒ほぎなして 祝はせる ことぞ宜しき

今よりは 新田の山の 新ひ年も いよ重ねむ この家の 母のみこ

との 千歳もる山

たらちねをとほにもる山しめおきて祝ふよはひは限知られず

次に入京を送る歌は

美野の山 小岐蘇の山は 靡かへど 衝けど靡かず かく寄れど 踏

めどもよらず

よしゑやし 靡かずありとも よしゑやし 寄らずとふとも かけま

くも いとも畏き 新ら世を ことほぎまゐる み言をし もちてゆ

く君 ひきゐます 八十伴雄の 馬の爪 岩根ふみさくみ 鈴が音は

山ゆきとほし 平らけく 安けく踰えむ 岐蘇山み野の山

大岐蘇や小きその山の岩がねも靡きよるべき旅にやはあらぬ

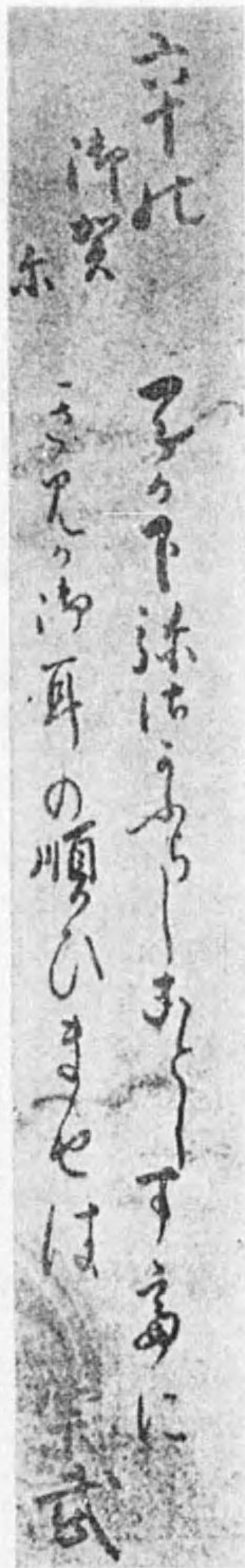
の如きも想も調も語もよく整つてゐる。長歌撰格を著し古學者流の長歌を
非難した橋守部の如きも以上の歌は佳作と認めてゐる。明和六年眞淵は七
十三の壽を保つて東海寺少林院の奥域にとこしへの眠に就いたが、その門下
の濟々たる多士は師の教をそれ〴〵に傳へて古學と古調の歌とを全國にひ
ろげた。

橋守部も非
難しない

第二十六 田安悠然公の天降言

眞淵に親炙した人々の中にはひたすら蒼古遒勁の調を模したのもあれば優美高雅の什を喜んだものもある。田安宗武の如きは第一に屬するもの、筆頭である。卿は樂律服飾等に關する著作があり、和歌は始め家臣狛諸成の教により新古今風の歌を詠んでゐたが、眞淵に就てよりは紀記萬葉の歌風を庶幾された。家集を天降言と名づけたのがいかに中古の技巧を嫌つたかを示すに足る。眞淵を用ゐた時は齡方に三十一、血氣の盛な時でその歌も氣の

天降言



田安宗武の筆(徳川伯爵家藏)

勝すぎた趣がある。眞淵が萬葉以後唯一人の歌人とたゞへた鎌倉右大臣と歌風の似たものがある。學ばざる人を憂へて詠んだ中には天地の恵にある、人なればあめの命のまに、をへや學ばでもあるべく有らば生れながら聖にてませどそれ猶し學ぶの如きがある。鷹の歌には

ふる雪にみ笠も召さず皇子たち御狩せすなり御鷹つとめよ

ふる雪にきほひ狩する狩人の熊のむかばき眞白になりぬ

の如きがある。これらはその作風を代表するものであつて、萬葉以往を準としてゐたことが分る。在滿の國歌八論を批評したり、眞淵と歌論を闘したり、冠辭考の批評を著し、貝原益軒の大和本草の誤を指摘したり、學者歌人と學藝の批評をかはすといふ如き當時の一般の殿様とは大に趣を異にした。卿の歌には古拙を喜んで雅馴を嫌つたかの如く見える作が多い。

ものもなさで世にふる人はへら鷲のむなるざりすに猶おとりけり

武藏野を人は廣しとふ我はたゞ尾花分けすぐる道とし思ひき

の如きはそれである。卿の歌には自然物の美しいところをさながら謠はずこれを人事に交渉をもたせて謠ふやうな傾向がある。例へば

あした昇り夕べまかづる宮人のいへに宜しき朝顔の花(朝顔)

わが戀ふる妹が垣根の女郎花白露おもみかたぶくもよし(女郎花)

百代ふる翁の舞のたちつるつをがむ御前の竹なびくなり(竹)

和歌は童心にかへれといふ訓言がある。修飾や技巧にゆき詰つた歌壇には

萬葉以往を準とする

童心にかへつた作